

合格へ導く英語長文

Rise

読解演習

杉田直樹 著

4

最難関編

東大・早慶上智レベル

はしがき

■ 合格へ導く 英語長文 Rise 読解演習

大学入試の英語では、長文問題が最も多くの比重を占めています。近年の入試問題は、英文の語数増加や扱うテーマ・文体・設問の多様化などにより、これまで以上に総合的かつ複合的な読解の力が求められるようになっていっていると言えます。

『合格へ導く 英語長文 Rise 読解演習』シリーズは、近年の入試で必要とされる長文問題の総合力を段階を追って着実に身に付けることができる長文読解問題集です。英文の文構造や全体の論理展開を正確に把握・理解する力はもちろん、「読めたつもり」ではなく「読み取ったことを答案として正確に伝える」ことを目指した良質な演習を重ねることで、志望校の合格を確実につかみとる実力を養成することができます。

4. 最難関編

本編は複雑な構文の和訳やかなりの要約力を要する内容説明問題、段落ごと及び本文全体の内容の正確な把握を問う内容一致問題を中心とした、最難関大学合格のための実戦力総仕上げとして編纂されたものです。日本語であれ外国語であれ、私たちが文章というものを徹底的に精読する機会というのはそうあるものではありません。その意味で、問題英文の選定にあたってはそのテーマ・内容を最重視しました。同じ受験勉強であっても、皆さんが格闘しながら熟読した英文内容のいくつかが何らかの糧として後まで皆さんの中に残ることを願ってのことです。本書でこだわったもう一点は「論理的思考の訓練」です。外国語の精読は特に推理力、文脈把握力の養成に効果を発揮します。難関大英語入試問題の狙いの多くは、高度な英文内容を正確に把握できる英語力を前提に、こうした論理的思考力と日本語の操作能力（manipulation）を試すもので、本書の設問・解説のほとんどはそこに特化したものです。皆さんのお役に立てることを願ってやみません。

最後になりますが、本書制作にあたり、Z会の野上彩子さん及び編集スタッフの方々にいろいろとご尽力いただきました。心より感謝いたします。

杉田 直樹

CONTENTS

本書の構成・利用法	5
-----------	---

Unit 1

1 [文化] お茶の水女子大学 生活の儀式化	10
読解 PLUS+ONE	16
2 [心理] 東北大学 冗談のもつ実存的な意味	17
読解 PLUS+ONE	23
3 [歴史・文明] 大阪府立大学 人間と二足歩行	24
読解 PLUS+ONE	31
4 [言語・コミュニケーション] 上智大学 言語多様性の重要性	32
読解 PLUS+ONE	39
5 [言語・コミュニケーション] (チャレンジ問題) 名付けることの意義	41

Unit 2

6 [教育・学問] 新潟大学 子供の成長に仲間集団が及ぼす影響	48
読解 PLUS+ONE	54
7 [健康・医療] 名古屋大学 脳と身体の密接な関係	55
読解 PLUS+ONE	62
8 [思想・哲学] 慶應義塾大学 原爆投下直後のある医師の抵抗	63
読解 PLUS+ONE	69
9 [人間関係] 一橋大学 「友情」のあいまいさ	70
読解 PLUS+ONE	76
10 [心理] (チャレンジ問題) 死の喪失感を克服する過程	77

Unit 3

11 [社会問題] 同志社大学 選択肢の過多が引き起こす問題とその対処法	86
読解 PLUS+ONE	94
12 [言語・コミュニケーション] 東京大学 嘘の社会的機能	95
読解 PLUS+ONE	103
13 [科学・技術] 慶應義塾大学 科学的な説明とは?	104
読解 PLUS+ONE	113
14 [政治・経済] 早稲田大学 貧富の格差と社会問題	115
読解 PLUS+ONE	125
15 [科学・宗教] (チャレンジ問題) 宗教と科学	126

英文出典	巻末
------	----

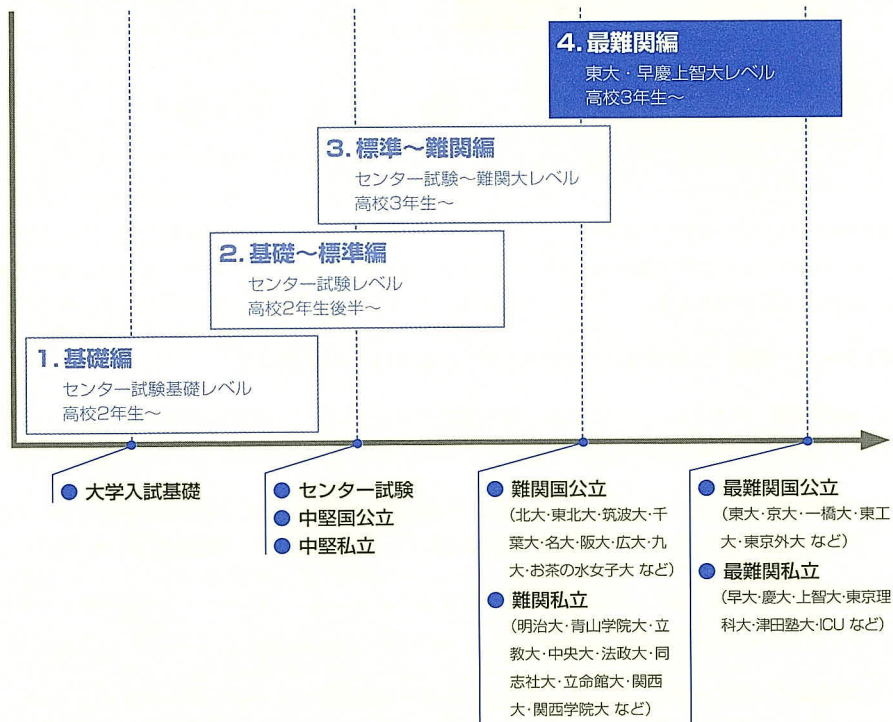
本書の構成・利用法

1.『合格へ導く 英語長文 Rise 読解演習』シリーズとは

本シリーズは、高校2年生から取り組むことができる「1. 基礎編」から、東大・早慶などの最難関レベルの大学受験にまで対応した「4. 最難関編」まで、4つのレベルで構成されています。

ここから読解対策を始める方から、実戦力を完成させたい方まで、志望大合格に必要な読解力を段階的に養成することができます。4つのレベルを通して、または自分の目標や英語学習の進捗に合わせたレベルから取り組んでみましょう。

▼対象レベル・学年の目安



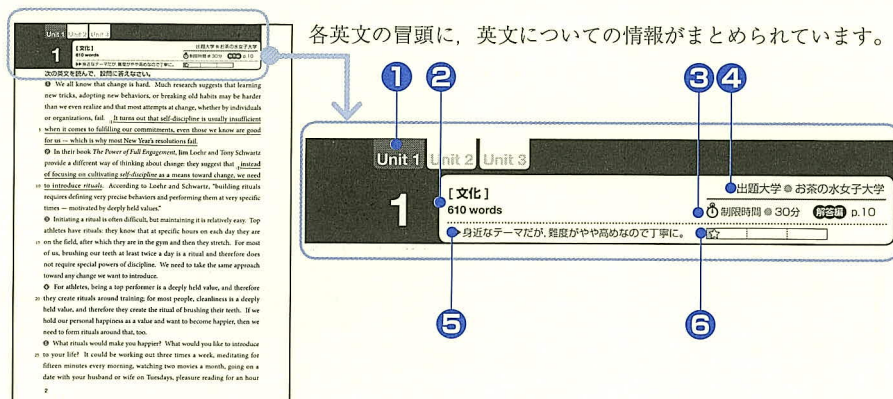
➡「4. 最難関編」では…

- 難関～最難関レベルの実戦的な読解力・解答力を身に付けることを目指す
- 語数の多い英文にも対応できる論理展開をつかむ力を養うことを目指す

2. 構成・利用法

本書は「問題編（別冊）」・「解答・解説編」から構成されています。

問題編



- ① **Unit** : 各 Unit は 5 本の英文で構成されており、全部で 3 つの Unit があります。Unit が進むにつれ、英文や設問の難易度が徐々に上がるように配列していますので、無理なく習熟度を高めることができます。
- ② **テーマ・語数** : 英文で扱うテーマと、英文の総語数の目安です。
- ③ **制限時間** : 英文を読んで設問に取り組む時間の目安を示しています。時間に間に合わなくても、最後まで解きましょう。
- ④ **出題大学** : 英文の出題大学名です。実戦的な読解力を養えるよう、設問は基本的には入試問題を使用していますが、内容理解を問う設問が中心となるよう、一部改変しています。
- ⑤ **取り組みアドバイス** : 設問に取り組む上で気をつけたい点・心掛けたい点が書かれているので英文を読む前に確認しましょう。
- ⑥ **難易度インジケータ** : 英文の読みやすさ・設問の難易度を示すインジケータです。

問題に取り組む上では、まずは制限時間内に解答を出すことを目指しましょう。終わらなかったところは、辞書を使ってもよいので、自分の納得のいくまで答えを考えてみてください。

解答・解説編

問題に取り組んだら、「解答・解説編」で解答の確認をしましょう。問題は解きっぱなしにせずに、不明確な部分は解説や全訳を使ってしっかり復習しましょう。

効果的な復習の流れ



■ 解答・解説

The diagram illustrates the flow of the answer and explanation section. It starts with a small thumbnail of the textbook page, then zooms into a larger view of the textbook page, and finally zooms into a specific section of the textbook page.

Unit 1 生活の儀式化

1 生活の儀式化

物事を変えるのは難しいが、最初は難しくてもいったん定着すると案外容易に持続できる方法がある。それはどのようなものだろうか。

It turns out that self-discipline is usually insufficient (when it comes to fulfilling our commitments, even those (we know) are good for us) — which is why most New Year's resolutions fail.

① 文構造の把握

It turns out that self-discipline is usually insufficient (when it comes to fulfilling our commitments, even those (we know) are good for us) — which is why most New Year's resolutions fail.

② 設問の焦点

It turns out that ... 「(結果として) ... ということになる」

③ 図解

self-discipline 「自己修練(克己心)」・insufficient 「不十分な」

fulfill one's commitments 「約束事を果たす[実行する]」・New Year's resolutions 「新年の誓い[決意]」

It turns out that ... 「(結果として) ... ということになる」

even those we know are good for us 「それらが自分たちにとってよいものであるとわかっている約束事でさえも」thoseは前に出た複数名詞の反復を避ける指示代名詞で= the commitments. あとには関係代名詞 which / that が省略されている。we know は those are

① 英文のまとめ：英文で論じられている主題を簡潔にまとめています。英文のポイントがしっかりおさえられているかを確認する際に参考にしてください。

② 設問の焦点：設問において何を把握する力が求められているかを示しています。

③ 図解：英文の構造や修飾関係などを視覚的に解説しています。

■ 全訳

4

- ⑤ **語句・構文**：その段落に登場する重要語句、注意すべき語句や構文を取り上げています。太字で示された語は特に重要な単語なので、覚えておきましょう。

本書で使われている記号

S: 主語 V: 動詞 O: 目的語 C: 補語

〔 〕「節」であること、または「言い換え可能」であることを示します。

() 「句」であること、または省略可能であることを示します。

doing 動名詞または現在分詞 *to do* 不定詞 … 動詞や節の代用 ～ 名詞（句）の代用

なお、解説の最後には**読解 PLUS+ONE**というコラムを掲載しています。各段落の要旨や段落間のつながりを図解しているので、英文全体の論旨展開を確認しましょう。余裕があれば、100 字程度の日本語での要約にも取り組んでみましょう。

チャレンジ問題

各 Unit の最後には **チャレンジ問題** を収録しています。解答を解答欄に直接記入でき、得点も出せるようになっているので、試験本番のような臨場感をもって取り組むことができます。各 Unit の学習が終わるごとに実力試しとして活用しましょう。

Unit の仕上げとして **チャレンジ問題** に取り組む

制限時間を意識しながら、記述問題もがんばって自分自身の解答を書いてみましょう。

解答を確認，得点を算出する

記述問題の一部には自己採点に役立つ**採点のポイント**が掲載されています。自分の答案を客観的に見ることは実力を伸ばす上でも重要です。

不明確な部分を残さないよう、よくできなかった問題にはもう一度取り組んで復習する

Unit 1

1 生活の儀式化

問題編 p.2

物事を変えるのは難しいが、最初は難しくてもいったん定着すると案外容易に持続できる方法がある。それはどのようなものだろうか。

● 解答 ◀ 正しい答えをチェック

- 1 私たちが決める約束事は、自分にとってよいものだわかっている、いざそれらを実行するとなるとたいへん自己修練が足りないということになり、それゆえたいへんの新年の誓いは失敗するのである。
- 2 儀式的習慣は始めるのは難しい場合が多いが、いったん儀式化すれば（特に特別な鍛錬の力を必要とせず、）それを維持するのは比較的容易であるという特性。
- 3 (c)
- 4 ① are difficult to get rid of
② when good habits are concerned
③ an act but a habit
- 5 (A) 自発性や創造性。
(B) 諸活動が儀式化されないと私たちは他人の要求に対して受動的になるのに対し、生活全体が儀式化されていればかえって自発性や創造性を発揮できる。

● 解説 ◀ 考え方をチェック

1 文構造の把握

図解

It turns out that self-discipline is usually insufficient

s v c

[when it comes to fulfilling our commitments, even those (we know) are good for us]
when it comes to ~ 「(語が) ~ となると」 ^ which / that

— which is why most New Year's resolutions fail.

前節の内容全体を先行詞として受ける

語句 ・ self-discipline 「自己修練〔克己心〕」 ・ insufficient 「不十分な」

・ fulfill one's commitments 「約束事を果たす〔実行する〕」 ・ New Year's resolutions 「新年の誓い〔決意〕」

- It turns out that ... 「(結果として) …ということになる；…だとわかる」
- even those we know are good for us 「それらが自分たちにとってよいものであるとわかっている約束事でさえも」 those は前に出た複数名詞の反復を避ける指示代名詞で = the commitments. あとには関係代名詞 which / that が省略されている。we know は those are

good for us の主語の直後に挿入された SV で「…だと私たちが知っている」の意味を付け加える。

- which is why ~ fail 「このため〔だから〕～は失敗するのだ」 which は It turns out から good for us までの内容を受け、直訳すると「そのことが～が失敗する理由である」という意味。

答案作成上のポイント

when it comes to fulfilling ~ 「～を実行するとなると」の部分で fulfilling の目的語である (A) our commitments とそのあとに繰り返される (B) even those we know are good for us をどう訳すか。あとの even ~ には文脈上、「譲歩的な意味が生じることに注目。」「いざ A を実行するとなると、B であっても～ (ということになり…)」という形にもっていくとわかりやすい日本語になる。

2 内容の把握

下線部(2)は「物事を変える方法として『自己修練』を高めることに重点をおくのではなく、ritual (儀式的習慣) を取り入れる必要がある」という意味。ritual を取り入れることで変化できるのはなぜか、その理由となる ritual の特性を考える。第⑨段落参照。

図解

Initiating a ritual is often difficult, but maintaining it is relatively easy.

〈儀式的習慣への着手 — (しばしば) 難しい〉 〈儀式的習慣の維持 — (比較的) 容易〉

... brushing our teeth at least twice a day is a ritual and therefore does not require special powers of discipline. 《具体例》

答案作成上のポイント

ritual の特性としては第 1 文の内容「始めるのは難しい場合が多いが、(いったん定着すれば)それを維持するのは比較的容易である」を書けばよいが、あとの歯磨きの具体例にあるように、「(いったん定着すれば)特別な鍛錬の力を必要としない」を付け加えてもよい。なお、ritual は「儀式」の意味だが、本文では「もはや儀式的習慣と化した一連の行為」というような意味で使われている。

3 内容の把握

- (a) 「成功は人々を変える。」
- (b) 「成功は野心的な人々に訪れる。」
- (c) 「成功は人々にさらなる成功をもたらす。」
- (d) 「成功は人々が失敗したあとに生じる。」

feed on ~ は「～を糧とする [～を食べて育つ]」という意味。つまり「成功するとそれがさらにまた大きな成功を生む」ということなので、(c)がこの意味を最もよく表している。

4 文脈と語法の把握

- ① 不定詞を用いた S are difficult to ... 「Sは…するのが難しい」の文にする。この表現では主語が不定詞の意味上の目的語になるので, **get rid of** ~ 「~ (望ましくないもの) を取り除く; 廃止する」のように前置詞を伴う句が不定詞の場合, 前置詞が最後に置かれる。全体で「取り除くのが難しい」の意味になる。

Ex. She is hard to deal *with*. (彼女は扱いにくい。)

- ② カッコの前で文が完結しているので, そのあとに SV を続けるには接続詞が必要。よって when で始まる節にする。S は habits, V は are で, C には good も concerned も文法的には可能だが, be concerned 「関係している」として「よい習慣に関する場合には」とするのが自然。なお, カッコの前の and that's a good thing の that は直前の「一般に習慣を取り除くのは難しいこと」という内容を指す。

- ③ 直前の言葉 We are what we repeatedly do. に注意。直訳すると「私たちは私たちが繰り返して行っているものである。」となり, 「人の人格が行動の繰り返しによって形成される」ことを意味している。この言葉の結語として habit と act のどちらに excellence 「優秀さ」があるかを述べるのだから, (not) **an act** but **a habit** 「(優れているのは) 行動ではなく習慣である」となる。

cf. A man's worth does not lie in **what he has**, but in **what he is**.

(人の価値は財産にあるのではなくその人格にある。)

5 内容の把握

- (A) 第⑦段落第1文参照。「儀式的習慣を取り入れるという考えに対する抵抗感」の理由として, because they believe that ritualistic behavior may reduce **spontaneity or creativity** 「自発性や創造性を損なう可能性があると考ええるから」と述べられている。
- (B) 第⑦段落第2文以降参照。最後の Paradoxically 以下の結論を中心に, 儀式化された場合とされない場合を対比しながらまとめる。

図解

... if we do not ritualize activities ..., we become reactive (to others' demands on ~).

「諸活動が儀式化されないと」 → 「私たちは他人の要求に対して受動的になる」

In an overall structured, ritualized life, we ... Paradoxically, the routine frees them up to be creative and spontaneous.

「生活全体が儀式化されていれば」 → 「かえって自発性や創造性を発揮できる」

第1段落

私たちはみな、物事を変えるのは大変難しいということを知っている。多くの研究が示しているように、新しい芸当を身につけたり、新しい行動を取り入れたり、▶1 古い習慣を捨てたりするのは私たちが認識しているよりはるかに難しく、何かを変えようとする試みのほとんどは、個人によるのであれ組織によるのであれ、失敗に終わる。私たちが決める約束事は、自分にとってよいものだとかわかっていても、いざそれらを実行するとなるとたいていは自己修練が足りないということになり、それゆえたいていの新年の誓いは失敗するのである。

▶1 (第2文) 比較級を強調する even

..., or breaking old habits may be *harder* than we *even* realize ...

≡ even harder than we realize

even を realize の前に置くことで「予想外」をさらに強調する（「難しいとわかっているのだが、実際にはそれよりもはるかに難しい」）。

☐ adopt 「～を採用する；取り入れる」

☐ break a habit 「習慣を捨てる」

第2段落

『能力を最大限発揮する力（成功と幸せのための4つのエネルギー管理術）』という共著の中で、ジム・レーヤーとトニー・シュワルツは物事を変えることについて異色の考え方を示している。彼らは物事を変える方法として「自己修練」を高めることに重点をおくのではなく、「儀式的習慣」を取り入れる必要があると提案する。レーヤーとシュワルツによると、▶2 儀式的習慣の構築には、重要視する価値意識が動機となり、非常に正確な行動パターンを定め、それらをきちんと特定の時間に行うことが要求される。」という。

▶2 (第2文) 副詞句としてはたらく過去分詞の句（分詞構文）

... building rituals requires defining very precise behaviors

S

V

O₁ (動名詞)

and performing them at very specific times

O₂ (動名詞)

— motivated by deeply held values

過去分詞の句 motivated by ～ は defining ～ と performing ～ を修飾する（「～によって動機づけられて、～を定め、～を行うこと」）。deeply held values 「重要視する価値（意識）」

☐ full engagement 「（仕事などで）十分能力を発揮すること」

☐ focus on ～ 「～に焦点を当てる：～を重視する」

☐ cultivate 「～を高める；磨く」

☐ ritual 「儀式；儀式的習慣」

☐ define 「～を定める；決める」

☐ specific 「特定の」

第3 段落

儀式的習慣を始めるのは難しい場合が多いが、それを維持するのは比較的容易である。一流のスポーツ選手は儀式的習慣を持っている。彼らは毎日、決まった時間フィールドで過ごし、そのあとジムへ移動してそれからストレッチを行うことを自覚している。私たちのほとんどにとって 1 日最低 2 回歯を磨くのは儀式的習慣であり、それゆえ特別な鍛錬の力を必要としない。私たちは自分を取り入れたいと思う変化に対してこれと同じやり方を用いる必要があるのだ。

☐ initiate 「～(儀式など)を始める:～に着手する」 | ☐ after which 「そのあとで」

第4 段落

スポーツ選手にとっては一流の選手であるということが重要な価値であり、したがって彼らはトレーニングに関していろいろな儀式的習慣を作り出す。同様に、ほとんどの人々にとっては清潔であることに重要な価値があるので、それゆえ歯を磨くという儀式的習慣を作り出すのである。もし私たちが自分たちの個人的幸福というものに価値をおき、より幸福になりたいと思うのであれば、そのことに関してもまた儀式的習慣を形成する必要がある。

☐ cleanliness 「清潔であること:清潔さを保つこと」 | ☐ hold ~ as a value 「～に価値をおく;～を重要だと考える」

第5 段落

あなたをより幸せにするのはどのような儀式的習慣だろうか。あなたは自分の生活にどのようなことを取り入れたいだろうか。それは週 3 回のトレーニング、毎朝 15 分の瞑想、月 2 本の映画鑑賞、夫あるいは妻と毎週火曜日にデートする、1 日おきに娯楽として 1 時間ほど読書をする、などかもしれない。同時に取り入れる儀式はせいぜい 1 つか 2 つにしておき、新しい儀式を取り入れる前にそれらが確実に習慣化するようにしよう。トニー・シュワルツが言うように「野心に燃えて失敗するより徐々に変化するほうがよい……成功はそれ自身を糧とする。」のである。

☐ working out 「トレーニング」 | ☐ no more than ~ 「わずか~;せいぜい~」
☐ meditate 「瞑想する」(名 meditation 「瞑想」) | ☐ make sure (that) ... 「…したことを確かめる;必ず…するようにする」
☐ pleasure reading 「(仕事ではなく) 楽しみ・娯楽としての読書」 | ☐ ambitious failure 「野心に燃えて失敗すること」

第6 段落

あなたを取り入れたい儀式的習慣が決まったら、それをノートに書き留めて実行に移しなさい。新しい儀式的習慣を始めるのは難しいかもしれないが、そのうち、普通はわずか 1 カ月以内で、これらの儀式的習慣を行うことが歯磨き同様、自然なものになるだろう。習慣というものは一般に取り除くのが難しいが——よい習慣に関する場合はそれは好都合だ。アリストテレスの言葉に「私たちの人格は繰り返し行っている習慣によって決まる。したがって、優秀さとは行動ではなく習慣である。」とある。

☐ identify 「～を特定する;決める」 | ☐ in general 「一般に」
☐ as little as ~ 「わずか~」

儀式的な行動は——特に、自分の夫や妻との定期的なデートといった個人間の儀式や、絵を描くなどの芸術的な儀式の場合には——自発性や創造性を損なう可能性があるという考えから、儀式的な習慣にするという考えに抵抗を感じる人もいる。しかしながら、私たちが個々の活動——それがジムでのトレーニングであれ、家族と一緒に時間を過ごすことであれ、娯楽としての読書であれ——を儀式化しなければ、私たちはしばしばそうした活動に取り組みなくなってしまう、自発的どころか（自分の時間や活力に関しての他人の要求に対して）受動的になってしまう。全体的に構造化され儀式化された生活の中では、▶3 私たちは確かに 1 日の各時間の使い方を気にする必要がなくなるし、そのことで自発的な行動のための時間を残すことができる。さらに重要なのは、例えば、儀式化されたデートで自発的に行く場所を決めるといったように、自発性を儀式的習慣に組み入れることができる。最も創造的な人々は——芸術家であれ会社員であれ親であれ——いろいろな儀式的習慣を持ってそれに従っている。逆説的に思えるかもしれないが、その日課が彼らを解放し、創造的で自発的にするのである。

▶3 (第3文) 使役動詞 have の用法〈have + O + 過去分詞〉「～を…される」

... we certainly don't need to have each hour of the day accounted for and ...

(have + O + 過去分詞) 「1日の各時間」 「割り当てられて」

account for ～は「～（全体の一部）を占める」という意味で、don't need to 以下は「1日の各時間を（何をするかに）いちいち割り当てる（気にする）必要がない」となる。

- ☐ be resistant to ～ 「～に抵抗する」
- ☐ ritualistic 「儀式的な」
- ☐ interpersonal 「個人間の；人間関係の」
- ☐ ritualize 「～を儀式化する」
- ☐ get to ～ 「～を始める；～に取り組む」
- ☐ rather than ～ 「～ではなく；～どころか」

- ☐ spontaneous 「自発的な」
- ☐ integrate ～ into ... 「～を…に組み込む」
- ☐ individual 「個人；人」
- ☐ paradoxically 「逆説的なことに」
- ☐ free ～ up 「～を解放する」

● 導入

- ① (ℓ. 1) We all know that **change is hard.**

▶ 物事を変えるのは難しい。

● 本論

- ② (ℓ. 8) ... instead of focusing on cultivating *self-discipline as a means toward change*, **we need to introduce rituals.**

▶ 物事を変える方法として、克己心を高めるのではなく、儀式的習慣を取り入れる必要がある。

- ③ (ℓ. 13) **Initiating a ritual is often difficult**, but **maintaining it is relatively easy.**

▶ 儀式的習慣には、始めるのは難しいが維持するのは比較的容易だという特性がある。

- ④ (ℓ. 21) If we **hold** our personal happiness as a **value** and want to become happier, then **we need to form rituals around that, too.**

▶ 重要だと考えることに関して儀式的習慣を作り出す必要がある。

- ⑤ (ℓ. 28) Introduce no more than **one or two rituals at a time**, and **make sure they become habits before you introduce new ones.**

▶ 儀式化は一度にたくさんやろうとしないで、1つか2つくらいが習慣化してから次の儀式に着手するよう心がける。

- ⑥ (ℓ. 32) **Once you identify the rituals you want to adopt**, write them down in a notebook and **begin to do them.**

▶ 取り入れたい儀式的習慣が決まったら、実行して習慣化する。

● 結論

- ⑦ (ℓ. 40) ... they believe that **ritualistic behavior may reduce spontaneity or creativity ...** / (ℓ. 51) **Paradoxically, the routine frees them up to be creative and spontaneous.**

▶ 行動の儀式化は自発性や創造性を損なうという人もいるが、逆説的なことに、決まりきった日課が人を解放し、創造的で自発的にするのだ。

要約 物事を変えるのは難しいが、儀式的習慣にすることで克己心を高めなくとも比較的容易に継続できる。重要だと考えることに対して儀式的習慣を作り出し、習慣化すれば、私たちは創造的で自発的になることができる。(98字)

2 冗談のもつ実存的な意味

問題編 p.5

ユーモアや冗談はただおもしろおかしいことを言って人を笑わせるだけのものではない。人生のさまざまな場面で、冗談が心理・生理的にどう機能するのか、そのより深い意味について考察しよう。

● 解答 ◀ 正しい答えをチェック

- 1 c
- 2 (ア) ③ (イ) ①
- 3 (B) 冗談を言っている時、私は相手を怒らせないように気をつける。私が言ってきたことの多くはそんなにひどく悪趣味ではなかったと思う。
(C) あまりに絶望的で、その絶望感を取り除くことなど想像もできないような事態だって現実に存在する。
- 4 危機的な状況でも、自分たちはまだ生きているという確信を兵士の言葉で得られたから。(40字)

● 解説 ◀ 考え方をチェック

1 内容の把握

- a. 「私の言うことは家族全員にとって奇妙だった。」
- b. 「私は家族全員より若かった。」
- c. 「家族全員が私には興味がなかった。」
- d. 「私は家族全員が話すことに退屈した。」
boring「退屈な」は bore「～(人)を退屈〔うんざり〕させる」から派生した形容詞で、下線部(A)は「私は家族全員にとって退屈な〔つまらない；うんざりする〕存在だった。」という意味。したがって c が同じ意味を表している。

2 文脈の把握

- (ア) ①「彼らに質問をすること」 ②「彼らの話についていくこと」
③「何かおもしろいことを言うこと」 ④「聞き上手であること」

空所(ア)を含む文の意味は「そういうわけで、私が会話に加わることのできる唯一の方法は～だった」。第①段落では、冒頭で一般論として「どの家族でも末っ子というのは冗談ばかり言うものだ」とあり、筆者の具体例が続いている。特に第1文の because **a joke is the only way he can enter into an adult conversation** に注目。また、空所のあとでは「ある日偶然言っただじゃれが家族の会話を中断させた」とあり、And then I found out that **a joke was a way to break into an adult conversation.** と述べられている。ここから③「何かおもしろいこと (= 冗談) を言うこと」が入るとわかる。

- (イ) ①「笑い」 ②「絶望」 ③「無力感」 ④「驚き」

空所(イ)を含む節の文意は「反応の1つが～であったのは確かだ」で、これは「ドレスデンの崩壊後に防空壕から出てきて崩壊後の都市を見た時」の反応を指す。この部分だけを考えると①～④のどれを入れてもおかしくないが、続く第⑤段落の **Any subject is subject to laughter**「どんなテーマも笑いを免れない(=どのようなことも笑いのテーマになり得る)」, and I suppose there was **laughter of a very horrible kind by victims in Auschwitz**「アウシュビッツの犠牲者には極めて恐ろしい笑いがあっただろうと思う」に注意。ここでは「ドレスデンの崩壊」「アウシュビッツの犠牲者」というともに悲惨な出来事に関して「笑い」が関係している。これに、本文全体のテーマが「冗談あるいは冗談を言うことの意味」であることを考え合わせれば①が入ることはわかるだろう。また、空所の直後の **that's the soul seeking some relief**「それ(=その時の笑い)は多少なりとも恐怖(感)の軽減を求める感情だろう」にもうまくつながる。

3 文構造の把握

(B)

図解

When I'm *being* funny, I try not to offend.

(be 動詞+現在分詞) try not to do 「…しないよう努める(気をつける)」

I don't think (that) much of what I've done has been (in really horrible taste).

S

V

語句 ・ offend 「～(人)を怒らせる, ～(人)の気分を害する」 ・ taste 「趣味; おもむき」

・ in ... taste 「…な趣味で」 (e.g. in good [bad] taste 「趣味がよい [悪い]」)

- I'm being funny : I'm funny だと「(人から見て)私はおかしい [こっけいだ]」だが、(be being + 名詞・形容詞)という進行形にすると「(一時的, 意図的に)…のようにふるまっている; …のふりをしている」の意味になる。したがって be being funny は「おもしろおかしくふるまっている [冗談を言っている]」となる。

- much of what I've done 「私のしてきた [言ってきた] ことの多く」 that 節の主語。

- in really horrible taste 「ひどく悪趣味で」本文では I don't think (that) ... 「…でないと思う」の that 節中にあるので、「そんなにひどく悪趣味で (はない)」となる。

(C)

図解

There are real-life situations so hopeless that no relief is imaginable.

there be

S

so 形容詞 that ... 「あまりに～なので…」

語句 ・ real-life situation 「現実の事態」 ・ hopeless 「絶望的な」 ・ imaginable 「想像できる, 考えられる限りの」

- There are real-life situations so ~ that ... : <There is [are] + S> の形だが, S を修飾する形

容詞が so ~ that ... 「あまりに～なので…」の構文で用いられて全体として S にかかり、「あまりに～なので…な現実の事態がある」となる。so ~ that ... は後ろから訳して「…なほど～な現実の事態もある」としてもよい。

- no relief is imaginable 「絶望感の軽減など想像もできない」主語に否定語 no がつくと「少しの～も…ない」という強い否定になる。relief はここでは「絶望感の軽減、除去 (relief from hopelessness)」の意味。

4 内容の把握

下線部(D)を含む文の意味は「誰も笑わなかったが、それでも私たちはみな彼がそう言ってくれてうれしかった」。it はドレスデンでの爆撃の際に避難した地下室で、1 人の兵士が発したせりふ “I wonder what the poor people are doing tonight.” を指す。下線部のあとを見ると、At least we were still alive! He proved it. とある。この it は at least we were still alive を指し、2 文合わせて「彼は少なくとも私たちがまだ生きていることを証明してくれた」となる。つまり、その言葉は死への恐怖や絶望感を和らげてくれたわけで、これが兵士の（笑えない）冗談に地下室のみながうれしく思った理由である。

答案作成上のポイント

40 字与えられているので、解答は「自分たちはまだ生きているという確信を兵士の言葉で得られた」という点に加えて、筆者を含む人々が置かれていた「危機的な〔絶望的な〕状況でも」を含めてまとめるようにしたい。

全訳 英文内容をチェック

第 1 段落

子供の時、私は家族の中で一番年下であったが、どの家族でも未っ子というのは冗談ばかり言うものだ。なぜなら、冗談を言うことでしか大人たちの会話に加わることができないからだ。私の姉は 5 歳年上、兄は 9 歳年上で、両親は 2 人ともおしゃべりだった。それで、まだとても幼かった時、夕食の食卓で私は家族全員にとって退屈な存在だった。彼らは私の日々のまったくつまらない子供じみた話など聞きたくもなかった。彼らが話したいのは、高校や、あるいはおそらく大学や職場で起きた本当に重要な物事についてだった。そういうわけで、私が会話に加わることのできる唯一の方法は何かおもしろいことを言うことだった。^{▶1} 最初はきつと偶然そうしたに違いないと思うが、たまたまだじゃれを言ってそれが家族の会話を中断させた、何かその種のことだ。そしてその時、私は冗談が大人の会話に割り込む方法だと悟ったのである。

▶ 1 (第7文) it の指す内容

I think I must have done it accidentally at first,

it は前文の「(何かおもしろいことを言って) 会話に加わることを指す。

just accidentally made a pun (that stopped the conversation), something of that sort.

→①

→②

① just accidentally 以下は「何かおもしろいことを言って会話に加わった」を具体的に言い換えている。

② (I) made a pun that stopped the conversation = something of that sort 「私が家族の会話を中断させたじゃれを言ったこと、何かその種のこと」

☐ jokemaker 「冗談を飛ばす人；軽口をたたく人」

☐ talker 「話好き；おしゃべりな人」

☐ dumb ㊦ 「つまらない」

☐ stuff 「物事；問題 (= matter)」

☐ accidentally 「偶然；たまたま」

☐ ~ of that sort 「その種の～；そういった～」

第2段落

私はこの国のコメディヤーが最高だった時代に育った——大恐慌の時代だ。間違いなく最高のコメディアンがラジオに多数登場した。それで、私は意図せずして彼らを真剣に研究したのだ。私は青春時代ずっと、少なくとも一晩1時間はコメディヤーを聴いたもので、冗談とはどのようなものか、また、それらがどのように機能するのかに大きな興味を抱いた。

☐ superb 「最高の；すばらしい」

☐ absolutely 「間違いなく；絶対に」

☐ would listen to ~ 「～を聴いたものだった」この would は「過去の習慣や反復された動作」を回顧的に述べる用法。

第3段落

冗談を言っている時、私は相手を怒らせないように気をつける。私が言ってきたことの多くはそんなにひどく悪趣味ではなかったと思う。多くの人を当惑させたり、苦しめたりしたことはなかったと思う。私が行使する唯一の衝撃は、ときたま使うわいせつな言葉くらいだ。冗談のネタの中にはおもしろくないものもある。例えば、アウシュビッツに関するユーモラスな本や寸劇など私には想像もできない。また、ジョン・F・ケネディやマーティン・ルーサー・キングの死について冗談を言うことなど私には不可能だ。▶² それ以外では、避けたいと思ったり、まったく対処できないような題目は私には思いつけない。

▶ 2 (第8文) コンマで結ばれた2つの関係代名詞節

Otherwise I can't think of any subject that I would avoid, that I could do nothing with.

↑ ↑

→① →②

→① →②

can do nothing with ~ = ~にまったく対処できない

① any subject のあとに関係代名詞 that の節が2つ並んでおり、どちらも同等に any subject を修飾している。これは and の代わりにコンマ (,) で結ばれた関係代名詞節で二重限定ではない。

② 2つの関係代名詞節の would, could は仮定法過去を用いた控えめな表現。

☐ embarrass 「～(人)を当惑させる[まごつかせる]」

☐ distress 「～(人)を悩ませる」

☐ occasional 「たまの、時折の」

☐ obscene 「わいせつな」

☐ otherwise 「それ以外[その他の点]では」

第 4, 5 段落

私はドレスデンの崩壊を見た。崩壊前にこの都市を見て、そのあと防空壕から出てきて崩壊後の都市を見たが、1つの反応が笑いだったのは確かである。神のみぞ知るだが、それは多少なりとも恐怖(感)の軽減を求める感情であろう。

どんな題目も笑いを免れず、アウシュビッツの犠牲者には極めて恐ろしい笑いがあっただろうと私は思う。

☐ **destruction** 「崩壊」

☐ **air-raid shelter** 「防空壕」

☐ **afterward** 「そのあとで」

☐ **response** 「反応」

☐ **relief** 「軽減, 除去」

☐ **be subject to** ~ 「~にさらされる; ~を免れない」

☐ **victim** 「犠牲者」

第 6 段落

ユーモアとは恐怖に対するほとんど生理的な反応である。フロイトはユーモアは欲求不満に対する反応だと言ったが——いくつかの反応の1つではある。犬は門から外へ出られないと、爪でひっかき、地面を掘ったり、無意味なしぐさをしたり、ことによるとうなったりし始め、欲求不満や驚きや恐怖に対処すると彼は言っている。

☐ **scratch** 「ひっかく」

☐ **dig** 「(地面などを) 掘る」

☐ **meaningless** 「無意味な」(⇔ **meaningful** 「有意義な」)

☐ **growl** 「うなる」

☐ ~ or whatever 「~とかそういうものの」

☐ **deal with** ~ 「~に対処する」

第 7 段落

そしてまた非常に多くの笑いが恐怖によって誘発される。数年前、私はテレビのお笑いシリーズの仕事をしていた。▶³ 私たちは、基本原則として、毎回の放映で死に言及するような番組を企画しようとしていた。しかもこの要素によって、私たちがどのようにして大笑いを誘発しているか視聴者に気づかれずに、どのような笑いでより深みのあるものになるようにだ。

▶ 3 (第 3 文) 見分けにくい先行詞; 動名詞の意味上の主語

We were trying to put a show together that, (as a basic principle,) mentioned death (in every episode) and that this ingredient would make any laughter deeper (without the audience's realizing how we were inducing belly laughs).

動名詞の意味上の主語「視聴者が…することなく」▶³

① この文では先行詞 a show と関係代名詞 that のあいだに together が割り込んでおり、さらに関係代名詞 that の直後に挿入句があり、一見しただけではわかりにくい。

② and that 以下の節は文の要素をすべて含むので文法的には a show にかかる形容詞節ではなく、and (our intention was) that this ingredient ... という意味を付け加えている。

③ 動名詞の意味上の主語は、人称代名詞の場合は所有格で示すのが原則だが、名詞の場合は所有格にしない場合も多い。上の例は without the audience realizing ~ と表すこともできる。

☐ **induce** 「~を誘発する」

☐ **basic principle** 「基本原則」

☐ **ingredient** 「要素; ネタ」

☐ **belly laugh** 「大笑い」

第 8 段落

例えば、「鳥の糞の中の白いものは何だろう？」という質問のような最も単純な冗談でさえ、ほんの瞬の恐怖に基づいている。聞き手は、学校の授業中に暗唱するよう求められでもしたかのように、一瞬、何かばかな答えをしてしまうのではないかと恐れるのだ。そして聞き手は「それも鳥の糞だよ。」というその答えを聞くと、無意識に抱いた恐怖を笑いによって取り除く。ともかくも、その人はテストされていたわけではなかったのだ。

☐ auditor 「聞き手」

☐ as though (he or she were) called upon to do
「あたかも…するよう求められたかのように」 as
though = as if, call upon [on] ~ to do 「～に…
するよう求める」

☐ recite 「暗唱する」

☐ which is, ... 「つまり、…」

☐ get rid of ~ 「～を取り除く」

☐ automatic 「無意識の」

第 9, 10 段落

フロイトが絞首台のユーモアと呼んだ、笑えない冗談というものもあるのは確かだ。絶望感を取り除くことなど想像もできないほど絶望的な事態だって現実存在する。

私たちがドレスデンで爆撃され、天井が落ちてきた場合に備えて腕で頭を抱えながら地下室に座っている間、1 人の兵士が、まるで冷たい雨の夜、大邸宅にいる裕福な婦人みたいな口調で「貧しい方々は今夜はどうなさっているのかしらねえ。」と言った。誰も笑わなかったが、それでも私たちはみな彼がそう言うてくれてうれしかった。少なくとも私たちはまだ生きている！ 彼はそのことを証明してくれたからだ。

☐ true enough 「確かに」

☐ laughless 「笑いのない；笑えない」

☐ what Freud called ~ 「フロイトが～と呼んだもの」 関係代名詞 what が導く名詞節で、前の laughless jokes と同格関係にある。

☐ bomb 「～を爆撃する」

☐ cellar 「地下室」

☐ with one's arms over one's head 「両腕で頭を抱えて」 付帯状況を表す〈with + O + C〉の構文。

☐ in case ... 「…の場合に備えて」

☐ prove 「～を証明する」

● 導入

- ① (ℓ. 1) ... the youngest child in any family is always a jokemaker, because a joke is the only way he can enter into an adult conversation.

▶ 末っ子が冗談ばかり言うのは、それが大人たちの会話に加わる唯一の方法だからだ。

● 本論

- ② (ℓ. 15) ... I got very interested in what jokes were and how they worked.

▶ コメディ最盛期に育った筆者は、冗談とはどのようなもので、どのように機能するかに大きな興味を抱いた。

- ③ (ℓ. 17) When I'm being funny, I try not to offend. / (ℓ. 20) Some things aren't funny.

▶ 冗談を言う時には相手を怒らせないように気をつけることだ。冗談の中には、冗談にしてはいけないものもある。

- ④, ⑤ (ℓ. 25) ... and certainly one response was laughter. / (ℓ. 27) Any subject is subject to laughter, ...

▶ ドレスデンの崩壊を見た時の筆者の1つの反応は笑いだった。何でも笑いの対象になるのだ。

- ⑥ (ℓ. 29) Humor is an almost physiological response to fear.

▶ ユーモアは恐怖に対する生理的な反応である。

- ⑦ (ℓ. 33) And a great deal of laughter is induced by fear.

▶ そしてまた非常に多くの笑いが恐怖によって誘発される。

- ⑧ (ℓ. 38) Even the simplest jokes are based on tiny moments of fear, ... (ℓ. 41) When the auditor hears the answer, ... he or she gets rid of the automatic fear with laughter.

▶ 単純な冗談でさえ恐怖に基づいている。そしてその答えを聞くと、聞き手は無意識に抱いた恐怖を笑いによって取り除く。

- ⑨, ⑩ (ℓ. 44) ... there are such things as laughless jokes, ... / (ℓ. 50) ... but we were still all glad he said it. At least we were still alive! He proved it.

▶ あまりに危機的な状況にあっても笑えない冗談もあるが、それでもその冗談が人々に生きている証を与える役割を果たす場合もある。

要約 ユーモアは恐怖に対する生理的な反応であり、多くの笑いが恐怖によって誘発される。冗談を言い、笑うことで不安や苦痛が和らぐからだ。絶望的な状況では笑えない冗談もあるが、それでもその絶望感を軽減することはできる。(103字)

3 人間と二足歩行

問題編 p.8

人間は二足歩行によって出現したと言っても過言ではない。他の動物からヒトを区別する二足歩行の重要性をもう一度考えてみよう。

❖ 解答 ◀ 正しい答えをチェック

① (ア) 2 (イ) 4 (ウ) 1 (エ) 3

② ア

③ 人の時間と身体活動の半分もが、歩行とそれに関連した、走る、跳ぶ、はう、登るといった身体活動に費やされるので、歩行条件の変化が生活や社会を変えることになった。

④ ローマ帝国の軍事力と権威を示すため。(18字)

⑤ エ

⑥ 相当な量の食料、水、物品を運ぶことができたので、人間はかなりの距離にわたって持ちこたえることができた。

⑦ 呼吸と声帯をより完全に使えるようになり、他の動物より複雑で多様な音が出せるようになった。(44字)

❖ 解説 ◀ 考え方をチェック

1 文脈の把握

1. 「許した」 2. 「共存した」 3. 「含んだ」 4. 「上回った」

(ア) 空所(ア)を含む文の前文に **walking has been the primary mode of human locomotion** 「歩行は人の主要な移動手段であった」とあるので、**walking and being human** 「歩行と人間であること」の関係は「共存」である。したがって 2. **coexisted** が入る。現在完了を作る過去分詞として使われているが、**co** (共に) -**exist** (存在する) が自動詞であることもヒントになる。

(イ) **Its system of land travel, (which ...), was not (イ) in Europe until ~**. は「その陸路移動システムは、(…なのだが)、～までヨーロッパで…されなかった」の意で、空所には過去分詞が入り、受動態の文になると考えられる。**which** 以下の補足部分では「歩行を基礎にし、たいてい歩行を必要とした」と述べられているので、4. **surpassed** を入れ「18世紀まではヨーロッパでその陸路移動システムに勝るものはなかった」とすると文脈に合う。

(ウ) **Free hands (ウ) them to examine objects ...**
 S V O C

まず、文型の面から **SVOC** (= **to** 不定詞) になるのは **allow** しかない。文脈から考えても、主語の **Free hands** は前文からの流れで「自由に使えるようになった手」のことで、それが「彼らが…するのを許した→彼らは…できるようになった」となり、1. **allowed** が正解。

- (四) This mobility「この（人間に大きな移住能力を与えた）機動性」を主語として受け、補足説明する関係代名詞 which に続く動詞で、目的語が the ability to do「…する能力」なので、「この機動性」＝「…する能力を含む」で文は成立する。したがって、3. included が正解。

2 内容の把握

ア. 「私たちが今ある存在になったのは歩行を通じてである」

イ. 「私たちは歴史を通じて歩き続け、自分たちの儀式を定義づけてきた」

ウ. 「私たちは歩く動物となった」

エ. 「私たちは独自のやり方で歴史という道を歩いてきた」

下線部(1)の文中の前置詞 to は「到達点」を表し、文意は「私たちは歩き続けて今の存在（人間）になった」なので、この意味を It is ~ that ... の強調構文で表したアが正解。

3 文構造の把握

図解

With as much as half of human time and bodily energy dedicated (to walking and
(with + O + C (過去分詞)) 「～が…されている状態で」 O C
related physical activities (such as running, jumping, crawling, and climbing),) /
A such as 「～のような A」
changes (in the conditions of walking) altered lives and societies.
S V O

語句 ・ as much as ～ 「～もの（多くの）；～と同程度〔量〕の」 ・ bodily energy 「身体活動」
・ dedicate ～ to ... 「～を…に捧げる；費やす」 ・ crawl 「はう」 ・ alter 「～を変える（＝change）」

- With ... climbing までは〈with + O + C (過去分詞)〉の形で、「～が…されている状態で」という付帯状況を表す。ここでは文脈から「～が…なので」という理由を表して主文全体を修飾する。
- as much as half of ～ 「～の半分もが」
- related physical activities 「それ（＝ walking）に関連した身体活動」
- changes in the conditions of walking 「歩行条件の変化」

答案作成上のポイント

〈with + O + C〉は英文和訳問題の頻出構文なので、with ～ となっていたら、あとが「名詞（句）」－「現在〔過去〕分詞や形容詞・前置詞句など」の形になっていないかチェックしてみることに。

4 内容の把握

Its (= the Roman empire's) roads の述語動詞は formed であるが、その間に挿入された過去分詞で始まる分詞構文 built mainly to project its army's power and state authority 「主として軍事力と国家の権威を示すために造られたのだが」の **to** 以下で道路建設の目的が補足説明されている。project 「～を投影する」は「示す」と訳すと2字で済む。its army's の its は「(ローマ) 帝国の」と明示したほうがよい。

5 内容の把握

- ア、「歩行が一般的ではあるが人によって異なる、人々の近距離移動の基準を定めていた 場合」
 イ、「おそらく歩行が一般的ではあるが人によって異なる、人々の近距離移動の基準を定めていた」
 ウ、「歩行が一般的ではあるが人によって異なる、人々の近距離移動の基準を定めていた かどうか」
 エ、「歩行が一般的ではあるが人によって異なる、人々の近距離移動の基準を定めていたのに 対し」

- ・ If walking set the common (but variable) standard of local human locomotion,
- ・ the marching speed and distance of Roman fighting forces set the upper limit of prolonged land travel

下線部(4)とそれに続く節を対比してみると、この文が If A set ..., B set ... 「もし A が～を定めていたとしたら、B は…を定めていた」と If 節と主節の意味が対照的になっていることがわかる。したがって、**対照を表す While** で始まる工が正解。この文が言いたいのは「歩行が、人々が行けるおおよそ標準的な範囲を決めていたとすれば、ローマの戦闘部隊の進行速度と距離がその長距離の移動の上限（ローマ帝国の支配範囲）を決めていたのだ」ということで、ローマが開発整備した陸上移動システムが広大なローマ帝国の成立に不可欠であったことを強調したものの。

6 文構造の把握

図解

Able to transport significant quantities of food, water, and goods,

^ Being 《理由を表す分詞構文》

they could sustain themselves (over considerable distances).

S V O

語句 ・ transport 「～を運ぶ〔輸送する〕」 ・ significant 「相当な」 ・ sustain oneself 「自分を支える→持ちこたえる」 ・ considerable 「かなりの」

- Able to transport ～ 「～を運ぶことができたので」 able の前に being が省略された分詞構文で、ここでは「理由」を表す。

- they could sustain themselves over considerable distances 「かなりの距離にわたって持ちこたえられた」 they は humans 「人間」を指す。ここで「持ちこたえられた」とは、「(相当量の食料, 水, 物品を運ぶことができたので) 移動できた」の意味。次の最後の文が This mobility 「この移動〔機動〕性」で始まっていることも参考になる。

7 内容の把握

第⑥段落第1文 Psychologist Robert Provine speculates that ... 参照。この that 節に二足歩行がヒト科にもたらしたと思われることが書かれており、その内容を50字以内でまとめる。



bipedalism permitted hominids to make fuller use of their breath and vocal cords,
 S V O C (to不定詞)
 enabling them to produce more complex and diverse sounds than other animals
 《主文の動作との因果関係「結果」を表す分詞構文》

- S permit O to do 「SはOが…することを許す→SによってOは…することが可能になる」
(無生物主語構文)
- make fuller use of ~ 「~をより完全〔十分〕に使う〔利用する〕」
- enabling them to do 「(そのことが) ヒト科が…できるようにした→(その結果) ヒト科は…できるようになった」(分詞構文) which enabled them to do または and it enabled them to do と同じ意味を表す。
- produce more complex and diverse sounds 「より複雑で多様な音を出す」

答案作成上のポイント

設問文に「二足歩行がヒト科に」という記述が含まれるので、「二足歩行によってヒト科は」の部分は書く必要がなく、「どうなったのか→呼吸と声帯を(より)完全に使えるようになり」「その結果→他の動物より複雑で多様な音が出せるようになった」とすれば50字で十分足りる。

全訳

英文
内容

をチェック

第①段落

有史以前の大昔から歩行は人の主要な移動手段であった。そもそもの初めから、歩行と人間であることは共存関係にあった。人は徒歩で大地を横切り、人生を経験し、自分と環境との関係を定義づけた。彼らは徒歩で子供たちを運び、老人を支え、道具や物を引きずって運び、動物の世話をした。同様に彼らは逃げたり、追いかけたり、殺したり、狩りをしたり、採集したり、食料や水や燃料、そして住処を探し求めたりし、旅をし、遊び、男女交際し、自らを特徴づける儀式を執り行なった。何百万年もの間、^{▶1} 私たちの近い先祖も遠い先祖も徒歩で歴史を超えて移動し、それが私たちは歩き続けて人間になったのだという考えに真実味をもたらしている。

▶ 1 (第6文) 分詞構文；同格の that 節

... our close and distant ancestors moved across history on foot,

bringing truth to the notion that we have walked our way to our being.

= which (and it) brings

同格の that 節「…という考え」

- ☐ locomotion「移動」
- ☐ their old「老人」〈the + 形容詞〉「…な人たち」
の the の代わりに人称代名詞の所有格が置かれた形。
- ☐ haul「～を引きずる〔運ぶ〕」
- ☐ herd「～（家畜）を世話する」
- ☐ fled < flee「逃げる」

- ☐ habitat「住処；居住地」
- ☐ court「(男女が) 交際する」
- ☐ enact「～を実行に移す；上演する」
- ☐ defining「特徴づける」
- ☐ ritual「儀式」
- ☐ ancestor「先祖；祖先」
- ☐ notion「考え；観念」

第2段落

人の時間と身体活動の半分もが、歩行とそれに関連した、走る、跳ぶ、はう、登るといった身体活動に費やされるので、歩行条件の変化が生活や社会を変えることになった。こうした多くの変化は先史時代の膨大な年月の中で生じ、それは私たちの最初の二足を有する（二足歩行の）先祖の最初の歩みや初期の移住から、およそ 1 万年前の農業革命や河川流域文明の出現にまで及んだ。

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ☐ prehistory「先史時代」 ☐ reaching from ~ to ...「～から…にまで及ぶ」
and reached from ~ to ... の意味を表す分詞構文。 ☐ migration「移住」 | <ul style="list-style-type: none"> ☐ bipedal「二足歩行の；二足を有する」 ☐ agricultural「農業の」(図 agriculture) ☐ emergence「出現」 ☐ river-valley「川の流域の」 |
|---|---|

第3段落

インダス川、チグリス・ユーフラテス川、そしてナイル川流域でのこれらの文明は、人間の歩行要素の面で重大な変換を遂げた。これらの文明の主な特徴——定住、毎年の食糧供給、荷物運搬用の家畜、道具製作の専門化、貯蔵、車輪の利用、河川の制御、主要な道路や路線の支配——はどれもみな、誰が、なぜ、どこで、いつ、歩いて行ったのかを決定づける要因であった。

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ☐ mark「～を示す；遂げる」 ☐ profound「重大な；大規模な」 ☐ transformation「変換；変容」 ☐ feature「特徴」 ☐ annual「毎年〔例年〕の」 ☐ domesticated「飼いや慣らされた」 ☐ burden「(重い) 荷物」beast of burden で「荷物運搬用の動物」 | <ul style="list-style-type: none"> ☐ specialization「専門化」 ☐ storage「貯蔵；蓄え」 ☐ utilization「利用」(動 utilize) ☐ wheel「車輪」 ☐ command「制御；運用力」 ☐ dominance「支配」 ☐ trail「(踏みならされてできた) 道」 |
|--|--|

第4段落

すべての古代文明の中で、ローマ帝国はその1千年の歴史の絶頂期に空間的には最も遠い所に達した。その道路は、主として軍事力と国家の権威を示すために造られたのだが、歩行を、滑らかな路面、より大きな運搬能力、そして統一された移動経路に結びつける1つの移動システムを形成した。その陸路移動システムは、牛、馬、荷馬車を利用したものの、歩行を基礎とし、主に歩行を必要とするものであり、18世紀まではヨーロッパでそれに勝るものはなかった。もし歩行によって、一般的ではあるが人によって異なる、人々の近距離移動の基準が定められていたとすれば、ローマの戦闘部隊の進行速度と距離によって、長距離陸上移動の上限が定められたのであり、また、人類が初めて地上を歩いて以来他の追従を許さない支配形態が明確になったのである。

- ☐ furthestmost 「最も遠い」 (= furthest)
- ☐ authority 「権威；権力」
- ☐ associate A with B 「A を B に結びつける；A と B を関連付ける」
- ☐ unify 「～を統一する」
- ☐ common but variable ...：一般的とはいっても、

- 人の歩く速度はいろいろなので variable 「変わり得る」を加えたもの。
- ☐ unrivaled 「他の追従を許さない；匹敵するものがない」
- ☐ humanity 「人類」
- ☐ trod < tread 「～を歩く」

第5段落

「初めに足があった。」と人類学者のマービン・ハリスは書いた。最初のヒト科の種は、次のヒト科の種が道具を作る200万～400万年前に、そして私たちの種であるホモ・サピエンスがおおよそ10万年前に登場する400万～600万年前に、二足歩行をしていた。「直立姿勢と二足歩行が、**私たち人類の系統がアフリカの類人猿と共通の祖先から分岐する上での決定的で、おそらくは最初の大きな適応であったことは人類学者も生物学者も今では同意している。**」と科学系ライターのジョン・ノーブルは最近書いている。

▶ 2 (第3文) 名詞構文

... the crucial and probably first major adaptation (associated with the divergence of our

「私たち人類の系統の、アフリカの類人猿と共通の祖先からの分岐に関連する適応」

human lineage from a common ancestor with the African apes).

the divergence of ~ の部分が (SV) の関係 (≡ our human lineage diverged from a common ancestor with ~) になっている。

- ☐ anthropologist 「人類学者」
- ☐ subsequent 「次の；後続の」
- ☐ species 「(生物学上の) 種」
- ☐ biologist 「生物学者」
- ☐ upright posture 「直立姿勢」

- ☐ crucial 「極めて重要な；決定的な」
- ☐ adaptation 「適応」
- ☐ divergence 「分岐」
- ☐ lineage 「系統；種族」
- ☐ ape 「類人猿」

第6 段落

心理学者のロバート・プロバインは、二足歩行によってヒト科は呼吸と声帯をより完全に使えるようになり、その結果、彼らは他の動物よりも複雑で多様な音が出せるようになったのだらうと推測している。特に、頭や首や肩、そして背中や腰が使えるようになるにつれ、人は徒歩で計り知れない距離を横断してさまざまな物資を運べるようになった。彼らは実に効果的に、打ち、投げ、殴り倒し、蹴ることができた。彼らはまた、より効率よく手を伸ばして物を掴み取れるようになったが、特に、彼らの種が親指を人差し指と中指に向かい合わせにして使えるように発達させるにつれそうだった。彼らは手が自由に使えるようになって、物を調べたり、道具を作って利用したり、火をおこし、点火し、持ち運び、制御できるようになった。そして、これらそれぞれの機能は互いに支え合い、強化し合った。

- ☐ speculate 「…だろうと推測する」
- ☐ bipedalism 「二足歩行 (= bipedal walking)」
- ☐ make use of ～ 「～を使う；利用する」
- ☐ afoot ㊦ 「徒歩で (= on foot)」
- ☐ immense 「計り知れない；果てしない」
- ☐ with startling effect 「実に効果的に」 with effect

- = effectively, startling 「驚くべき」
- ☐ smash down 「～（人）を殴り倒す；～（物）をたたき壊す」
- ☐ in opposition to ～ 「～に反対して；～と向かい合わせにして」
- ☐ reinforce 「～を強める；強化する」

第7 段落

人は木々の中での生活を捨て、二足歩行する地上生活者となった。徒歩によって人は環境をより上手に利用できるようになり、丘に登り、湿地を横切り、池を歩いて渡り、浅瀬を歩いて渡り、さらに天気 が許せば、▶³ 歩く人間にとっては容易なことだが、最大時速 3 マイルで旅行もした。相当な量の食料、水、物品を運ぶことができたので、人間はかなりの距離にわたって持ちこたえることができた。この機動性は、子供を連れ運び、道具を引きずり、食料を輸送し、のちには動物を連れ歩く能力も含め、人間に大きな移住能力を与えた。

▶ 3 (第2文) 補足説明の as；代動詞の do

... traveling 〔, as walking humans easily do (=travel), 〕 up to three miles per hour.
as 節は「…だが」という補足的な説明を加える up to 以下の副詞句は traveling にかかる

- ☐ sacrifice ㊦ 「～を犠牲にする；捨てる」
- ☐ dweller 「住人」
- ☐ exploit 「～を利用する」

- ☐ wade through ～ 「～を歩いて渡る」
- ☐ weather permitting 「天気が許せば〔よければ〕」
- ☐ migratory ㊦ 「移住する」

● 導入

- ① (ℓ. 1) Since time beyond memory **walking has been the primary mode of human locomotion.**

▶ はるか昔から歩行は人の主要な移動手段であった。

● 本論

- ② (ℓ. 11) **With as much as half of human time and bodily energy dedicated to walking and related physical activities ..., changes in the conditions of walking altered lives and societies.**

▶ 多くの期間とエネルギーが歩行とそれに関連した身体活動に費やされ、歩行条件の変化が生活や社会を変えることになった。

- ③ (ℓ. 18) These **civilizations ... marked a profound transformation in elements of human walking.**

▶ 古代文明は人間の歩行要素を大きく変えた。

- ④ (ℓ. 25) Of all early civilizations, **the Roman empire, at the high point of its thousand-year history, reached furthest in space.**

▶ すべての古代文明の中で空間的に最も遠い所に達したのはローマ帝国であった。

- ⑤ (ℓ. 41) ... **upright posture and bipedal walking** was the crucial and probably first major adaptation associated with **the divergence of our human lineage from a common ancestor with the African apes.**

▶ 人類の系統がアフリカの類人猿と共通の祖先から分岐する決定的で最初の大きな適応は直立姿勢と二足歩行であった。

- ⑥ (ℓ. 47) **Afoot, humans could carry many kinds of objects across immense distances,**

▶ 徒歩により、人は計り知れない距離を横断してさまざまな物資を運べるようになった。

● 総括

- ⑦ (ℓ. 56) **Afoot, humans could better exploit the environment, (ℓ. 60) This mobility, ... gave humans great migratory powers.**

▶ 徒歩のおかげで人は環境をより上手に利用できるようになり、その機動性は人間に大きな移住能力を与えた。

要約 大昔から人は歩く動物だった。直立姿勢と二足歩行は人を類人猿から分かつ決定的な適応であり、歩行条件の変化が人間の生活や社会を変えてきた。歩くことで人は環境を有利に利用し機動性を高め、大きな移住能力を獲得した。(103字)

4 言語多様性の重要さ

問題編 p.12

言語とはただ何かを表現するだけのものではない。世界の少数言語が次々に消滅しつつある今、その存続の重要さが叫ばれるのはなぜなのだろうか。

❖ 解答 正しい答えをチェック

- | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|--------|
| 1 (b) | 2 (c) | 3 (a) | 4 (d) | 5 (d) |
| 6 (a) | 7 (c) | 8 (d) | 9 (a) | 10 (d) |

❖ 解説 考え方をチェック

1 内容の把握

「本文の一節から推測できるのは、」

- (a) 「絶滅危惧動物より多くの言語が消滅しつつあることである。」
 (b) 「言語は絶滅危惧動物よりもっと速く消滅しつつあることである。」
 (c) 「世界の言語の半数が2050年までに絶滅しているだろうということである。」
 (d) 「死滅した言語の数は将来間違いなく2倍になるだろうということである。」

第①段落参照。第2文では「言語は絶滅の危機にある哺乳動物の2倍の速さで絶滅しつつある」と述べられており、(b)が適切。(a)は、本文では数ではなく「絶滅の速さ」を比較しているので誤り。(c)「絶滅するかもしくは絶滅状態になるだろう」が正しい。(d)のような内容は述べられていない。

2 内容の把握

「最悪の事態になる場合、今世紀末まで生き残れる言語の数はおよそどのくらいか。」

- (a) 「3,000」 (b) 「1,200」 (c) 「600」 (d) 「10」

第①～②段落参照。第②段落第2文には「クラウドスは2100年までには90%もの言語が絶滅寸前状態になるか絶滅している可能性を示唆している」とあり、第①段落第1文の the world's 6,000 or so languages から(c)が適切。

3 内容の把握

「ある言語が『無事』だと考えられるのは、」

- (a) 「それが国語〔公用語〕と認められる場合。」
 (b) 「少なくとも人口の5%がそれを話す場合。」
 (c) 「それを話す人たちが賢い場合。」
 (d) 「それがまだ絶滅寸前ではない場合。」

第②段落参照。第3文中に「広範囲で話されているとか公用語として使われているという意

味で『無事』なのは」という記述があり、ここから(a)が正解。

4 内容の把握

「本文の一節から、言語が瀕死状態にあると推測できるのは、」

- (a) 「それがもはや~~×~~儀式で使われなくなる時である。」
- (b) 「それがもはや~~×~~外国語として学ばれなくなる時である。」
- (c) 「それがもはや~~×~~母語として学ばれなくなる時である。」
- (d) 「それが大人だけに使われる時である。」

第③段落参照。第3文後半に「(言語は)子供たちがそれを学ぶのをやめたとたんに瀕死状態になってしまう」とあり、これは「大人しか使わなくなる」ことを意味するので(d)が正解。(c)もある意味正しいように思えるかもしれないが、ここで問題なのは「子供たちが学ばなくなる→次世代に受け継がれない」ということであり、(d)の方がより適切。

5 内容の把握

「筆者によれば、」

- (a) 「少数言語が話されることが少なければ少ないほど、~~×~~それだけ世界は平和になるだろう。」
- (b) 「言語の多様性は~~×~~人間の生存にとって重要なことが証明されている。」
- (c) 「言語は~~×~~今よりもっと多様化されるべきである。」
- (d) 「私たちは依然として多くの少数言語についてたいして知識がない。」

第⑤段落参照。第1文には「人々は言語多様性の重要性をまだあらゆる意味でわかっているわけではない」、第2文には「あまり研究されていない言語(=少数言語)の中にどんな宝が隠されているか誰も正確には知らない」という記述があり、(d)が適切。(a)は〈the + 比較級～, the + 比較級...〉「～であればあるほど、それだけ…」の構文。第④段落第3文 Replacing...と一見関連するかのようには思えるかもしれないが、But...と続くように、本文では「言語の多様性の重要性」が展開されるので一致しない。(b)「証明」に関しては第⑥段落第2文に「そこ(絶滅危惧言語)には豊かなものが存在するだろうという証拠がある」という記述はあるが、「人間の生存」に関するものではない。(c)筆者は言語多様性を保持することの重要性について語っているが、「今よりもっと多様化されるべきだ」とは言っていない。

6 内容の把握

「ウッドフィールドによると、絶滅危惧言語が保護されなければならない理由は」

- (a) 「それらが医学上の発見になぞえられるから。
- (b) 「~~×~~既知の言語研究が多くの宝物を発見したから。」
- (c) 「~~×~~絶滅危惧植物が保護されているから。」
- (d) 「~~×~~言語の死は人類の死を意味するから。」

第⑥段落参照。第1文で「ウッドフィールドは医学的に貴重かもしれないという理由ゆえの絶滅危惧植物保護論の論拠を絶滅危惧言語の保護論の論拠になぞらえている」と述べられ、続く第2文では第1文を補足して「そこ（絶滅危惧言語）には豊かなものが存在するだろうという証拠がある」という彼自身の言葉が書かれている。つまり、絶滅危惧植物と同じで、絶滅危惧言語も価値のあるものを秘めているから保護が必要と考えていることがわかる。したがって(a)が正解。選択肢中の with medical discovery は本文（第1文）内容に忠実に合わせるなら、with medically valuable endangered plants となるところだが、（おそらく意図的に）「医学的に貴重な絶滅危惧植物の保護」→「それまで知られていなかった薬草などの発見」→「医学上の発見」と飛躍させたものと思われる。(b)と迷うかもしれないが、第2文の based on past studies of well-known languages は「豊かなものがあるであろう（there will be riches）証拠」の出処に言及したものに過ぎず、もし(b)が答えだとしたら、第1文は必要ないことになってしまう。すでに第④段落最後で言語多様性の重要性が生物多様性と同等比較され、本段落に続く第⑦、⑧段落では絶滅危惧言語に蓄えられた医学的知識の具体例が展開されている点も押さえよう。

7 内容の把握

「ワームの例の要点は、」

- (a) 「×皮膚炎は原住民たちのやり方で治せることを示すことである。」
- (b) 「×皮膚炎の発生原因を説明することにある。」
- (c) 「言語にはそれを話す人々の知恵が含まれていることを示すことである。」
- (d) 「×西洋医学の知識は却下されるべきことを示すことにある。」

第⑧段落参照。ワームの例とは、第⑦段落で述べられている「蔓延した皮膚炎が原住民の昔からのやり方（＝知恵）で終息した話」で、これを受けて第⑧段落最後の文は「それらの言語（オーストラリアの言語）の消滅は、その中に蓄えられた医学的知識の消滅にもつながる。」と締めくくられている。ここから(c)が正解。(a)は例そのものであり、その要点ではない。(b)のような内容は触れられていない。(d)は第⑦段落第4文に関連はするが、意味・文脈とも違う。

8 内容の把握

「本文の一節から推測できるのは、」

- (a) 「オーストラリアでは×最近まで多くの薬草が発見されてきたことである。」
- (b) 「オーストラリア×原住民の言語と文化の科学的研究が公式のものとなったことである。」
- (c) 「オーストラリア×原住民には西洋の医師よりはるかに多くの医学的知識があったことである。」
- (d) 「オーストラリア原住民の言語を話す人の数が急速に減少していることである。」

第⑧段落参照。第2文には「ほとんどのオーストラリアの言語が消滅しつつある」とあり、ここから(d)の状況にあることがわかる。

9 内容の把握

「マイケル・クラウスによると、」

- (a) 「言語はおのおの独自の世界を表現している。」
- (b) 「×言語は違っても言葉は似通っている。」
- (c) 「×言語はおのおの複雑な物理的世界を創り出している。」
- (d) 「×言語の生存には異なる文化が必要である。」

第⑨段落参照。第2文に「どの言語もこの世界に対する独自の見解を持っている」とあり、(a)の意味と一致する。(b)～(d)に関して本文は、(b)「1つの言語は、単に同じことを表す（他言語とは）異なる言葉の集まりではない」、(c)「言語網は高度に専門化された情報の小宇宙である」、(d)「私たちは文化的残存を言語学的多様性に依存している」という内容になっている。

10 内容の把握

「この章のタイトルとして最も適しているのはどれか。」

- (a) 「人間の言語のさまざまな世界」
- (b) 「言語の死——自然現象としての」
- (c) 「絶滅危惧言語の喪失は大きな医学的損失」
- (d) 「絶滅危惧言語の保護——人類の宝を守る」

筆者がさまざまな言語・民族研究者の発言や主張を紹介しながら本文全体を通して述べているのは、絶滅の危機にある少数言語の保護の必要性であり、その背景をなすのは第⑤段落以降最後まで言及されている問題、すなわち、どの言語にもそれを話す人たちの貴重な知識や文化が秘められており、絶滅危惧言語をそのまま消滅させてしまうのはむざむざその宝物を放棄してしまうに等しい、という観点である。したがってタイトルとしては(d)が適切。(a)、(b)は本文の全体内容に関係がなく、(c)は第⑦～⑧段落に関係するが、ここは⑦の設問文でも Wurm's example と表現されているように1つの具体例であって、本文全体のタイトルとなるような内容ではない。

第1段落

多くの言語学者が、世界の6,000ほどの言語のうちの少なくとも半数は2050年までに絶滅するか、もしくは絶滅状態になるだろうと予測している。言語は絶滅の危機にある哺乳動物の2倍、鳥類の4倍の速さで絶滅しつつある。もしこの流れが続けば、未来の世界は10ほどかそれ以下の数の言語に支配される可能性がある。

- ☐ linguist 「言語学者」
- ☐ predict 「～を予測する」
- ☐ extinct 「絶滅した」
- ☐ at twice the rate of ～ 「～の2倍の割合で」

- ☐ endanger 「～を危険にさらす」
- ☐ trend 「動向；流れ」
- ☐ dominate 「～を支配する」

第2段落

さらに高い割合で言語の荒廃が進む可能性も考えられる。アラスカ先住民言語センター所長のマイケル・クラウスは、2100年までには90%もの言語が絶滅寸前状態になるか絶滅している可能性を示唆している。彼によれば、20%から40%の言語がすでに絶滅の危機に瀕しており、広範囲で話されていたり公用語として使われていたりするという意味で「無事」なのはわずか5%から10%にすぎない。クラウスが言うように、もし人々が「賢くなってこの状況を変えようとする」ならば、絶滅または絶滅寸前の言語は2100年までに50%近くになる可能性もあるが、これは最良のシナリオの場合である。

- ☐ linguistic 「言語の」
- ☐ devastation 「荒廃；破壊」
- ☐ moribund 「絶滅寸前の」
- ☐ have official status 「正式なものとなっている；公用されている」

- ☐ turn it around : turn around 「～を好転させる」。
itは前文で述べられている「世界の言語の危機的な状況」を指す。
- ☐ more like ～ 「(むしろ) ～に近い」
- ☐ scenario 「シナリオ；筋書き」

第3段落

健全な言語の定義とは、新たな話し手を獲得していく言語である。いかに多くの大人たちがその言語を使用しようとして、それが次世代に受け継がなければその言語の運命はすでに封印されている。ある言語が第二言語や儀式用の言語として長く存続することはあっても、子供たちがそれを学ぶのをやめたとなんに瀕死状態になってしまうのだ。例えば、20のアラスカ先住民言語のうち、子供たちが学んでいるのはわずか2つである。

- ☐ fate 「運命」
- ☐ seal 「～を封印する」

- ☐ ceremonial 「儀式用の；儀式に使う」

第4段落

第4段落

言語の絶滅はその関係者には悲しい事態であるが、それ以外の私たちが気にしなくてはならない理由があるだろうか。他の人たちの言語が失われることが、例えば英語を話す人たちの未来にどんな影響を及ぼすというのだろうか。少数言語をもっと広く使われている言語に置き換えれば、人々が互いにより容易に理解し合うことができるようになるのだからよいことのようにさえ思える。しかし、言語の多様性は生物学的な多様性と同じく重要なのである。

- ☐ people involved 「関係者：関わりのある人たち」
☐ why should ...? 「なぜ…しなくてはならないか」
- …する理由〔必要〕などない」修辭的反語表現。
☐ replace A with B 「AをBに置き換える」

第⑤段落

イングランドのブリストルにある言語および学習理論センター所長のアンドリュー・ウッドフィールドは、1995年の言語保護に関するセミナーで、人々が言語多様性の重要性をまだあらゆる意味でわかっているわけではないことを示唆した。「実のところ、あまり研究されていない言語の中にどんな宝が隠されているか誰も正確には知らないのだ。」と彼は言っている。

- ☐ **conservation** 「保護」

☐ all the ways in which linguistic diversity is important 「言語多様性が重要であるあらゆる点

☐ **riches** 「豊かさ：宝」

第⑥段落

▶1 ウッドフィールドは、まだ研究されていない絶滅危惧植物の保護を求める1つの論拠——それは医学的に貴重かもしれないという論拠——を、絶滅の危機にある言語の保護を求める論拠になぞらえている。「▶2 それがどういふものなのかはわからないにせよ、よく知られた言語の過去の研究に基づいて、豊かなものが存在するだろうという証拠が帰納的に得られている。逆説的に思えるがそれは本当だ。言語を死滅させてしまうことによって、人類は自分が理解できないものを破壊している。」と彼は主張する。

▶1 (第1文) 見分けにくい文構造 1

Woodfield compares one argument for conserving unstudied endangered plants (— that

they may be medically valuable —} with the argument for conserving endangered

同格の that 節「…という論拠」

languages.

文の構造は compare A with B「AをBになぞらえる」という単純なものだが、Aのあとにダッシュによる挿入節があるため with Bの位置がずれ、一見しただけでは文構造がつかみづらい。compareのように成句として使われることの多い動詞の場合、あとに with ~ や to ~ がくることを予想して全文体を見ることが大切。

▶2 (第2文) 見分けにくい文構造2

We have inductive evidence (based on past studies of well-known languages) (that there

同格の that 節「…という証拠」

will be riches), / even though we do not know what they will be.

even though 「たとえ…にしても」

文の骨格は We have ~ evidence that ... 「私たちは…という～な証拠を持っている」(名詞+同格の that 節) であるが、evidence を修飾する過去分詞の句が直後に置かれているため、同格関係がわかりにくい。このタイプの同格表現では evidence のほか、belief, feeling, idea, hope, possibility など、よく同格の that 節をとまなう名詞を覚えておくことが重要である。

☐ medically 「医学的に」

☐ inductive 「帰納的な；引き出された」

☐ paradoxical 「逆説的な」

☐ die out 「死滅する；廃れる」

第7 段落

スティーブン・ワームは彼の『消滅の危機にある世界の言語地図』の序文で、伝統的な言語の知識に基づくある医学的な治療の話語を語っている。オーストラリア北部で、従来の治療では治せない深刻な皮膚炎が蔓延した。看護師と知り合いの原住民たちは、その皮膚炎を治す地元の薬草から得られるローションがあることを彼女に話した。豊かな経験の持ち主だったので、その女性は非西洋的な医学の知識を使うというこの求めを却下するようなことはしなかった。逆に、彼女はそのローションを塗ることでその皮膚炎を治してしまった。

☐ introduction 「序文」

☐ cure 「治療」

☐ resist 「～に抵抗する」

☐ conventional 「従来の」

☐ (be) acquainted with ～ 「～と知り合いである」

☐ (be) derived from ～ 「～から得られる；～に由来する」

☐ medicinal 「治療効果のある」

☐ dismiss 「～を却下する」

☐ claim 「求め；要求」

☐ apply 「～(薬)を塗る」

☐ heal 「～を治す」

第8 段落

この出来事や類似の出来事の結果、原住民の言語や伝統文化を通じ、彼らに知られている薬草をオーストラリア全土にわたって探す総合的な調査が始められた。ほとんどのオーストラリアの言語が消滅しつつあるので、この調査は迅速に行われる必要がある。それらの言語の消滅は、その中に蓄えられた医学的知識の消滅にもつながるのだ。

☐ incident 「出来事」

☐ result in ～ 「(結果として) ～をもたらし；～

が生じる」

☐ go 「なくなる；消える」

第9段落

マイケル・クラウドが述べているように、言語網は「高度に専門化された情報の小宇宙であり、どの言語もこの世界に対する独自の見解を持っている。1つの言語とは、単に同じことを言い表すための(他の言語とは)異なる言葉の集まりではない」のだ。ちょうど自然界の残存を生物学的多様性に依存しているのと同様、私たちは文化的残存を言語学的多様性に依存しているのである。

☐ microcosm 「小宇宙」

☐ have a take on ~ 「～に対する見解を持っている」

☐ biological complexity 「生物学的複雑性」

☐ physical survival 「自然界の残存」

読解 PLUS+ ONE パラグラフ展開を確認しよう

● 序論

① (ℓ. 1) Many linguists predict that at least **half of the world's 6,000 or so languages will be dead or dying by the year 2050.**

▶ 今世紀半ばまでに世界の言語の半数が絶滅もしくは絶滅状態になると予測されている。

② (ℓ. 6) Even **higher rates of linguistic devastation are possible.**

▶ さらに高い割合で言語の荒廃が進む可能性もある。

● 本論

③ (ℓ. 14) The definition of a healthy language is **one that acquires new speakers.**

▶ 言語が存続するには新たな話し手の獲得が必要である。

④ (ℓ. 24) But **language diversity is as important as biological diversity.**

▶ 言語の多様性は生物学的な多様性と同じく重要である。

⑤ (ℓ. 28) ... people do not yet know all the ways in which **linguistic diversity is important.**

▶ 言語多様性の重要さはまだあらゆる意味で理解されているわけではない。

⑥ (ℓ. 35) By **allowing languages to die out**, the human race is **destroying things it doesn't understand**, ...

▶ 言語を死滅させてしまうことによって、人類は自分が理解できないものを破壊している。

⑦ (ℓ. 37) Stephen Wurm, ..., tells the story of one
medical cure that depended on knowledge of a
traditional language.

▶ スティーブン・ワームは、(オーストラリアの) 伝統的な言語の知識に基づくある医学的な治療の話を語っている。

⑧ (ℓ. 48) When they (= Australian languages) go, the
medical knowledge stored in them will go too.

▶ オーストラリアの言語が消滅すれば、その中に蓄えられた医学的知識もまた消滅する。

● 結論

⑨ (ℓ. 53) ..., we depend on linguistic complexity for
our cultural survival.

▶ 私たちは文化的残存を言語学的多様性に依存している。

要約 言語の中には伝統的な知識や文化が蓄えられているので、現在急激に進行しつつある世界の少数言語の消滅を阻止しなければ莫大な遺産を失うことになる。言語多様性は人類の文化的残存の支えであり、生物多様性と同様に重要である。(106 字)

5 名付けることの意義

問題編 p.16

ものを名付けることの本当の意義とは何なのだろうか。また、それは私たちの知覚や認識にどのような影響を及ぼすのだろうか。

● 解答 (正しい答えをチェック)

① 語彙は豊富だが愚鈍で物知り顔の人がいる一方、語彙は少なくとも想像力や洞察力に富む人がいること。(47字)

② ④

③ しばしば厄介なのは、あらゆる出来事、あらゆる経験、はっきりと認識できるあらゆるものに名前をつけることに対するこの過度の重視である。

④ 星について少し学ぶと単なる「星」ではなく超新星や白色矮星や銀河が見えるように、名前を覚えるとそれまで見えなかったものが見えるようになること。(70字)

[別解] それまでは夜空にただ星が見えていたのに、天文学の講座で星の名前を知ると、単なる「星」ではなく超新星や白色矮星や銀河が見えるようになること。(69字)

⑤ ② ⑥ ① × ② ○ ③ ○ ④ ○ ⑤ × ⑥ ×

● 解説 (考え方をチェック)

1 内容の把握

下線部(1)を含む文は「こうした証拠があるのに、名前をつけることができればできるだけ物知りになれるとその信念は言い張る。」という意味で、such evidence は波線部内容の反証となる前文の内容を指す。前文に書かれている内容「語彙の豊富さと想像力や洞察力の豊かさは一致しない」ということを本文に沿って50字以内でまとめればよい。

2 文脈の把握

文脈から2つの空所に共通して入る前置詞を考える。空所を含む2文はともに第②段落第1文中の the need to know names in order to recognize experiences, and ... experiences that are not named are irrelevant 「経験を認識するには名前を知る必要があり、名付けられていない経験は意味がない」という西欧的思考に対する反例であることをまず押さえる。

(ア) 「すばらしい音楽を楽しめる」——「その作曲家名や題名、様式名を知りたいと思う」

(イ) 「暖かい春や非常に寒い冬の1日を楽しめる」——「温度計で測った正確な気温を予想する」

この比較対照から「思わなくても／予想しなくても」だとわかるだろう。したがって④の without が正解。なお、段落最後の文 But many will look ... はこの西欧的思考の表れを具体的に述べた一種の皮肉で、and then “see” the picture は「その次に(＝名前を知ったあとに)初めて絵が見えてくる(＝経験が認識される)」という意味である。

3

文構造の把握

語句 ・ exaggerated 「過度の；過大な」 ・ event 「出来事」 ・ perceive 「～を認識〔知覚〕する」
 ・ distinct 「はっきりした；明瞭な」 ・ disturbing 「厄介〔面倒〕な；問題である」

- 文は **It is ~ that ... の強調構文**。強調されるのは this exaggerated ... as distinct の部分だが、必ずしも「…なのは～である」と訳す必要はなく、強調の感じが出る訳ならよい。
- this exaggerated importance of ~ 「～のこの過度の重視」 this は前段落で述べられた名前に対する西欧的思考および段落最後の具体例を受けているが、特に内容を具体的に示す必要はない。
- of に続く動名詞は (V) naming (O₁) every event, (O₂) every experience, (O₃) every thing (perceived as distinct) の V - O 関係。perceived as distinct は「はっきりと認識できる」の意で every thing を修飾する。

採点のポイント

配点 10 点

① It is ② this exaggerated importance of naming every event, every experience, every
 It is ~ that ... の強調構文 (3 点) (5 点)
 thing perceived as distinct that ③ is often disturbing.
 (2 点)

- ① It is ~ that ... の強調構文 「…なのは～である」 (3 点)
 - (○) 「～なので…になるのだ」「この～が[こそが]…である」強調の意味合いが出る訳であればよい。
 - (×) 強調構文であることがとらえられていないもの
- ② this exaggerated importance of naming every event, every experience, every thing
 perceived as distinct 「あらゆる出来事, あらゆる経験, はっきりと認識できるあらゆるものに名前をつけることに対するこの過度の重視」 (5 点)
 - ➡ this exaggerated importance of naming (3 点)
 - (○) 「このように, ～に名前をつけることを重視しすぎることに」
 - ➡ every event, every experience, every thing perceived as distinct (2 点)
 - (×) 「はっきりと認識できるあらゆる出来事, あらゆる経験, あらゆること」 perceived as distinct を every event, every experience にもかけたもの。
 - (×) 「…, あらゆることがはっきりと認識できた」 perceived ... が every thing を修飾する過去分詞であることがわかっていないもの。
- ③ (that) is often disturbing 「しばしば厄介なのは」 (2 点)
 - (△) disturbing を「心をかき乱す」「騒々しい」などと訳したもの (-1 点) この文脈では「厄介〔面倒〕な；問題である」という意味。

4 内容の把握

下線部(3)の文は「1つは知覚上のフィードバック効果である。」という意味。feedback「フィードバック」はビジネスの世界などではすでに日本語化しているが、「(視聴者・読者・利用者などからの) 反応[意見・評価]」のこと。ここでは「名前を覚えるとももの見え方がどう変わるか」という意味で、具体例としてあとの第4文 Before ... と第5文 After ... に「星について学ぶ前とあとでの星の見え方の違い」が書かれている。解答は、「学ぶ前は夜空にただ星が見えていた」→「学んだあとは単なる『星』ではなく超新星や白色矮星や銀河が見えるようになる」という知覚上の変化の具体例を示し、この効果のまとめである第④段落最後の文の when names are learned we see what we had not seen「名前を覚えると私たちはそれまで見えなかったものが見えるようになる」で結べばよいが、別解のように具体例とこの部分を絡めてまとめる方法もある。

5 内容の把握

下線部(4)は「命名の2つ目の影響は、1つ目の効果と一見矛盾しているように思えるかもしれないが、いったん名前を覚えてしまうとものが見えなくなるということだ。」という意味。the failure to see ~ 「～を見損なうこと」は we fail to see ~ 「～を見ることに失敗する」を名詞構文で表したもので、これがどういう意味なのかをこのあとの文脈から把握するのがポイント。下線部のあとの説明を要約すると「もし夜空を見上げたことが一度もなく、『星』という名前など知らなかった者が夜空を見上げれば、いわゆる星も見えるだろうが、そのひとつひとつが同じではないことにも気づくだろう。これは『星』という名前を知らないから(最終文 Lacking [= Because we lack] a single name for ... 参照)可能になるのであり、実際には、多様な星を総称する名前を知っているのに、そんな違いを見損なってしまう」ということで、「(名前を覚えるとそれまで見えなかったものが見えるという)1つ目の影響と矛盾しているように思える」のはこの点である。したがって、この意味を一般化して述べた②が正解。①について、本文は名前を覚えることによる知覚の変化は論じているが、これは how to see (things) とは意味が違う。また、第④段落最後は for we know what to look for (探す)である。③の「その多様な形態や細部の複雑さのためにもものが見えづらくなる」、④の「わざわざそれを見ようという気持ちが薄れ、ものをよく見なくなる」という記述は本文にはない。

6 内容の把握

①×「私たちが名付けることで物事を知るのは当然のことだと思われるが、これは ある程度正しい。」

第①段落第2文に「名付けることができる→それを知ること：定義できる→それを真に理解したこと」という common belief が書かれているが、次の第3文では Neither assumption is correct と否定されている。

- ②○「西欧人は経験を認識するには名前をつけることが欠かせないと信じているので、命名を重視する傾向がある。」

第②段落第1文から、ヨーロッパ人は、経験を認識するには名前を知る必要があると考えるために名付けることに執着していると読み取れるので、本文の内容に一致する。

- ③○「たいていの場合、人々は美術展で実際に絵を見るより、その画家やタイトルを知ることの方に重きをおく。」

第③段落の最後の2文の内容に一致する。more often than not「たいてい；しばしば」

- ④○「名付けることの意義は名付けること自体にあるのではなく、その名前によってさまざまなもののあいだの結びつきを示唆することにある。」

第④段落の第3文に「そうしなければいくらでもものに名前がつけられる」と述べた上で、第4文以降で「単なる名前のリストは役に立たない」と反証し、最後の文で名付けることの意義を挙げている。この意義に該当するので、本文の内容に一致する。

- ⑤×「晴れた夜に空を見上げ星を見るxだけで、自分が取るに足りない存在であることがx確かによくわかる。」

第⑤段落第6文 Your responses to what you see may include ... に「自分が取るに足りない存在のように思える」という意味内容は出てくるが、これは名前を知ったあとの知覚の変化にはこのような感覚も含まれるかもしれないと述べているだけである。

- ⑥×「xもし空にあるものが星と呼ばれるとわかれば、あなたはそれらがみな違っていることに気づくだろう。」

第⑥段落第2文の仮定 suppose that ... は「もし空にあるものが『星』と呼ばれることなどまったく知らなかったなら」である。

● 全訳 英文内容をチェック

第1段落

▶¹ あらゆるものに名前をつけられることがしばしば教育としてまかり通っている。何かに名前をつけることができるのはそれを知ることであり、何かを定義できればそれを「真に理解」したことになるというのが一般的な信念である。もちろん、どちらの思い込みも正しくない。豊富な語彙力を持ちながら愚鈍で物知り顔の人がいる一方、語彙は限られていても想像力や洞察力に富む人がいるのだ。こうした証拠があるのに、名前をつけることができればできるほど物知りになれるとその信念は言い張る。名前をつけること自体が問題なのではない。というのも、名付けることは言語の基本だからだ。そうではなくて、時として問題を引き起こすのは、名付けることについてのその間違った考え方や名前の過大な影響なのである。名前に関するよくある間違った考え方の1つは、おのおのの「もの」の正しい名前は1つだけだという考えである。

▶ 1 (第1文) 名詞構文〈抽象名詞+to不定詞〉

The ability to give a name to everything often passes for education.

S「～に名前をつける能力」(→ be able to do)

主語は the ability ... everything の部分で、形容詞や動詞が名詞化されて文に組み込まれた名詞構文。ここでは、形容詞用法の不定詞が前の名詞の内容を説明している。第②段落第1文 the need to know names, 下線部(4) the failure to see things も同じタイプの表現である。英文読解では動詞的に解すると意味がわかりやすくなることが多く(⑤解説参照)。また、語数制限のある英作文や英語での要約などでは簡潔な英文作成に役立つので慣れておきたい。

- ☐ pass for ~ 「～として通る」
- ☐ assumption 「思い込み；仮定」
- ☐ pedantic 「物知り顔の」

- ☐ perceptive 「洞察力の鋭い」
- ☐ persist 「(あくまで) 主張する」
- ☐ erroneous 「間違った」

第2) 段落

おそらく、ヨーロッパの言語及び（言語ではなく文化に基づく）思想の多くを特徴づける、名付けることへの執着に対する最もよく見られる批判は、経験を認識するためには名前を知る必要があることや、名付けられていない経験は意味がないというそれに付随する考えに向けられている。どれほど多くの人々がその作曲家名や題名、様式名を知りたいと思わずに1曲のすばらしい音楽を単純に楽しめることか。どれほど多くの人々が温度計で測った正確な気温はどれくらいかと考えたりしなくとも、いつになく暖かい春や非常に寒い冬の1日を楽しめることか。展覧会の会場にいる人々を観察してみるといい。展示されている絵だけを観る人も、最初に絵を観てそれからその画家やタイトルについて書かれたキャプションを見る人もいくらかはいるだろう。しかし、多くの人は最初にそのラベルを探し、それからその絵が「見えてくる」のだ。

- ☐ pervasive 「広がった；浸透した」
- ☐ obsession with ~ 「～への執着」
- ☐ be leveled at ~ 「～に向けられる」
- ☐ irrelevant 「無関係の；意味がない」

- ☐ speculate on ~ 「～について推測する、考えをめぐらす」
- ☐ thermometer 「温度計」
- ☐ caption 「短い説明文」

第3) 段落

このように、あらゆる出来事、あらゆる経験、はっきりとわかるものなら何にでも名前をつけることを重要視しすぎるのでしばしば面倒なことになる。名付けることへの執着は、▶² ほとんどのスポーツ行事の統計的処理がそうであるように、しばしばその名前や情報が最も重要でない場合にも見られることがある。そうしたればいくらでもものに名前がつけられることに気づいている人はほとんどいない。初心者には暗号でしゃべっているかのように思える専門家や趣味人と同様、まだ一度も名付けられていない「もの」を表す名前の手の込んだリストを作り出すことぐらい私たちでもできる。もちろん、そんなリストは役に立たないだろう。というのも、名付けることの真の意義は重要な物事についてその重要性がよくわかるように表記し、いろいろな結びつきがうまく示唆されるようにすることにあるからだ。

▶2 (第2文) as の用法

... when the names and information are often the least important, **as (it is)** in the statistical treatment of ...

この文の as は節内の (S + V) が省略された「様態」を表す接続詞で、「(それは) ~におけるように」の意味。より具体的に言えば as it can be observed in ~ 「~においてそれが見られるように」ということである。

- ☐ statistical treatment 「統計的処理」
- ☐ hobbyist 「愛好家；趣味人」
- ☐ the uninitiated 「初心者；十分な知識のない人」
- ☐ in code 「暗号で」

- ☐ elaborate 「念入りな；手の込んだ」
- ☐ notation 「表記すること」
- ☐ indicate 「～を示唆する」

第④段落

名前を覚えてしまうと、少なくとも2つの効果が生じる。1つは知覚上のフィードバック効果である。私たちは名前を知ったそうしたものに気づき始める。天文学の講座を受ける前には、ある晴れた夜、あなたは空を見上げてもっぱら星が見えた経験があるかもしれない。しかし、数週間学んだあとでは「星」は見えない——代わりに、あなたには「超新星」や「白色矮星」や「銀河」が見える（あるいは、見えていると言う）。目にするものへのあなたの反応には、はるかな距離と遠景に対する今までにないわくわくするような感覚もあるかもしれないし、その中にはこの広大な宇宙にあって自分など取るに足りないという感覚も含まれるかもしれない。もちろん、こういう結果はただ空に点々と輝くものの名前だけではなく、それらの形状も知ったことから、また、それらについて学んだ事柄からも生じたものだ。しかしそのような意味は必ず、以前はすべて「ただの星」に思えていたものが象徴的に区別されたあとに生じるものだ。よかれ悪しかれ、名前を覚えると私たちはそれまで見えなかったものが見えるようになる。というのも、その名前で何を探すべきかを知ってしまうからだ。

☐ astronomy 「天文学」

☐ perspective 「遠景；眺望」

☐ insignificance 「取るに足りないこと」

☐ configuration 「形状」

☐ follow 「～に付随する；～のあとにくる」

☐ for better or for worse 「よかれ悪しかれ」

第⑤段落

命名の2つ目の影響は、1つ目の効果と一見矛盾しているように思えるかもしれないが、いったん名前を覚えてしまうものが見えなくなることだ。先に示した例を別な形で取り上げ、私たちがわざわざ夜空を見上げたりすることはそれまで一度もなかったために、空にあるものが「星」と呼ばれることなどまったく知らなかったと仮定しよう。その場合、ある晴れた夏の夜、空を見上げるとどうだ！何が見えるだろうか。単に「星」が見えるということもあり得るが、また夜空に点々と輝く光のひとつひとつがみな一様ではないことに気づく可能性もある。私たちは星の多様な輝きや色を1語で表すような名前を知らないのだから、おそらくさまざまな違いに気づくのであり、その結果、それらがみな同じだなどと頭から決めてかかるようなことは決してしないのだ。

☐ contradict 「～と矛盾する」

☐ suppose that ... 「…であると仮定する」

☐ bother to do 「わざわざ…する」

☐ cast 「(視線など)を向ける」

☐ and behold! 「するとどうだろう！」

☐ range 「幅；範囲」

Unit 2

子供の成長にとって仲間集団は親とどう違うのか、また、それはどのような特性を持つものだろうか。

●● 解答 ◀ 正しい 答え をチェック

- ① 子供時代に親とよい関係が築ければ、それは持続する可能性が高い。親というのは単に子供が成人になったというだけで重要さを失うわけではない。
- ② それで、私の考えでは、子供は自分たちがどんな種類の人間なのか——子供か大人か、男性か女性か——を理解し、それからその種の人たちがどう振舞うかを観察することによって社会化するのである。
- ③ ② ④
- ⑤ 興味、能力、民族を基に学校や地域で自分たちを分類して種々の集団を作るが、受け入れ集団が見つけれられない者同士の集団もある。(60字)
- ⑥ 子供が入る仲間集団を決める力が親にあるか否かについて、筆者はまずないだろうと推測している。親の勧める集団に入ろうとする子供でさえ思い通りにならないのは、多くの場合、子供が仲間集団を選ぶのではなく、仲間集団の方が子供を選ぶからなのだ。(116字)

● 解説 ◀ 考え方をチェック

1 文構造の把握

圖解

(If a good relationship with a parent is formed (in childhood)),

it is likely to be maintained.

be likely to do 「…しやすい；…する可能性が高い」

Parents don't stop being important [(merely) because one has reached adulthood].

語句 ・ relationship with 「～との関係」 ・ form 「～を築く」 ・ in childhood 「子供時代に」
 ・ maintain 「～を持続〔維持〕する」 ・ stop doing 「…するのをやめる」 ・ merely because
 「ただ～という理由で」 ・ adulthood 「成人」

- 第1文：「(もし) ～な場合は…する可能性が高い」が文の骨格。
- 第2文：**not ... merely because** ～「ただ～という理由で…するわけではない」と **stop doing**「…するのをやめる」に注意。**stop doing**と**stop to do**の違いも確認しておこう。前者の**stop**は他動詞で**doing**はその目的語、後者は自動詞で**to do**は不定詞の副詞用法で、「…するために立ち止まる；立ち止まって…する」の意味を表す。

を切り離すことができる」と述べられている。つまり、第8文とは逆接の関係、すなわち「(しかし) 訛りの場合には」In the case of accents の意味で接続することがわかる。したがって、④が正解。

5 内容の把握

下線部(d)を含む文の直後にある第3文 In adolescence, young people ... に、思春期に若者たちが“peer group”を形成する方法が述べられている。「自分たちの興味や能力、あるいは属する民族に基づいて学校や地域内部で自分たちを分類し、種々の集団を形成する」という内容を「興味、能力、民族を基に学校や地域で自分たちを分類して種々の集団を作る」などと要約する。さらに、続く第4文の「中には、主として自分を受け入れてくれる集団が見つけれられない子供たちから成る仲間集団もある。」という補足も、「受け入れ集団が見つけれられない者同士の集団もある」などと凝縮して付け加えられればさらによい。

6 内容の把握

下線部(e)の問いは「親には自分の十代の子供たちが学校でどの仲間集団に入るかを定める何らかの力があるのだろうか。」というもの。これについての筆者の推測とその理由は第4、5文で述べられている。

・ My guess is that **parents generally have little or no influence.** 《推測》

「私の推測」＝「一般的に親はほとんどもしくはまったく影響力を持たない」

・ Even teenagers who would like to ... may be powerless to do so **because in many cases it isn't the kid who selects the peer group; it's the peer group that selects the kid.** 《理由》

「…したいと思う十代の子供でさえ、思い通りにならないだろう。なぜなら、多くの場合、子供が仲間集団を選ぶのではなく、仲間集団の方が子供を選ぶからだ」

●筆者の推測自体は第4文のとおりだが、何についての推測なのか（下線部(e)の内容）も手短かにまとめて含めること。「子供が入る仲間集団を決める力が親にあるか否かについて、筆者はまずないだろうと推測している。」

●第5文の because 以下、it isn't ~ who ... と it's ~ that ... の2つの強調構文で書かれている内容は決定的な理由として必須事項である。さらに、全体で120字以内と字数が多いので、この理由をサポートする主節内容も補足的に含めるようにしたい。ここでは be powerless to do so の解釈に注意。「そうするだけの力がない」とは「親の助言に従うだけの力がない」つまり「親の勧める集団に入れない」という意味である。ここから「親の勧める集団に入ろうとする子供でさえ思い通りにならない〔そううまくはいかない〕」と短くまとめられる。

●あとは全体が「筆者の推測とその理由」の説明としてわかりやすい流れになるように、「～について筆者は…と推測している。～でさえ…なのは、…だからである。」と文を構成する。

第1段落

子供の人生において親が重要な人たちであることは否定しない。子供時代に親とよい関係が築ければ、それは持続する可能性が高い。親というのは単に子供が成人になったというだけで重要さを失うわけではない。しかし、親との関係は子供の人格にいつまでも消えない痕跡を残したりはしない。直感的にそうではないかと思われるのとは逆に、誰かの父親に対する振る舞い方からその人の上司との接し方が予測できるわけではないことを調査結果が示している。同様に、きょうだいに対する振る舞い方からその人が友だちとどう接するかが予測できるわけではない。きょうだいとはけんかばかりしている子供が、友だちとは穏やかな関係を持つことは十分にできる。親ときょうだい人間関係の枠組みの中で大きな役割を果たすのは事実だが、それは限られたものである。

- ☐ leave a permanent mark on ~ 「～に永続的な痕跡を残す」
- ☐ counterintuitively 「直感に反して」 (counter 「反対」 + intuitively 「直感的に」)
- ☐ likewise 「同様に」

- ☐ sibling 「(男女の別なく) きょうだい」
- ☐ fight like cat and dog 「大げんかをする；けんかばかりしている」
- ☐ be fully capable of doing 「十分…できる」
- ☐ serene 「穏やかな；落ち着いた」

第2段落

子供の社会化システム——子供たちに順応するよう動機づけるシステム——にとって、重要な人々は仲間である。しかし、仲間からの圧力が問題なのではない。子供たちに順応するよう無理強いする必要はない。彼らのほうが順応したがるのだから。

- ☐ socialisation (= socialization) 「社会化」
- ☐ motivate ~ to do 「～に…するよう動機づける」
- ☐ fit in 「順応する」
- ☐ peer pressure 「仲間〔周囲〕からの圧力」

- ☐ push ~ to do 「～(人)を強いて…させる」
- ☐ conform 「順応する (= fit in)」
- ☐ they want to = they want to conform

第3段落

彼らは自分たちの仲間を観察して、その文化にふさわしい振る舞いをするようになる。子供は、親が大人だからという理由でただ彼らの真似をしただけではできないし、また、大人のように振舞うことを期待されているのでもない。▶ 大人みたいに振舞う子がいたら異常に見えるだろう。それで、私の考えでは、子供は自分たちがどんな種類の人間なのか——子供か大人か、男性か女性か——を理解し、それからその種の人たちがどう振舞うかを観察することによって社会化するのである。幼い少女は他の幼い少女たちを観察することで幼い少女にふさわしい振る舞いとはどのようなものかを理解する。この種の学習はほとんど無意識下で行われ、決して意識されることはない。それゆえ、子供がどう社会化したかについての人々の直感的な考えは誤りやすいのである。

▶ 1 (第3文) 関係代名詞節に仮定の意味が含まれる仮定法の文

A child who behaved like an adult would appear abnormal.



「～のように振舞う(とすれば)」⇔ If a child behaved like an adult, he/she ... 《仮定法過去》

- ☐ learn to do 「…するようになる」
- ☐ be appropriate to ～ 「～にふさわしい」
- ☐ abnormal 「異常な」
- ☐ underground ㊦ 「地下の→無意識の」

- ☐ conscious mind 「意識」
- ☐ That's why ... 「そういうわけで…」
- ☐ intuition 「直感（的な考え）」

第4段落

仲間とは子供の身分制度にとって別の意味で重要である。子供はただ仲間たちに順応しようという意欲を持つだけでなく、自分の仲間より優れていたいとも思うのだ。しかし、どうやって優れるのか。自分の努力が最も成功をもたらしやすいのはどこかを見つけるために、子供は自分の長所と短所を知らなくてはならない。▶2 彼らは自分自身を仲間と比較したり、あるいは比較されたりすることによって、この自己認識を獲得する。子供は自分は賢いと思うために、父親より物知りである必要はないが、同じ年頃の子供たちより物知りでなければいけないのだ。

▶2 (第5文) 共通構文 (共通語句が後ろに置かれた形)

They ... by comparing themselves, or by being compared, with their peers.

「彼ら自身を比較する」

「比較される」

「～と」前置詞 with 以下が共通

- ☐ in what way 「どのようにして；どういう方法で」
- ☐ yield success 「成功をもたらす」
- ☐ strengths and weaknesses 「長所と短所；強みと弱み」

- ☐ obtain 「～を獲得する」 (= get)
- ☐ self-knowledge 「自己認識」
- ☐ ～ (of) one's age 「同じ年頃 [年齢] の～ (人)」

第5段落

こうしたことのすべては親の家の外の世界で進行する。しかし、親がその世界に対しある程度、支配力を持っているのも事実だ。どこに住み、子供をどの学校へ行かせるかを決めることで、親は誰が子供の仲間になるかを決めることになる。もし親がカナダに移り住むとしたら、子供たちの仲間はカナダ人になる。こうした決定の影響は長く続くものである。親は自分の英国訛りを保つだろうが、子供はすぐに同じ学校に通う仲間たちの訛りを身につけてしまう。訛りというのは、(ほとんどの行動と違い) 遺伝子に影響されないで、子供の社会化過程を示す有益な指標である。読書好きだとか、積極的に行動するだとか、信心深いだとかいった点で子供が親に似る場合、その遺伝的な影響、親や文化の影響という連鎖は分かちがたいものだ。しかし、訛りの場合には、そうした連鎖は切り離すことができる。訛りは文化の一部（あるいは下位文化）であり、子供たちは自分たちの文化を仲間から獲得するのである。

- ☐ lasting 「長続きする；持続的な」
- ☐ retain 「～を保つ」
- ☐ informative 「(情報が) 有益な」
- ☐ indicator 「指針」
- ☐ gene 「遺伝子」

- ☐ resemble ～ in ... 「～に…の点 [面] で似る」
- ☐ religious 「宗教的な」 (㊦ religion 「宗教」)
- ☐ strand 「連鎖；鎖」
- ☐ subculture 「下位文化；サブカルチャー」

第6段落

仲間は子供時代全体を通じて重要なものである。しかし、「仲間集団」という用語は普通、十代の若者に対して使われる。思春期に、若者たちは自分たちの興味や能力、あるいは属する民族に基づいて学校や地域内部で自分たちを分類し、種々の集団を形成する。中には、主として自分を受け入れてくれる集団が見つけれられない子供たちから成る仲間集団もある。思春期の仲間集団がそのメンバーの行動に短期的な影響を及ぼすことははっきりしている。長期的な影響を及ぼすかどうかは判断が難しい。というのも、これらの集団のメンバーを識別する特徴のほとんどがその集団が形成されるずっと前からあったものだからだ。

- ☐ adolescence 「思春期」
- ☐ sort ~ out into ... 「～を分類して…にする」この into は '推移・結果' を表す。
- ☐ neighbourhood 「地域」
- ☐ on the basis of ~ 「～に基づいて」

- ☐ ethnic group 「民族（集団）」
- ☐ be composed of ~ 「～から成り立つ」
- ☐ short-term 「短期的な；短期間の」
- ☐ characteristic 「特徴；特性」
- ☐ distinguish 「～を区別する」

第7段落

親には自分の十代の子供たちが学校でどの仲間集団に入るかを決める何らかの力があるのだろうか。理論的には可能である——音楽のレッスン、テニスのレッスン、あるいは服装によっても違いが生じるかもしれない——が、私は説得力のある証拠は見たことがない。思春期の仲間集団についてなされる研究のほとんどは、その研究方法が環境の影響と遺伝子の影響を区別する方法をまったく備えていないので、ほとんど価値がないのだ。私の推測では、一般的に親はほとんどもしくはまったく影響力を持たない。親の助言に進んで従おうとする十代の子供たちでさえ、思い通りには行かないだろう。なぜなら、多くの場合、子供が仲間集団を選ぶのではなく、仲間集団の方が子供を選ぶからだ。

- ☐ theoretically 「理論的に」
- ☐ convincing 「説得力のある」
- ☐ of little value 「ほとんど価値がない」〈of + 抽象名詞〉で形容詞のはたらきをする表現。

- ☐ environmental 「環境の」
- ☐ be powerless to do 「…するだけの力がない」

● 導入

- ① (ℓ. 1) I do not deny that parents are important
/ (ℓ. 4) But relationships with parents **leave no permanent marks on the personality.**

▶子供の人生において親は重要だが、その関係は子供の人格に永続的な痕跡を残すものではない。

● 本論

- ② (ℓ. 12) For the socialisation system ... **the important people are peers.**

▶子供の社会化システムにとって重要なのは仲間である。

- ③ (ℓ. 15) They learn to behave **in a way that's appropriate to their culture by observing their peers.**

▶彼らは自分たちの仲間を観察して、その文化にふさわしい振る舞いを習得していく。

- ④ (ℓ. 25) Peers are important in a different way for **the status system.**

▶仲間は子供の身分制度にとって重要である。

- ⑤ (ℓ. 33) All this goes on in **the world outside the parental home.**

▶子供の地位獲得競争は親の家の外の世界で進行する。

- ⑥ (ℓ. 46) **In adolescence**, young people sort themselves out into **different groups** ...

▶思春期に、若者たちは興味、能力、民族などを基に種々の集団を形成する。

- ⑦ (ℓ. 59) ... **parents generally have little or no influence. ... because ... it's the peer group that selects the kid.**

▶子供がどの集団に入るかに関して親の力は及ばない。集団の方が子供を選ぶからだ。

要約

子供の社会化過程で重要なのは仲間で、彼らは仲間を観察してその文化を習得し、その中で子供の身分制度も学ぶ。思春期に、若者たちは種々の集団を形成するが、どの集団に入るかは集団の方が子供を選ぶので親の力は及ばない。(104字)

7 脳と身体の密接な関係

問題編 p.23

私たちは普通、脳でものを考えると信じているが、最近の多くの研究から思考は脳と身体との密接な関係によって行われることがわかってきている。「身体化的認知」とはどのようなものなのだろうか。

● 解答 <正しい答え> をチェック

- 1 論理的な問題の解決に頭を使っている間にある特定のやり方で目を動かすよう指示されたグループの人たちは、その問題が解ける可能性が（そうでないグループに比べ）2 倍高かった
- 2 this new model of mind
- 3 脳の内部で生じていることは大部分、身体全体に生じていることに左右されるのかもしれない
- 4 共感などの人間の特性、時間や空間といった概念、言語の深層構造やいくつかの数学の最も難解な原理など。（49 字）
- 5 行動することと思考することがそれほど離れていない可能性。（30 字）
- 6 6

● 解説 <考え方> をチェック

1 文構造の把握

図解

a group of people [(asked to move their eyes in a specific pattern) / while
 s ↑
 (they were) puzzling through a logical problem] were twice as likely to solve it
 v c

語句 ・ in a specific pattern 「一定〔特定〕のやり方で」 ・ puzzle through [over] ～ 「～を解決しようと頭を悩ませる〔ひねる〕」

- asked は述語動詞ではなく、形容詞用法の過去分詞。asked to ... a logical problem までが a group of people を修飾し「…するよう指示されたグループの人たち」という主部を構成する。
- be twice as likely to do 「2 倍…する傾向がある〔可能性が高い〕」be likely to do に倍数を表す twice as ... as ～ 「～の 2 倍…」がついた比較表現だが、比較の対象（そうでないグループの人たち）が文脈上明らかなので as ～ は省略されている。和訳上は「そうでないグループに比べ」と補う方が文意が明確になる。

答案作成上のポイント 主語が過去分詞が導く形容詞句に修飾される場合、ややもするとその過去分詞を文の述語動詞と誤解しやすい。英文和訳にあたっては、まず 1 文全体としての SV 「何〔誰〕が…である〔…する〕」を押さえ、文の要素をしっかりとつかむようにしたい。

2 指示語の把握

下線部(2)の文意は「ある教育者たちは子供の教育の新たな理論的枠組みをその中に見出している」で、seeの目的語(a new paradigm for teaching children)が長いのでin itが目的語の前に置かれている。itは、直接には前文The term most often used to describe this new model of mind is “embodied cognition,” ... のembodied cognitionを指すが、5語という指示があるので、これの言い換えに当たる**this new model of mind**が正解となる。

3 文構造の把握

図解

what's going on inside the brain (in large part) may depend on what's going on in the body as a whole
S V O

語句 ・ in large part 「大部分 (は)」 ・ depend on ～ 「～に依存する [左右される]」

・ ～ as a whole 「～全体で」

- 2つのwhat'sの**what**はいずれも関係代名詞で、それぞれ文の主語、目的語となる名詞節を導く。
- (be) going onは「行われている;起きている」(= happening)の意味。what's going onで「起きて [生じて] いること」となる。

4 内容の把握

these conceptsを含むthat節の意味は「もし私たちが直立歩行をしなかったり、恒温動物でなかったりしたら、これらの概念をまったく違ったふうに理解するかもしれない」。前文は、A few argue that ①human characteristics like empathy, or ②concepts like time and space, or even ③the deep structure of language and ④some of the most profound principles of mathematics, can ultimately be traced to the idiosyncrasies of the human body. 「一部には、①共感のような人間の特性あるいは②時間や空間といった概念、さらには③言語の深層構造や④数学の最も難解な原理のいくつかさえ、究極的には人間の身体の特異性に遡ることができる」と主張する人もいる。」となっていて、these conceptsの具体的な内容とは上の①～④である。

5 内容の把握

「ミラーニューロン」とは、そのあとのthat節にあるように「他人の行動なのに、それを見たりそれについての説明を聞いたりする時に、まるで自分がその行動をしているかのように反応する」細胞のこと。その現象が示唆する内容は第⑩段落の最終文で述べられている。

図解

By simultaneously playing a role in both acting and thinking, mirror neurons

《手段(根拠)》

suggested that the two might not be so separate after all.

《示唆内容》

By 以下の「行動と思考の両方において同時に1つの役割を果たす」は前文の“mirror neurons” that ... 以下に示された現象を抽象化して述べたもの。この現象から示唆されることが mirror neurons suggested that 以下で述べられている。

答案作成上のポイント 解答は that 以下をまとめればよいが、the two は解答説明文では「その2つ」や「両者」では正解とはならない。**the two は acting and thinking を指す**ので、「行動することと思考すること」などとする。なお、might not be so ~ の might は suggested との時制の一致で may が過去形になったもの。「…かもしれないこと;…だろうということ」のほか「…である可能性」と短くまとめることもできる。

6 文脈の把握

(ア)~(イ)に入るのはいずれも to 不定詞をつくる動詞の原形で、文型と文脈から考える。

(ア) use the emerging findings to () patients recover ...

V O C (=原形)

この文型をとるのは選択肢中では help のみ(help + O + (to) do[Oが…するのを助ける])。「患者が～を取り戻すのを手助けするために」となって文脈上も問題ない。

(イ) If you want to () a computer to play chess

V O C (= to 不定詞)

この文型をとるのは help と teach だが、help はすでに使われたので、<teach + O + to do>[Oに…の仕方を教える]の形にすると、意味も「コンピュータにチェスを(することを)教える」で文脈にも合う。6以外に(ア)help -(イ)teach の組み合わせはないので、ここで6が正解とわかる。

(ウ) head-shrinkers ... enlist the high-tech of their day to (describe) the human cognitive system

「人の認知システムを説明する」は主語の「精神科医」の行為として文脈が通る。

(エ) however, a group of scholars began to (contest) this approach

「このアプローチに異議を唱える」。「このアプローチ」とは第 ⑧, ⑨ 段落で述べられた、デカルトに始まる心身分離の方法論のことである。この文が逆接を表す however で接続されていることから、ここは contest 「～に異議を唱える」(= challenge) で問題ない。

第1段落

脳はコンピュータのようなもので、身体はその汎用の道具だと思われるがちである。しかし、相次ぐ新しい研究が両者の間にはもっと協同的なものが生じていること——私たちは脳だけでなく身体でも考えるということを示唆している。最近の一連の研究によって、考えながら手を使うように指示されると、子供たちは数学の問題がよりよく解けることがわかっていく。もう1つの最新研究では、舞台俳優は身体を動かしている時にせりふをよりよく覚えることがわかった。また、昨年発表されたある研究では、論理的な問題の解決に頭を使っている間にある特定のやり方で目を動かすよう指示されたグループの人たちは、その問題が解ける可能性が（そうでないグループに比べ）2倍高かった。

- ☐ **envision** ～ as ... 「～を…と思い描く」
- ☐ **all-purpose** 「万能〔汎用〕の」
- ☐ **a growing body of** ～ 「ますます多くの～；相次ぐ～」（a body of ～ 「多くの～」）

- ☐ **collaborative** 「協力〔協同〕的な」
- ☐ **line** 「（役者の）せりふ」

第2段落

この新しい心のモデルを表現するのに最もよく使われる用語は「身体化的認知」で、その理論を推進する人たちは、それが人間の心の能力を理解し、かつそれを高めるまったく新しい道を切り開くと考えている。ある教育者たちは子供の教育の新たな理論的枠組み、すなわち、読み書きや暗唱よりも運動や模擬実験を優先する枠組みをこの身体化的認知に見出している。リハビリ医療の専門家たちは、脳卒中やその他の脳損傷のあとで失われた技能を患者が取り戻すのを手助けするために、もしかするとこの新しい発見を使えるかもしれない。▶¹ しかし、最大の影響は神経科学の分野そのものにあり、その分野では、心についての伝統的な考え方の基礎をなしてきた旧来の区別——脳と身体だけでなく、知覚と思考、思考と行動、さらには理性と本能の区別まで——を身体化的認知が脅かしている。

▶ 1（第4文）関係副詞 **where**：先行詞と関係代名詞節の分離

The greatest impact, however, has been (in the field of neuroscience itself,) [where embodied cognition threatens age-old distinctions (— not only between brain and body, but between perceiving and thinking, ... —) [on which the traditional idea of the mind has been built.]]

S
V
↑

S'
V'
O'
↑

distinctions between A and B 「AとBの区別」

ダッシュ（—）で囲まれた補足部分のあとに、先行詞 distinctions を修飾する形容詞節が続く形。

- ☐ **embodied cognition** 「身体化的認知（身体化された認知）」
- ☐ **champion** 「推進派；擁護者」
- ☐ **open up** ～ 「～を切り開く〔開拓する〕」
- ☐ **enhance** 「～を高める；強める」
- ☐ **paradigm** 「理論的枠組み；パラダイム」
- ☐ **privilege** ～ over ... 「…に優先して～に特権を与える；…より～を重視する」

- ☐ **simulation** 「模擬実験；シミュレーション」
- ☐ **rehabilitative** 「リハビリの」 (図 rehabilitation)
- ☐ **emerging** 「新興の；新しい」
- ☐ **stroke** 「脳卒中」
- ☐ **age-old** 「昔からの；旧来の」
- ☐ **perceive** 「知覚する」 (図 perception)
- ☐ **instinct** 「本能」

第3.4 段落

「これは革命的な考えだ」とセントラルフロリダ大学の認知科学研究部長ショーン・ギャラガーは言う。「身体化という見解において認知というものを説明しようとする場合、ただ脳の内部に目を向けるだけでは不十分である。どんな特定の事例でも、脳の内部で生じていることは大部分、身体全体に生じていることと、その身体が環境の中にどのように置かれているのかに左右されるのかもしれない。」

言い換えれば、ウィスコンシン大学の身体化的認知研究所のモットーのとおり、*Ago ergo cogito*「我行動する、故に我思考する」なのだ。

- ☐ **director** 「(研究機関の) 部長; 所長」
- ☐ **cognitive** 「認知の; 認知に関する」
- ☐ **embodied view** 「身体化(的認知)という見解」
- ☐ **instance** 「事例; 場合」
- ☐ or 「すなわち; 言い換えれば」

- ☐ **as ~ put it** 「～が言う〔表す〕ように」
- ☐ *Ago ergo cogito* (I act, therefore I think.) デカルトの有名な言葉 *Cogito ergo sum* (I think, therefore I am.) を踏まえて言い換えたもの。

第5 段落

この新進分野は何十年にもわたる人間の動作と身振りの研究の上に築かれている。以前の研究の多くは、コミュニケーションにおける身振りの役割を調べ、身振りが話し言葉から生成するのかどうかを問うたり、人はなぜ電話で話す時に身振りを使うのかを探索したりしていた。

- ☐ **grow out of ~** 「～から生じる〔生成する〕」

第6 段落

しかし今日では、神経科学者も言語学者も哲学者もずっと大胆な主張をしている。一部には、共感のような人間の特性や、時間や空間といった概念、さらには言語の深層構造や数学の最も難解な原理のいくつかさえ、究極的には人間の身体の特異性に遡ることができると主張する人もいる。もし私たちが直立歩行をしなかったり、恒温動物でなかったりしたら、これらの概念をまったく違ったふうに理解するのかもしれない、と彼らは言う。身体を持つという経験は私たちの知性と密接に結びついていると彼らは主張する。

- ☐ **neuroscientist** 「神経科学者」
- ☐ **make a claim** 「主張する」
- ☐ **bold** 「大胆な」
- ☐ **empathy** 「共感」
- ☐ **profound** 「難解な; 深遠な」

- ☐ **ultimately** 「究極的には」
- ☐ **walk upright** 「直立歩行する」
- ☐ **warm-blooded** 「温血の; 恒温の」
- ☐ **intimately** 「密接に」
- ☐ **be tied to ~** 「～に結びついている」

第7 段落

「もしあなたがコンピュータにチェスを教えたり、検索エンジンの設計をしたいのであれば古いモデルでかまわないが、本当の知性を理解したいと思うのであれば身体を取り上げなくてはならない。」とチューリッヒ大学の人工知能研究所所長ロルフ・ファイファーは言う。

- ☐ **artificial intelligence** 「人工知能」
- ☐ **lab** 「研究所」 (= laboratory)

第8段落

身体化的認知は数世紀続いた思考に関する考えを覆すものである。^{▶2} ルネ・デカルトは蒸気機関がまだ目新しい物だった時代に生きた人で、彼は脳を「原動力となる液体」を身体に送り込むポンプだと考えていた——いつの時代も精神科医には人間の認知システムを説明するのにその時代の先端技術の助けを借りようとする傾向が見られる。だが、デカルトは、精神はまったくの別物であり、松果腺を通じて身体と相互作用する実体のない存在だと主張した。

▶2 (第2文) 分詞構文：ダッシュ (—) の用法

René Descartes (, living in an age when steam engines were novelty items,) envisioned the brain as a pump [that moved “animating fluid” through the body] — head-shrinkers (through the ages) have tended to enlist the high-tech of their day to describe the human cognitive system — but the mind, Descartes argued, was ...
 S (=, who lived in ...) V
 O C ↑ ダッシュ (—) 内は René Descartes ... as a pump 全体を補足している
 S' V'
 = Descartes argued the mind was ...

- ☐ novelty 「珍しい；目新しい」
- ☐ animating fluid 「原動力となる液体」(animate「～を活気づける」)
- ☐ through the ages 「昔から；いつの時代も」

- ☐ enlist 「～に助け(協力)を求める」
- ☐ entirely 「まったく；完全に」
- ☐ entity 「存在(物)」
- ☐ interact with ～ 「～と相互に作用する」

第9段落

デカルトの心身分離論に異議を唱える思想家も何人かはいたが、その考え方は時代とともに進化したとはいえ 20 世紀まで有力なモデルであった。第二次世界大戦後、近代的なコンピュータが発達したあとには、脳はコンピュータで、心はその上で作動するソフトであるとする同じモデルの新バージョンが取り入れられた。

- ☐ challenge 「～に異議を唱える」
- ☐ mind-body separation 「心と身体の分離；心身分離論」

- ☐ dominant 「支配的な；有力な」
- ☐ run 「動作〔作動〕する」

第10段落

しかしながら、1980 年代になるとある学者グループがこのようなアプローチに異議を唱え始めた。一つには人工知能研究に対する大きな失望に勢いづけられる形で、人間は実際には、コンピュータが行うようなやり方で、型どおりの規則を使って抽象的な記号を操り情報を処理しているわけではない、と彼らは主張した。1995 年には、生物学上の重大発見がこの研究分野にさらに強い興味をもたらした。^{▶3} イタリアの科学者たちが、他の誰かがある行動をしているのを見る時、あるいは、ある行動が語られるのを聞くだけの時にも、まるで自分自身がその行動をしているかのように反応する「ミラーニューロン」なるものを発見したのだ。行動と思考の両方において同時に 1 つの役割を果たすことによって、とどのつまりこの 2 つはそう離れたものではないかもしれないことをミラーニューロンは示唆した。

▶ 3 (第4文) 知覚動詞のSVOC文型: <as if + 仮定法過去>

Scientists in Italy discovered "mirror neurons" [that respond / when we see someone
 else performing an action — or even when we hear an action described — / as if we
 ourselves were performing the action].

C (=現在分詞) S' V' O' C' (=過去分詞)

「反応する」 S V O

as if ... 「まるで…のように」は関係代名詞 that 節の動詞である respond を修飾する。

☐ **fuel** 「～をあおる；勢いづける」

☐ **in part** 「一部〔一つ〕（には）」

☐ **manipulate** 「～を操作する；操る」

☐ **abstract** 「抽象的な」（⇔ concrete 「具象的な」）

☐ **formal** 「型どおりの；組織立った」

☐ **biological** 「生物学的な；生物学上の」

☐ **enthusiasm** 「強い興味」

☐ **neuron** 「神経単位〔細胞〕」

● 導入

- ① (ℓ. 1) **The brain** is often envisioned as something like **a computer**, and **the body** as its all-purpose tool. ... **something more collaborative is going on** ...

▶ 脳はコンピュータのようなもので、身体はその道具だとよく思われるが、脳と身体はもっと協同的に働いていることを多くの研究が示している。

● 本論

- ② (ℓ. 10) The term most often used to describe **this new model** of mind is "**embodied cognition**," ...

▶ この新しい考え方は「身体化的認知」と呼ばれる。

- ③～④ (ℓ. 24) ... **it's not enough just to look inside the brain.**

▶ 認知の説明では、ただ脳の内部に目を向けるだけでは不十分である。

- ⑤ (ℓ. 30) The emerging field builds on decades of research into **human movement and gesture**.

▶ この新進分野は人間の動作と身振りの研究を基にしている。

- ⑥ (ℓ. 35) A few argue that **human characteristics like empathy**, or ... **can ultimately be traced to the idiosyncrasies of the human body**.

▶ 共感のような人間の特性やその他のさまざまな概念は人間の身体の特異性に遡ることができると主張する人もいる。

- ⑦ (ℓ. 44) "but if you're interested in **understanding real intelligence**, you have to **deal with the body**."

▶ 人工知能研究所所長の見解。「本当の知性を理解するには身体を取り上げなくてはならない。」

- ⑧ (ℓ. 50) ... but **the mind**, Descartes argued, **was something else entirely, an incorporeal entity** ...

▶ デカルトは精神は脳とはまったくの別物であると主張した。

- ⑨ (ℓ. 53) ... it remained the dominant model up through the 20th century, ...

▶ デカルトの心身分離論は20世紀まで有力なモデルであり続けた。

- ⑩ (ℓ. 65) By **simultaneously playing a role in both acting and thinking**, mirror neurons suggested that **the two might not be so separate after all**.

▶ 近年の「ミラーニューロン」の発見により、行動と思考が密接な関係にある可能性が示唆された。

要約 「身体化的認知」と呼ばれる新しい思考モデルが、長く続いたデカルトの心身分離論を覆し、思考が脳と身体のコラボレーションであることを示唆している。近年発見された「ミラーニューロン」も行動と思考の密接な関係を示すものだ。(103字)

8 原爆投下直後のある医師の抵抗

問題編 p.27

原爆投下直後 56 日間の記録である蜂谷道彦医師の『ヒロシマ日記』から私たちが学べることは何だろうか。本文はその 1 つの貴重な教訓を提示している。

● 解答 正しい
答え をチェック

- 1 筆者が知っている、(日本語から翻訳された,) 広島について書かれた個人による回想録の 1 つ。
- 2 ②
- 3 well does one recall little things that
- 4 その日記の記述全体からは、あぜんとして驚いている様子が感じられる。1 人の科学者が気づいたらわけもわからない出来事だらけの未知の世界にいる様である。
- 5 何か打つ手がある限り、何らかの方法で敵にはむかえる限り、完全な犠牲者というわけではない。
- 6 ①

● 解説 考え方 をチェック

1 内容の把握

図解

(Of the personal memoirs of Hiroshima (that I know ...)) all but one have
but 「～を除く」

this in common, that they are ...

this は後方の that 以下の内容を指す。「次のこと、すなわち、それらが…だという共通点がある」

下線部(1)の直前の but は「～を除く」の意の前置詞で、下線部を含む文は「私が知っている、広島についての個人による回想録のうち、1 つを除くすべてが～」という意味。したがって all は all the personal memoirs of Hiroshima, one は one of them のことだが、解答は that I know も含めて「筆者が知っている、広島について書かれた個人による回想録の 1 つ」のようにまとめるほうが具体的でよいだろう。また、ダッシュ内の「日本語から翻訳された」を含めてもよい。

2 内容の把握

- ① 「物語には時間的な順序と連続性があるのに、それが見つからなかった。」
- ② 「物語の連続性から暗にわかる時間的な順序などあるはずもなかった。」
- ③ 「時間的な順序は話の連続性から暗にわかるものだが、話などでできなかった。」
- ④ 「時間的な順序は話をわかりやすくするが、話の連続性は途切れていた。」

はたらきをしている。e.g. of great importance = very important

- a man of science 「科学者 (= a scientist)」 これも **〈of + 抽象名詞〉** の形の形容詞句を用いた表現。e.g. a man of ability 「有能な人 (= an able man)」
- find oneself ~ 「自分自身が~の状態にあることに気づく」
- events without causes 「わけのわからない出来事」

答案作成上のポイント

主語の The note を「ノート、記録、メモ」などと訳すと S = C の意味関係が不自然になる。その点をふまえ、蜂谷医師の記述内容を考えて「特徴；様子；調子」などととらえると修飾語句の through the entry ともうまくつながる。「その日記の記述全体からは…が感じられる」などと訳すとよい。セミコロンのあとの補足文はそのまま 1 文として訳してもよいし、主文の主語の The note に合わせて「…している状態〔様〕である」としてもよい。

5 文構造の把握

So long as you can do something, you are not entirely a victim.

語句 ・ so long as ... 「…である限り」 ・ oppose one's enemy 「敵にはむかう；立ち向かう」
・ somehow 「どうにかして；何らかの方法で」 ・ entirely 「完全に」

- so long as の節は you can *do* something と (you can) oppose your enemy somehow の 2 つの SV から構成される。do がイタリックになっているのは強調のためである。
- 主節の not entirely ～ は部分否定で「完全に～というわけではない」。

6 文脈の把握

圖解

(P) history and clinical findings (we could record) might (one day) be important.

S ▲ V C

but 以下は空所がなくても文法的に成立するし文脈上もおかしくないが、さらに意味を付加する場合も、文構造上 record までは節の主語でなければならない。この点から② while と先行詞のない④ whose は不適。③ no は「私たちには顕微鏡も実験用試薬も実験室もなかったが、…」に続く流れとしては不適。① what が関係形容詞「(…する) どんな～も；～は何でも (= whatever)」として history and clinical findings にかかり、「我々が記録できる病歴や臨床所見は何でも」という意味の主語になる。したがって①が正解。

第1段落

私が知っている、広島についての個人による回想録——それらは日本語からの翻訳だ——の中で、1つを除き他のすべてに共通点がある。それはそれらが連続した物語ではなくいろいろなイメージの集合になっていることだ。そして、人はなぜそれらの回想がそのような形をとるのか理解できる。これらの本はそこ、さながら終末のような光と熱の炸裂の下にいて、その出来事およびその余波のまったくの異様さを目撃した男女によって書かれたものだからだ。彼らはいかなる戦場と比べてもまるで見たことのない、この上なく荒涼とした光景、もっとおぞましい死者、もっと徹底的に破壊された地表を目にした。人も場所も、それとわかるものなど何もなかった。子供たちは親が見分けられず、自宅近くまで戻ってきた人たちは自分の家があった場所やその街路さえわからなかった。物語の連続性から暗にわかる時間的な順序など、どこにあったというのか。この壊滅させられた地で何を期待し何を予測できたろうか。いったいどうすれば明日などあり得ただろうか。

- ☐ memoir「回想録」
- ☐ gathering「集まり；集合」
- ☐ continuous「連続した」
- ☐ narrative「(事実・経験に基づく) 物語」
- ☐ burst「炸裂」
- ☐ apocalyptic「破滅的な；終末論的な」
- ☐ witness「～を目撃する」
- ☐ utter「まったくの」(副 utterly「完全に；徹底的に」)
- ☐ strangeness「異様さ」

- ☐ aftermath「(災害などの) 余波」
- ☐ look on～「～を見る」
- ☐ radically「徹底的に」
- ☐ desolate「荒涼とした」
- ☐ hideous「おぞましい」
- ☐ devastate「～に破滅的な打撃を与える」
- ☐ recognizable「見分けがつく」
- ☐ continuity「連続(性)」
- ☐ imply「～を暗示する[それとなく示す]」
- ☐ annihilate「～を壊滅させる」

第2段落

1 個の連続した話となっている蜂谷道彦医師の『ヒロシマ日記』にさえ、この極度の異様さという特質が出ている。それは日記であり、日々の生活の報告であるが、にもかかわらずそれには日常感覚がまったくなく、普通の生活が続けられる慣れ親しんだ出来事や繰り返しはどこにも見られない。蜂谷医師の日々は、もはや存在しない町で、失われた時間の中で、一貫性を持たずに過ぎていく。その異様な感じは、1945年8月6日付けの最初のページに書かれている——原爆投下の日だ。朝、蜂谷医師は空襲警備員の夜勤で疲労困憊し、下着を身につけただけで居間の床の上に寝そべっている。

- ☐ radical「極端な」
- ☐ dullness「日常性」
- ☐ familiarity「慣れ親しみ」
- ☐ repetition「繰り返し」
- ☐ coherence「一貫性」

- ☐ out of time「時間がなくなって」a time that is out of time「時をなくした時間→失われた時間」
- ☐ entry「記載；記述」
- ☐ sprawl「寝そべる」
- ☐ exhaust「～を疲労困憊させる」
- ☐ air-raid-warden「空襲警備員」

第3段落

突然、強烈な閃光が私を驚かせた——そして次にまたもう1つの閃光。人はささいなことをよく思い出すもので、庭の石灯籠があかあかと照らされる様をはっきりと覚えている。庭の影が消えた。一瞬

前まではすべてがあんなに明るく日差しに照らされていた光景が今や暗くかすんでいた。巻き起こるほこりを通して私は家の一角を支えていた木柱をかりうじて識別できた。それはおかしい具合に傾き、屋根は危険なまでにたわんでいた。

- ☐ startle 「～（人）を驚かせる」
- ☐ stone lantern 「石灯籠」
- ☐ brilliantly 「あかあかと；鮮やかに」
- ☐ hazy 「かすんだ」
- ☐ swirling 「巻き起こる；渦巻く」

- ☐ barely 「かりうじて（…する）」
- ☐ discern 「～を識別する」
- ☐ column 「柱；円柱」
- ☐ lean 「傾く」
- ☐ sag 「たわむ」

第 4.5 段落

本能的に動いて私は逃げようとしたが、瓦礫や倒れた木材が道をふさいだ。気をつけながらゆっくり進んでやっと「廊下」（家の周りにある一種の通路）に着き、庭へ下りた。大きな疲労感に襲われ、そこで私は元気を取り戻すために立ち止まった。驚いたことに、私は自分が丸裸であることに気づいた。なんて奇妙な！ 私の肌着やパンツはどこにいったのか。

何が起きたのか。

- ☐ rubble 「瓦礫」
- ☐ timber 「木材」
- ☐ bar 「～（道）をふさぐ」
- ☐ pick one's way 「ゆっくり進む」

- ☐ gallery 「通路」
- ☐ weakness 「衰弱」
- ☐ overcome 「～（人）を圧倒する」
- ☐ vest 「肌着」

第 6 段落

私は体の右側全体にけがをして血を流していた。ずたずたに傷ついた太ももの傷口から大きな破片が突き出ていて、何か生温かいものが口の中にしたたり落ちた。私の頬は裂けていたが、恐る恐る触ってみてそれがわかり、下唇は大きく切れて開いていた。▶1 かなり大きなガラスの破片が首に突き刺さっていて、私は事もなげにそれを抜き取り、あまりの衝撃にあぜんとなった人が見せるあの無関心さで、その破片と血まみれの自分の手をじっと見つめた。

▶1（第4文）補語が文頭に置かれた倒置〈C + V + S〉；複雑な修飾語句

Embedded (in my neck) was a sizeable fragment of glass [which I ...]

→① C V S

and (with the detachment of one stunned and shocked) I studied it and my ...

→② 「無関心さで」 「あぜんとしショックを受けた人」 S V O

①主語に形容詞節がつくなどして主部が長くなる場合、文語では文体やリズムを整えるためにしばしばこのタイプの倒置が使われる。

② with ～ の句は全体としては I studied ... を修飾する副詞句。of 以下は detachment にかかる形容詞句で one (who is) stunned and shocked と補うとわかりやすい。蜂谷医師は「私はこのような状態にある人間が陥る（あの）無関心さで…した」と述べているのである。

- ☐ splinter 「破片」
- ☐ protrude 「突き出る」
- ☐ mangle 「～をずたずたにする」
- ☐ thigh 「太もも」
- ☐ trickle 「したたり落ちる」
- ☐ gingerly 「恐る恐る」
- ☐ embed 「～を埋め込む」

- ☐ sizeable 「かなり大きな」
- ☐ fragment 「破片」
- ☐ matter-of-factly 「事もなげに；冷静に」
- ☐ dislodge 「～を取り除く」
- ☐ detachment 「無関心」
- ☐ blood-stained 「血まみれの」

第 7, 8 段落

その日記の記述全体からは、あぜんとして驚いている様子が感じられる。1 人の科学者が気づいたらわけもわからない出来事だらけの未知の世界にいる様である。

彼の周囲に見える死者や瀕死の人々もその恐ろしい異様さの一部だ。これらの負傷者を目前にして、医師は彼らの損傷の原因がわからない。あとになって、放射線障害の症状が出始めても、彼には被害者たちの病気を診断することも治療することもできない。「我々の知っているものの特徴を示す症状を持つ患者は 1 人もいなかった。」彼は自分が目にしたものを表す医学用語すら持っていない。彼の話し方は医師というより、ノアの洪水のあとのような、何か原始の大惨事の生存者のような語り口に近い。

- ☐ the dead and dying 「死者と瀕死の人々」(the + 形容詞・分詞)で「…な人々」を表す表現。
- ☐ confronted by 「～に直面して；～を突きつけられて」
- ☐ comprehend 「～を理解する」
- ☐ radiation-sickness 「放射線障害の」
- ☐ case 「症状；症例」

- ☐ diagnose 「～(病気)を診断する」
- ☐ symptom 「症状；症候」
- ☐ typical of 「～の特徴を示している」
- ☐ more like ~ than ... 「…というよりも～のように」
- ☐ primal 「原始の」
- ☐ catastrophe 「大惨事」

第 9 段落

無力感は犠牲者による文学の条件であり、おそらくは決定的な条件である。何か打つ手がある限り、何らかの方法で敵にはむかえる限り、完全な犠牲者というわけではない。しかし、この状況下では何もできることがなく、医師たちは誰とも同じくらい強くそれを感じていた。「私にできることは何もない。」と仲間の医師が蜂谷医師に言う。「誰も何もできない。」しかし、彼らにできることがある。彼らは起こったことを科学者として証言することができるのだ。「私たちには顕微鏡も実験用試薬も実験室もなかったが、我々が記録できる病歴や臨床所見は何であれいつか重要になるかもしれない。原子爆弾の壊滅的な影響▶2を受けた国民は世界の歴史上これまでどこにもなかったからだ。」かくしてこの無力な男は抵抗する。証言するという手段によって。

▶2 (第 7 文) 否定語が文頭に置かれた倒置〈否定語+助動詞+S+V〉

Nowhere before in the history of the world had a people been subjected to ...

副詞句

助

S

V

(過去分詞)

「世界の歴史上これまでどこにもなく」という副詞句が強調のために文頭に置かれ、倒置が起こっている。never などの否定語(句)を文頭に置くこのタイプの倒置は文語的表現として慣用化しているものも少なくない。上の文を普通の語順で表すと、A people had been subjected to ... nowhere before in the history of the world. となる。

- ☐ helplessness 「無力感」
- ☐ definitive 「決定的な」
- ☐ fellow 「仲間(の)」
- ☐ testify to ～ 「～を証言する」
- ☐ microscope 「顕微鏡」
- ☐ laboratory reagent 「実験用試薬」

- ☐ history 「病歴」
- ☐ clinical finding 「臨床所見」
- ☐ people 「国民」
- ☐ devastating effect 「壊滅的な影響」
- ☐ bear witness 「証言する」

● 導入

- ① (ℓ. 1) Of the personal memoirs of Hiroshima that I know ... they are gatherings of images rather than continuous narratives. / (ℓ. 4) These books are by men and women ... who witnessed the utter strangeness of the event and its aftermath.

▶広島についての個人による回想録のほとんどは連続した物語ではなく、いろいろなイメージの集合となっている。原爆投下とその余波のまったくの異様さを目撃した男女によって書かれたものだからだ。

● 本論

- ② (ℓ. 15) Even the one continuous narrative, Dr. Michihiko Hachiya's *Hiroshima Diary*, has this quality of radical strangeness ...

▶この極度の異様さは物語性を持つ蜂谷道彦医師の『ヒロシマ日記』にも見て取れる。

- ③～⑥ (ℓ. 23) Suddenly, a strong flash of light startled me — and then another.

▶『ヒロシマ日記』の原爆投下の日の記述。

- ⑦ (ℓ. 44) The note through the entry is of stunned astonishment ...

▶この記述全体から感じられる特徴はあぜんとした驚きである。

- ⑧ (ℓ. 46) The dead and dying that he sees around him are part of that terrible strangeness.

▶彼の周囲の死者や瀕死者もその恐ろしい異様さの一部だ。

- ⑨ (ℓ. 57) ... 'nothing anybody can do.' But there is something they can do; they can testify ... / (ℓ. 62) And so the helpless man opposes, by bearing witness.

▶「誰も何もできない。」しかし、できる何かがある。医師たちは証言することができる。かくしてこの無力な男は証言するという手段で敵に立ち向かう。

要約 蜂谷医師の『ヒロシマ日記』では原爆投下後の異様さが描かれ、「あぜんとした驚き」が見て取れる。医師としての仕事は何もできない無力感に打ちのめされながらも、彼は証言することの重要性に気づき、記録を始める。(100字)

9 「友情」のあいまいさ

問題編 p.30

友情がすばらしいものであることは否定できないが、いろいろな角度から考察すると問題点も多い。アリストテレスの友情論を軸にその両面を考えてみよう。

● 解答 < 正しい答え をチェック

- 1 第1, 2グループと同じように、第3グループの友情でも友人から与えられるものも友人に与えるものも多いということ。
- 2 ほとんどの場合、友情は家族とのつながりよりはずっと弱い絆ではあるが、友情という観点から見ると、家族のメンバーに対しては生物学的、法的な絆が何もない他人に対するほどは親しみが感じられないかもしれない
- 3 ハ
- 4 社会規範や契約に基づく結婚や仕事と違い、既存の制度や普遍的枠組みなどなく自分の人柄、関心、必要性から創り出される友情には自由があり、多様な友人関係が形成できる。(80字)
- 5 イ
- 6 (B) ニ (C) ハ (D) ロ

● 解説 < 考え方をチェック

1 内容の把握

第④段落では、第③段落から続く3つの友情関係の説明のうち、第3グループについて述べられている。下線部(1)に続く but 以下では「友情それ自体は外的な要因から独立しており、最初の2グループに分類される友情よりはるかに貴重なものである」というように、第1, 2グループとの違いが述べられている。したがって、but の前では第1, 2グループとの共通点が挙げられていると推測できる。下線部の much will be given and much (will be) taken too は「(友人関係において) 多くのものが与えられ、また奪われもする」という意味だが、ここで be taken 「奪われる；取られる」とは、自分から見ると「相手に与える」ことであることを押さえる。つまり、「友人から与えられるものも友人に与えるものも多い」ということだが、Undoubtedly ～, but ... の流れに注目すると、解答としては「これは第3グループの友情でも、第1, 2グループの友情と同じように」を含めるのが望ましい。

2 文構造の把握

図解

although friendship is (for the most part) a far less strong tie than the connection to
「譲歩」を表す副詞節 for the most part 「ほとんどの場合：大部分（は）」

family,) you may feel less close to members of your family (in terms of friendship) than
S V C in terms of ~ 「～の観点から」

others with whom you have no biological or legal bond

語句 ・ tie「絆；つながり」(= connection ; bond) ・ biological「生物学的な」 ・ legal「法的な」

- a far less strong tie than the connection to family 「家族とのつながりよりはずっと弱い絆」
劣等比較級 less strong に強調の far がついて「ずっと弱い～」となる。
- you may feel less close to members of your family ... than ~ 「家族のメンバーに対して～ほどは親しみを感じないかもしれない」
- others with whom you have no biological or legal bond 「生物学的、法的な絆が何もない他人」
〈前置詞＋関係代名詞 whom〉が導く節が others を修飾する。

答案作成上のポイント

less を用いた比較ではあとにくる形容詞・副詞が反対の意味になるので、訳文にはいろいろ工夫の余地がある。例えば、you may 以下は「友情という点では、生物学的、法的な絆が何もない他人の方が、家族のメンバーに対してよりも親しみが感じられるかもしれない」と訳すことも可能である。

3 内容の把握

下線部(3)は「ああ、私の友人たちよ。(私には) 1人の友だちもいない。」という意味。まず、前文 He actually ... a fear of having too many friends. でアリストテレスが「友人を持ちすぎることへの恐れ」を表明していることを押さえ、下線部の言葉が「あまりに多くの友人を持つとどうなるか」を一種の隠喩として述べたものであることを理解する。「私の友人たちよ」と複数形で呼びかけているのは「あまりに多くの友人」に対してであり、「1人の友だちもいない」は「(それなのに) 真の友人は1人もいない」という意味で、ハの意味が一致する。イ、ニはこの文脈に合わない。また there is no friend から口「誰がほんとうの友人なのかよくわからない」という意味は生じない。

4 内容の把握

下線部(4)の意味は「その(=友情の)制約のなさ〔自由さ〕」で、第2文以降でその具体的な内容が対比的に説明されている。

図解

第2文… 結婚：社会規範によって支えられ形成される。

仕事：個人が契約によって規定される役割を持つ。



第2, 3文…友情：既存の制度や普遍的枠組みなどない。

自分の人柄、関心や必要性から友情を創り出さねばならない。

第4, 5文…これは友情の持つ弱みとも言えるが、その反面、ここにある自由が多様な友人関係形成上の強みとなる。

解答は第2文で述べられている所属制度（制約）を持つ事例を「社会規範や契約に基づく結婚や仕事と違い」として手短にまとめ、第2, 3文で述べられている友情の制約のなさを「既存の制度や普遍的枠組みがない」「友情は自分の人柄、関心、必要性から創り出される」のようによままとめて説明の中心に据える。さらに、第5文の内容も open-endedness に絡むので「自由一多様な友人関係の形成〔成立〕」という内容も含めたものにしたい。

5 文脈の把握

イ「問題のある」 ロ「機能している」 ハ「成功した」 ニ「疑わしい」

第①段落第3文では「友情に含まれる親愛の情やかかわり合いのあいまいさを裏づける証拠」が具体的に書かれており、友情はすばらしいものである一方で、問題も多いことが読み取れる。したがって、イが正解になる。なお、イ Questionable, ニ Suspected とともに「疑わしい」と訳されることはあるが、前者は「(いろいろ議論の余地があって) 疑わしい (= debatable)」、後者は a suspected person 「容疑者」からもわかるように「(…ではないかと思われ) 疑わしい」の意味で、この文脈には合わない。

6 文脈の把握

イ「彼らの富と社会的地位の高さのために」

ロ「彼ら自身の人柄のために」

ハ「一緒にいることで何らかの喜びが享受されるから」

ニ「彼らはお互い有益だから」

アリストテレスによる友情（友人関係）の3つのタイプに関し、その結びつきの動機・要因を問う問題。

(B) 1番目のグループは空所(B)に続くダッシュ以下に述べられているように「例えば、従業員と社長、医者と患者、政治家と支持者の間にある友情」である。この関係はセミコロン以下に they get something out of the relationship とあるように、「友情から何か得るものがあるから」成立する。つまりニ「彼らはお互い有益だから」である。

(C) 2番目のグループは「サッカー、買い物、ゴシップや性的な親密さなど」について関連があるとされ、これには「この友情がうまくいくのは喜びを与えるものがお互いの間に存在し

続ける限りにおいてだ」という補足がある。ここからハ「一緒にいることで何らかの喜びが享受されるから」が正解。

- (D) 3番目のグループは上記2グループと本質的に異なり、「(この関係を成立させている要素は) 互いの奥深い人格かもしれないし、生まれながらの善良さかもしれないし、強い情熱かもしれない」が、「(いったんこうした基盤に築かれると、) これらは長続きする傾向の友情となる」と説明されている。ここから、ありのまま個々人、個性が媒介となる関係であることがわかり、ロ「彼ら自身の人柄のために」が正解。in oneselfは「それ自体で」という意味で、who they are in themselves「彼ら自身で誰であるか→ありのままの彼ら(=彼ら自身の人柄)」ということ。

● 全訳 英文内容をチェック

第1段落

私の経験からいうと友情はすばらしいものであり得るのだが、その親愛の情やかかわり合いはあいまいな場合が多い。この懸念を裏づける統計的な証拠がある。ある社会学者が約1,000人の人々に話を聞いたところ、ほぼ3分の2が友だちは生活上のストレスの最大の原因の1つだと言い、4分の1以上が友だちは配偶者や家族との言い争いの主な原因だと言い、およそ11パーセントが友情関係のトラブルが原因で前年に病欠したことを認めている。

- | | |
|---|--|
| ☐ affection 「親愛の情」 | ☐ sociologist 「社会学者」 |
| ☐ commitment 「かかわり合い；関与」 | ☐ over a quarter (say) that friends are ... : 共通の動詞である say が略されている。 |
| ☐ ambiguous 「あいまいな」 | ☐ take a sick day 「病欠を取る」 |
| ☐ statistical 「統計的な」 (図 statistics 「統計」) | |
| ☐ concern 「懸念、心配」 | |

第2段落

問題のある友情についてはテレビ番組や新聞記事や雑誌でいつも議論がなされている。しかしながら、もっと根本的な別の問題はめったに扱われていないように私には思われる。友情とは正確には何なのか。その本質は、規定は、保証は何なのか。友情のさまざまな形を人はどうやって区別できるのか。▶1 それは恋人同士の間や家族内部で共有される関係とどう肩を並べるのか、またどのように融合するのか。友情というものは極めて多様であるので、これらの問題は最初そう思えるより答えるのが難しい。

▶1 (第6文) 共通構文 (共通語句が後ろに置かれた形)

How does it compare to, and mix with, the connections (shared between lovers and S (it=friendship) V₁ V₂ 前置詞 to, with の共通の目的語 within families)?

- | | |
|---|--|
| ☐ fundamental 「根本的な」 | ☐ compare to ~ 「～に比肩する」 |
| ☐ nature 「本質；性質」 | ☐ mix with ~ 「～と融合する」 |
| ☐ promise 「保証；裏づけ」 | ☐ diverse 「多様な」 |

第3段落

アリストテレスの友情論は今日まで依然として哲学的課題を持ち続けているが、彼は友情とは少なくとも互いの好意に応え合う個人間の好意の関係であると提唱した。彼は人が友情と呼ぶ関係は大きく3つのグループに分けられると考えた。1番目は主としてお互い有益だからなれる友人——例えば、従業員と社長、医者と患者、政治家と支持者などで、彼らは友情から何か得るものがあるから好意を分かち合っているのである。2番目は主として一緒にいることで何らかの喜びが享受できるからなれる友人——それはサッカーだったり、買い物だったり、ゴシップや性的な親密さだったりするが、この友情がうまくいくのは喜びを与えるものがお互いの間に存在し続ける限りにおいてなのである。アリストテレスはこれら2つのグループは結果としてお互いに似ていることに注目した。なぜなら、互いの有益さや喜びを取り去ると、その友情は終わりにになってしまうからだ。

☐ philosophical agenda 「哲学的課題」

☐ at the very least 「少なくとも；最低でも」

☐ goodwill 「好意」

☐ ally 「支持者；味方」

☐ intimacy 「親密さ」

☐ note that ... 「…ということに留意〔注目〕する」

☐ utility 「有用〔有益〕さ」

第4段落

しかしながら、このことは第3のグループには当てはまらない。この人々は彼ら自身の本来の人格ゆえに互いに愛し合うのである。それは互いの奥深い人格かもしれないし、生まれながらの善良さかもしれないし、強い情熱かもしれないが、いったんこうした基盤に友情が築かれると、長続きする傾向がある。疑いなく、多くのものが与えられ、また奪われもするだろうが、友情それ自体は外的な要因から独立しており、最初の2グループに分類される友情よりはるかに貴重なものである。

☐ be true of ~ 「～に当てはまる」

☐ natural 「生まれながらの」

☐ intensity 「強さ；激しさ」

☐ once established = once (they [these friendships] are) established

☐ undoubtedly 「疑いなく」

☐ be independent of ~ 「～から独立している」

☐ external factor 「外的要因」

☐ immensely 「はるかに」

☐ fall into ~ 「～に分類される」

第5段落

アリストテレスの友情論は多くの重要で得るところの多い洞察を含んでいるが、友情を定義しようという試みは最終的には限界に突き当たることを彼は知っていたのだと私は思う。試しにあなたの友人の何人かをリストアップしてみなさい——配偶者、最も付き合いの長い友人、職場の同僚、隣人、ネット上のチャットルームの友人——ある時期友人だとあなたが考えたかもしれない人なら誰でもいい。

▶2 こうしたリストを見ると大きな違いが浮き彫りになる。例えば、同じく親密だとしても、あなたの配偶者との友情は、いくつかの重要な点で最も付き合いの長い友人との友情とは違っているだろう。反対に、ほとんどの場合、友情は家族とのつながりよりはずっと弱い絆ではあるが、友情という観点から見ると、家族のメンバーに対しては生物学的、法的な絆が何もない他人に対するほどは親しみが感じられないかもしれない。

▶2 (第3文) 無生物主語構文

A look at such a list highlights the vast differences.

S V O

「～を見ることが…を浮き彫りにする→～を見ると…が浮き彫りになる」

- ☐ insight 「洞察」
- ☐ colleague 「(職場の) 同僚」
- ☐ highlight 「～を浮き彫りにする」

- ☐ key 図「重要な」
- ☐ respect 「点；事項」
- ☐ conversely 「反対に」

第6段落

個人的には、最も親密な種類の友情は、それが必要とする時間と自分自身の投資のために一握りの個人に対してしか持てない、というアリストテレスの考えには意義深いものがあると私は思う。実際、彼はあまりに多くの友人を持ちすぎることに恐れを表明しさえしている。そしてその懸念をうまくとらえたアリストテレスのものとされる表現がある。「ああ、我が友たちよ、1人の友もないではないか。」友情についての哲学が私たちに告げることの1つは、人生はさまざまなタイプの個人的な関係を生み出すが、仕事や結婚によるこうした関係からよき友情が育まれる場合もあるし、そうでないこともあるということだ。それらと同じ結びつきは必ずしも深い友情そのものによって特徴づけられる必要はない。友情は、いわば、下から上へと浮上してくるもので、それは流動的な概念なのである。

- ☐ there is much in ~ 「～には大したもの〔意義深いもの〕がある」
- ☐ investment 「投資」
- ☐ self 「(自分) 自身；自我」
- ☐ go so far as to do 「…しさえする」
- ☐ attributed to ~ 「～に帰する；～が言ったとする」

- ☐ capture 「～をうまくとらえる」
- ☐ association 「結びつき；つながり」
- ☐ not necessarily ... 「必ずしも…ない」(部分否定)
- ☐ characterize 「～を特徴づける」
- ☐ emerge 「出現する；浮上する」
- ☐ fluid 「流動的な」

第7段落

友情のあいまいさのもう1つの側面はその制約のなさである。社会規範によって支えられ形成される結婚だとか、個人が契約によって規定される役割を持つ仕事だとかいった所属制度とは違って、友情には既存の組立説明書や成長計画などまったくない。人々は主に自分の人柄、自分の関心や必要性から、なんら普遍的に適應できる枠組みもなしに友情を創り出さねばならないのだ。一方で、これは潜在的な弱みとなる。友情が「行き詰まってしまふ」かもしれないからだ。他方では、それは潜在的な強みともなる。なぜなら、この中には友情の魅力には不可欠な自由もあるからで、それが友情と呼ばれる人間関係群内部の多様性の一因なのである。

- ☐ dimension 「側面」
- ☐ ambiguity 「あいまいさ」
- ☐ institution of belonging 「所属制度」
- ☐ norm 「規範、基準」
- ☐ contract 「契約」
- ☐ ready-made 「既存の」
- ☐ instructions for assembly 「組立説明書」

- ☐ universally applicable framework 「普遍的〔一般的〕に適應できる枠組み」
- ☐ potential 「潜在的な」
- ☐ go nowhere 「行き詰まる」
- ☐ diversity 「多様性」
- ☐ family of relationships 「人間関係群」

読解 PLUS+ ONE パラグラフ展開を確認しよう

● 序論

① (ℓ. 1) ... while friendship can be great, **its affections and commitments are often ambiguous.**

▶ 友情に含まれる愛情やかかわり方にはあいまいさがつきまとう。

② (ℓ. 8) Questionable friendships are regularly debated in ... However, ..., **more fundamental, question is rarely asked.**

▶ 問題の多い友情論はマスコミでよく取り上げられるが、根本的な問題が論じられることはほとんどない。

● 本論

③ (ℓ. 17) He (= Aristotle) saw **three broad groupings of relationships** people called friendship.

▶ アリストテレスは、友情は大きく3つのグループに分けられると考えた。

④ (ℓ. 27) These (= the people of **the third group**) are people who love each other **because of who they are in themselves.** / (ℓ. 32) ... and **immensely more valuable** than ...

▶ 第3のグループの人々はその人柄で結びつくゆえに、その友情は長続きし、非常に貴重である。

⑤ (ℓ. 35) Aristotle knew, ..., that attempting **to define friendship ultimately has its limits.**

▶ アリストテレスは、友情を定義するのは困難だとわかっていた。

⑥ (ℓ. 54) It (= friendship) is a **fluid concept.**

▶ 友情とは流動的な概念だからだ。

⑦ (ℓ. 55) **Another dimension to the ambiguity of friendship is its open-endedness.** / (ℓ. 63) ... it is part of **the reason for the diversity within the family of relationships called friendship.**

▶ 友情のあいまいさのもう一面はその制約のなさだが、そこに多様な友情が成立する。

要約 友情は素晴らしいものであり得るが、そこに含まれる愛情、かかわり方という面ではあいまいであり問題も多い。また、同じ友情でも何らかの利益が介在するものより、互いの人柄によって成り立つ自由な友情の方が貴重で永続する。(105字)

10 死の喪失感を克服する過程

問題編 p.34

親兄弟、配偶者、恋人、親友など、愛する人を不幸にして失った場合、私たちはその悲しみからどのように立ち直っていくことができるのだろうか。その過程、必要とする時間にはどのような共通性と個人による違いが考えられるのだろうか。

● 解答 <正しい答え> をチェック

① recover

② ③

③ 母が自分自身の悲しみでひどく憔悴していて私たちの悲しみなどまるで考えられなかったので、私はやむなく大人の役割を果たすことになってしまった。

④ 父の死の数カ月後、すれ違った見知らぬ人が父を思い出させ、その時初めて悲しみにむせび泣いたこと。(47字)

⑤ (ア) ③ (イ) ① (ウ) ②

⑥ The secret is / The only thing

● 解説 <考え方> をチェック

1 語句の意味の把握

下線部(1)の spring は動詞として用いられ、spring back で「跳ね返る」という意味を表す。「輪ゴムみたいに跳ね返る」とは、伸ばした輪ゴムを放すと「ぱっと元に戻る」その様を表している。これは「最愛の人が亡くなったあと、ぱっと元に戻り、そして何事もなかったかのように…」という文脈では「死の悲しみから立ち直る」の意であり、次の文の最後で不定詞として使われている recover がこの意味を表す。

2 語句の意味の把握

①「海外へ行くこと」

②「外国での行動」

③「何かなじみのないこと」

④「長旅をすること」

下線部(2)を含む文は「愛する人を失った直後の精神の混乱状態」を述べており、その状態では「(普通は無意識にわかる自分の家の)手洗いへ行く道(方向)を見つけることが～な経験であるかのように思える」という文脈。foreign はよく「外国の」の意味で使われるが、「異質の；なじみのない」の意味もあり、この文脈ではそれにあたる。したがって③が正解。④のような意味は文脈にかかわらず foreign experience からは生じない。

3 文構造の把握

語句・consume「～を消耗させる」・grief「悲しみ；悲嘆」・be forced to do「…することと強えられる〔余儀なくされる〕」・role「役割〔役目〕」

● Because ... の節は so ～ that ... の「程度・結果」を表す構文。「母が…なほど～だったので」

(程度)、「母がとても～だったので…」(結果)のいずれにも訳せる。

- be consumed by ~ : consume の原義は「～を消費する」だが、この文脈では absorb all of the attention and energy of ~ 「～の注意力・エネルギー〔気力〕などを使い果たす」といった意味になり、それが受動態で用いられて「～で憔悴〔消耗〕する」となる。訳例は下の

採点のポイント 参照。

- she never considered ours : この ours は前の her own grief 「彼女(母)自身の悲しみ」をふまえたもので、our grief 「私たちの悲しみ」の意味を含むことに注意。
- slip into the role of ~ : slip into ~ は slip 「すべる」、into 「～の方へ」から、ここでは「(いつしか; 次第に) ~の状態になる」の意で、あとの the role of ~ を含めると「～の役割を果たすことになる」といった訳になる。play the role of ~ と書いても事実上の意味は変わらないが、「(母が何もできない状態なので仕方なく) そうすることになってしまった」という意味合いを出した表現。後続文中の ... and resented my mother's weakness 「母の弱さに腹を立てていた」も参考になる。

採点のポイント

記点 15 点

- ① Because my mother was so consumed by her own grief that she never considered
ours, ② I was forced to slip into the role of the adult.
(10 点)
(5 点)

- ① Because my mother was so consumed by her own grief that she never considered ours 「母が自分自身の悲しみでひどく憔悴していて私たちの悲しみなどまるで考えられなかったので」(10 点)

➡ Because 節(理由) (1 点)

➡ so ~ that ... の構文理解 (4 点)

- (○) 「母は私たちの悲しみなどまるで考えられないほど自分自身の悲しみでひどく憔悴していたので」

- (×) so ~ that ... の構文であることがとらえられていないもの

➡ my mother was (so) consumed by (2 点)

- (○) 「疲労困憊して」「弱りきって」「何もできない状態で」「憔悴〔消耗〕して」のほか、上の解説で示したような意味になる訳ならよい。

➡ her own grief (1 点)

- (×) 「彼女への悲しみ」あとの ours との関連で「自分(彼女) 自身の」が訳出されていない場合は加点なし。

➡ she never considered (1 点)

➡ ours (1 点)

- (×) 「私たちの入ことなど」ours = our grief であることがわかっていないもの。

- ② I was forced to slip into the role of the adult 「私はやむなく大人の役割を果たすことになってしまった」(5点)

→ I was forced to (2点)

- (○) 「…せざるを得ないはめになった〔陥った〕」「どうしても…せざるを得なかった；成り行きで…することを余儀なくされた」

「…になってしまった」のほか、先の解説で示したような意味合いが感じられる訳ならよい。

→ slip into the role (2点)

- (○) 「役割を担う」「役割〔仕事〕をする」
(×) 「役割に滑り込む」「役割にスリップする」

→ of the adult (1点)

4 内容の把握

「この感情の解放」とあり、this は下線部(4)の直前の1文の内容を受ける。「50字以内」に収まるよう、第⑩段落冒頭からの内容も含めてまとめること。()内は省略可。

- Months later: これは **after my father's death** 「父の死の数カ月後」などと補わないと文意がはっきりしない。
- I was walking down the street and **a stranger** inexplicably **reminded me of my father**.: 「(通りで) すれ違った見知らぬ人が(なぜか) 父を思い出させた」
- My head jerked back, trying to...: 具体的な行動描写なので、説明には不要。
- Suddenly, **for the first time**, I burst into tears, my body shaking from my sobs: ここで筆者が述べているのは、次段落冒頭の文の '**delayed reactions**' 「遅れて出てくる反応」の1例なので、for the first time は必須、Suddenly を含め「その時初めて」とすると短くまとまる。あとは下線部を「(わっと) 泣き出して体を震わせた」「体を震わせてむせび泣いた」などと、それまで抑圧されていた感情が一気に噴出した様を短くまとめる。字数が超過するような my body 以下を略し「その時初めてわっと泣き出したこと」としてもよいだろう。

5 文脈の把握

第⑬段落の空所を含む5項目は、本文全体でも述べられている「死の喪失感を克服する過程」に関する、あるセラピストの分類を引用したものである。[1]「衝撃」→[2]「混沌」→[3]「適応」→[4]「均衡」→[5]「外傷後の成長」という5段階の過程に関連する語句や表現を選択肢の説明文中から探し、その選択肢が段階的な流れとして適当かどうかを確認していくとよい。

- ① 「生活の安定性とバランスを獲得し、愛する人がいなくても自分の将来性について考えることができるようになる。」
- ② 「その人が、さらなる自己潜在能力、より大きな、精神性、利他主義、自己認識、そして人生についてのより深い認識を発達させながら、再形成されて愛する人の喪失から立ち直る際に結果として生じる変容。」

- ③「一方で悲しみの感情を表現するためのはけ口を必要としながら、**瓦礫から秩序を構築**していく。」

(ア) Chaos「カオス：混沌」は日本語化している語であるが、英語で言うなら **complete disorder and confusion**「完全な**無秩序**・混乱(状態)」のことで、この **disorder**「無秩序」がキーワードになる。選択肢③の文中にある **develop order from the debris** の「**瓦礫**」とは「無秩序状態」を比喩的に表し、「そこから秩序の構築を始める」のである。段階としての前後関係はどうかというと、「死という現実を処理していく第1段階」の次にきて、そのあとには「愛する人のいない生活に徐々に適応していく第3段階」がくるという流れは自然であり、したがって③が入る。

(イ) Equilibrium は難語であるが、「均衡」という意味では選択肢①の文中にある **stability, balance** は2語ともその同意語である。第3段階の「**適応過程**」の結果、「生活の安定性とバランスを取り戻す；1人でもやっていけそうな自信が湧いてくる」という流れも自然であり、①が入る。なお、**self-potential** は「自分の潜在能力」の意だが、ここでは「自分の将来性」と解すると全体の文意がわかりやすくなる。

(ウ) Posttraumatic growth「外傷後の成長」の **posttraumatic** は〈**post-**「後の」+ **trauma**「(心的)外傷」+ **-tic**(形容詞語尾)〉から成る複合語。選択肢の中で残る②の文中にこの過程に関連する部分を見ていくと、**developing more self-potential, greater ...** の分詞構文は「**成長**」を説明していると考えられる。そして **as** が導く節の **the person emerges reshaped from the loss** は **emerges (reshaped) from the loss** の構造で、〈**emerge from** ～「～から抜け出る」+ **reshaped**「再形成されて」〉の形であることに注意。これは愛する人の死による心の傷を完全に克服した人の「**立ち直り**」を表している。**A resulting metamorphosis as of the as** は「時」を表し、「…する際に結果として生じる変容」という意味である。したがって、最後の第5段階の説明は②で間違いない。

6 内容の把握

本文では、第⑥段落冒頭 **In the beginning, everyone feels awful.** から第⑧段落にかけて、初期段階からのよくある悲嘆過程が述べられ、続く第⑨、⑩段落では著者自身の体験を例示して「悲嘆反応が遅れて出てくるケース」が説明される。第⑪段落はこの研究をしているローゼンタール博士の言葉を引用する形になっているが、ここでは従来の仮説への疑問が持ち出され、どの段階からでも後戻りがあり得る旨が述べられる。この段落最後は **The secret is learning to go with the flow.**「流れに身を任せることを学ぶのが秘訣です。」という博士の言葉で終わっている。この「**秘訣**」とは「個々人がそれぞれ死の喪失感を克服する秘訣[かぎ]」ということで、この言葉から著者が一般的に言って重要なことの1つはこれだと思っていることがうかがえる。

続く第⑫段落以降では、そうはいっても、「悲しみの満ち干にはまったく予測可能性がないわけではない」というヨゼフスキー博士の見方と、それに基づいてあるセラピストが分類した

死の喪失感を克服する5段階が詳しく示される。著者はこの5段階を「予測できるものの道標となる」としてある程度は評価しているのだが、しかし、最後の第⑩段落で「みなこの最終段階へ到達しようと自分なりに努力しているのだが、うまくいく場合もいかない場合もある」と述べたあと、The only thing that **really matters** is that you are **moving**.「ただ1つ本当に**重要な**ことは、ともかくも進んでいるということだ。」と言っている。つまり、仮に後戻りしても、あきらめずにまた次の段階を目指して試行錯誤を続けることが重要だということになり、これが2つ目と言える。

● 全訳 英文内容をチェック

第①段落

イタリアのいくつかの小さな町では、女性は配偶者を失うと、出会う人がすぐに喪に服しているのだとわかるように丸1年黒い服を着る。アメリカ先住民のいくつかの部族でも、喪に服する人たちが1年間、腕に黒い腕章を巻く似たようなしきたりがある。これらの表示行為の意義は同じである。人の死去にショックを受けている人は不安定な状態にあり、特別な対応が必要なのだ。

- ☐ loved one 「最愛の人；配偶者」
- ☐ mourn 「喪に服する」(mourner 「喪に服する人」)
- ☐ tribe 「部族」
- ☐ gesture 「表示行為」

- ☐ be touched by ～ 「～にショックを受ける」
- ☐ loss 「失うこと；死」
- ☐ delicate 「不安定な；注意を要する」
- ☐ handling 「取り扱い；対応」

第②③④段落

私たちの文化には外部の世界に自分の精神状態を知らせる象徴的な表示行為がほとんどない。最愛の人が亡くなったあとだというのに、私たちは何事もなかったかのように、輪ゴムみたいにぱっと元に戻り、再び毎日の日課を続けることを求められる。国立ホスピス財団の最近の調査では、ほとんどの人は立ち直るのに1カ月あれば十分だと考えていることが明らかになっている。これほど真実からかけ離れたことはないだろう。

時間がかかる、長い時間が必要なのだ。赤ちゃんを誕生させるのに人の体に9カ月以上を要するのであれば、なぜその死から立ち直るのにそれより短い時間で済むなどと考えられるのか。

誰も苦しみたくはない。私たちは痛みを消し去る方法を探し求める。しかし、どこから始めればよいのだろうか。

- ☐ resume 「～を再び始める〔続ける〕」

- ☐ reveal 「～を明らかにする」

第⑤段落

まず最初は、誰でもひどい気分になる。まるで二日酔い状態でジェットコースターに乗っているような気分だ。愛する人の死からくるショックや信じられない思い、そしてこの上ない苦悩が方向感覚を失わせ、あまりの混乱を引き起こすので、手洗いへはどう行くのだったか思い出すのが何かなじみのない経験のように思える。

- ☐ with a hangover 「二日酔い状態で」

- ☐ disbelief 「信じられない気持ち」

- ☐ sheer 「まったくの；この上ない」
☐ agony 「苦悩」

- ☐ disorienting 「方向感覚を失わせる」
☐ disruptive 「混乱させる」

第6段落

これは正常なことで、あなたは自分を無感覚にするそのショックを受け入れるべきだ。あなたにはおそらく次の身体症状の1つ、またはいくつかが出るだろう。食欲不振、悪夢、発汗、頭痛、筋肉の緊張、胸焼け、1パイントのアイスクリームやクッキーをどか食いたいという訳のわからない欲求など。

- ☐ numbing 「まひさせる；無感覚にする」
☐ nightmare 「悪夢」
☐ muscle tension 「筋肉の緊張」

- ☐ heartburn 「胸焼け」
☐ binge on ~ 「～をどか食いする」

第7段落

心理学的には、友人とレストランで楽しく夕食をとって、次にはステーキがレアすぎるといって急に怒りを爆発させたりすることもある。気持ちが揺れ動き、腹が立ったり、悲しくなったり、意気消沈して泣きなくなったりするのはすべて正常な反応である。子供を怒鳴りつけたり、店員にいらいらすることもあってもいい。ものを考えることさえまともにできない場合もある。車の鍵をどこに置いたのか思い出すのに2分もかかることもあり得る。混乱、健忘、短気はすべて初期段階に生じる悲嘆過程の一部をなすものである。

- ☐ blow up 「急にかつとなる」
☐ despondent 「意気消沈した」
☐ yell at ~ 「～を怒鳴りつける」
☐ impaired 「正常に機能しない」

- ☐ confusion 「混乱」
☐ forgetfulness 「健忘」
☐ irritability 「短気；過敏性」
☐ grieving process 「悲嘆過程」

第8段落

「夜遅く、雑誌を読んでいて、そのあと『何を読んだのかまったく思い出せない』と思うこともあるでしょう。」とコネチカット州グリニッチ病院のソーシャルワーカー、バーバラ・ヨハンセンは言う。「これは本来備わっている身体の防御機制の一部なのです。身体はそれ以上もう何も取り入れることができません。その人は、息抜きをし、自分の感情に従うことができるようになるまでは重過ぎる荷を背負っています。」時々、何も感じなくなることもあるかもしれない。何でも感じることを感じればよい。これはあなたの経験であり、他の誰の経験でもないのだから。

- ☐ built-in 「本来備わった」
☐ bring in ~ 「～を取り込む」

- ☐ on overload 「過重負担で」
☐ decompress 「息抜きをする」

第9段落

振り返ってみると、私は父の葬儀の間ずっと無感覚で、ほとんど涙すら出なかった。母が自分自身の悲しみでひどく憔悴して、私たちの悲しみなどまるで考えられなかったため、私はやむなく大人の役割を果たすことになってしまった。その間ずっと、私は自分の感情を退け、母の弱さに腹を立てていた。父のことをあまり思いやらなかったからではない。そうではなく、私は父の死を理性的に処理し、その苦しみ屈服したら自分はぼろぼろになってしまうだろうと恐れたのだ。

- ☐ numb 「無感覚の」
☐ funeral 「葬儀」
☐ shed 「～（涙など）を流す」
☐ distance oneself from ～ 「～から距離をおく」

- ☐ resent 「～に腹を立てる」
☐ intellectualize 「～を理性的に処理する」
☐ give in to ～ 「～に屈服する」
☐ crumble 「もろく崩れる」

第10段落

数カ月後、通りを歩いていてある知らない人がどういふわけか私の父を思い出させた。頭をぐいと後ろに向けもう一度彼を見ようとしたが、もうその姿はなかった。突然、その時初めて、私はわっと泣き出し、むせび泣きに体が震えた。この感情の解放は私が抱えていた苦悩が私の体から浮き出ていくような感じだった。あの時点で、私は悲嘆過程をスタートさせたのだ。

- ☐ inexplicably 「どういふわけか」
☐ jerk 「ぐいと動く」

- ☐ sob 「むせび泣き」
☐ float 「浮く；漂う」

第11段落

「反応が遅れて出てくる人も実際にいるのです。」とニューヨークに拠点を置くセラピストのジョー・ローゼンタール博士は述べる。「悲嘆反応を研究している私たちの多くは、悲嘆の段階を立証したこれまでの仮説——▶¹ 患者が否認から怒りへ、そして悲しみへ、それから最終的に容認へと進むという仮説に疑いを抱えています。その段階のどこでも、失った人のことを思い出させる引き金となる経験次第で後戻りすることはあり得るのです。▶² 何カ月も何年も受け入れることができなくて、そのあと突然、初期の苦痛へ一気に押し返される人だっているのです。流れに身を任せることを学ぶのが秘訣です。」

▶1 (第2文) 前出語句の内容を説明する〈with + O + C (=現在分詞)〉の構文

...the stages of grief— with the patient going from denial, to anger, to sadness

「悲嘆の段階」

O

C (=現在分詞)

and (then eventually) to acceptance.

「患者が否認から怒りへ、そして悲しみへ、それから最終的に容認へと進むという——」

▶2 (第4文) 推量を表す could の用法

Someone could have felt acceptance for months or years and then suddenly (could) be

+完了形

+原形

swept back to the initial pain.

前の節は could have done 「…だったかもしれない」(過去の推量)、後ろの節は could do 「…かもしれない」(現在または未来の推量) という意味。この文は直訳が難しいが、あえて「推量」がわかるように訳すならば「…だったかもしれないが、そのあと突然～するかもしれない人もいます」などとなる。

- ☐ grief response 「悲嘆反応」
☐ document 「～を立証する」
☐ denial 「否認」
☐ acceptance 「容認」

- ☐ backslide 「後戻りする」
☐ trigger 「～（感情・記憶など）を引き起こす」
☐ sweep 「～をさっと押し流す」
☐ go with the flow 「流れに従う〔身を任せる〕」

第12段落

突然の引き波が生じる潮流のように、悲しみの満ち干にはまだある程度の予測可能性がある。私にはジョアン・ヨゼフスキー博士の予測可能なものについての記述がそれを正確に要約しており、この行程において予測できるものの道標を与えてくれると思う。

- ☐ tide 「潮流」
- ☐ undertow 「引き波」
- ☐ predictability 「予測可能性」

- ☐ ebb and flow 「(潮の) 干満；満ち干」
- ☐ sum up 「～を要約〔概括〕する」
- ☐ journey 「旅程；行程」

第13段落

マサチューセッツのセラピストで『不死鳥現象』の著者である女性が、それを以下の5段階に分類している。

- [1] 衝撃 —— 食事、水、休息など生理的に必要なものは維持しながら死という現実を処理していく初期段階。
- [2] 混沌 —— 一方で悲しみの感情を表現するためのはけ口を必要としながら、瓦礫から秩序を構築していく。
- [3] 適応 —— 愛する人のいない生活に徐々に適応し、支援組織、同じ悲しみを持つ他の人々、仕事、学校や所属する教会などを通じて他者との関係を求めるようになり、同時に自分自身の新しい役割を築いていく。
- [4] 均衡 —— 生活の安定性とバランスを獲得し、愛する人がいなくても自分の将来性について考えることができるようになる。
- [5] 外傷後の成長 —— その人が、さらなる自己潜在能力、より大きな精神性、利他主義、自己認識、そして人生についてのより深い認識を発達させながら、再形成されて愛する人の喪失から立ち直る際に結果として生じる変容。

- ☐ break ~ down into ... 「～を…に分類する」
- ☐ sustain 「～を維持する」
- ☐ physiological 「生理〔学〕的な」
- ☐ house of worship 「教会；礼拝所」
- ☐ attain 「～を獲得〔達成〕する」
- ☐ stability 「安定性」

- ☐ self-potential 「自分の潜在能力〔将来性〕」
- ☐ emerge 「抜け出す」
- ☐ reshape 「～を再形成する」
- ☐ self-awareness 「自己認識」
- ☐ appreciation for life 「人生についての深い認識」

第14段落

みなこの最終段階へ到達するための自分なりのレースをしている。少しずつ前進する人もいれば、大きく前進する人もいる。後戻りしてしまうこともしばしばある。ただ1つ本当に重要なことは、ともかくも進んでいるということだ。

- ☐ take baby steps 「少しずつ前進する」

- ☐ take big steps 「大きく前進する」

Unit 3

11 選択肢の過多が引き起こす問題とその対処法 問題編 p.39

何をするにせよ、現代人には多くの選択肢がある。ここからどんな問題が生じるのだろうか、またその問題にどう対処すればよいのだろうか。

❖ 解答 正しい答えをチェック

① (ア) 4 (イ) 2 (ウ) 4 (エ) 2

② 4

③ あまりにも多くの選択肢があると、どんな決定をしようと、その結果がどのようなものであろうと、私たちは本質的に不満足な状態になってしまう

④ [A] 4 [B] 3

⑤ 1, 4, 8

❖ 解説 考え方をチェック

1 内容の把握

(ア) **Striving to maximize each opportunity makes sense** (when your choices are obvious and few.)

- 「あらゆる機会を最大限にしようとする ×可能性を作り出すのは無意味である」
- 「あらゆる機会を最大限にしようとする ×戦略を展開することには賛否両論がある」
- 「あらゆる機会を最大限にしようとする ×考えを捨てるのは理解できる」
- 「**あらゆる機会を最大限にしようと懸命に努力するのは理にかなっている**」

Striving to do = Making great efforts to do 「懸命に…しようとする」、makes sense = is logical 「理にかなっている」から4が正解。また、あとに続く文意「もはや必要ないのに今でも最大化したり蓄積したりしようとする本能を保持している」に照らしても1～3のような意味は考えられない。

(イ) Choices often **occasion** anxiety

- 「代替選択肢は ×一般に私たちの不安を軽減する」
- 「**選択肢は多くの場合、不安を生じさせる**」
- 「×可能性はしばしば ×私たちを緊張から解放する」
- 「選択肢はしばしば ×不安を克服する機会を私たちに与えてくれる」

occasion が「～を引き起こす」の意の他動詞であり、occasion anxiety で「不安を引き起こす」となることがわかれば2が正解だと判断できる。

(ウ) (you feel) you have no one **but** yourself to blame

- 「×あなたを除くすべての人があなたを非難する」
- 「あなたは非難されるべき唯一の人 ×ではない」

3 「あなたは~~x~~自分自身の代わりにすべての人を非難する」

4 「あなたは自分自身のみを非難すべきだ」

この but は前置詞で「～を除いて (= except)」の意味。したがって「あなたはあなたを除いて誰も非難する人を持たない」となり、4 がこの内容を表している。前文が「選択肢が少なくして選択が制限されていた時には、結果が悪くても自分を責める理由はなかった」となっていて、波線部を含む文は逆接の接続副詞 **however** (しかし) に導かれていることにも注意しよう。波線部のあとの the decision was yours alone は「その決定はあなただけのものだった⇒あなた1人が決定した」の意。

(㊦) letting go of regrets

1 「~~x~~自分が苦境にあると気づくこと」

2 「失望から自分を解放すること」

3 「~~x~~深い同情の念を表明すること」

4 「~~x~~悲しみを共にすること」

That means consciously giving up perfectionism and ...ing ～. 「それは完璧主義を意識的にあきらめ、そして…することを意味する」という文脈で、動名詞句 letting go of regrets は and で結ばれた means の2つ目の目的語。let go of ～ は「～を手放す (= release)」の意なので、ここでは「後悔するのをやめる」という意味になり、2 が同じ意味を表している。giving up perfectionism and ～ という文意の流れから考えても他の選択肢は該当しない。

2 指示語の把握

図解

most people today do not desire private jets or islands for sale

because they are so far outside a normal way of thinking

because 以下は「それらが普通の考え方からほど遠い〔常識では考えられない〕ので」という意味。they は前に出た複数を表す語句で、「今日ほとんどの人が欲しがらない物」を指すので、正解は4しかない。for sale「売りに出された〔て〕」、so far outside ～「～からほど遠い〔かけ離れて〕」。

3 文構造の把握

図解

the availability of too many options leaves us inherently unsatisfied, /

S (無生物主語)

V O

C

no matter what decision we make and whatever its outcome 《譲歩を表す副詞節》

語句 ・ the availability of too many options 「あまりにも多くの選択肢が手に入る〔ある〕こと」 (availability 図< available 図「手に入る；入手可能な」) ・ inherently 「本質的に」
・ outcome 「結果」

● leaves us unsatisfied 「私たちを不満足な状態にしておく」 <leave + 人 + 形容詞> で「人を…な状態にしておく」の意。

- no matter what (= whatever) decision we make 「私たちがどんな決定をしよう」と
- whatever (= no matter what) its outcome 「その結果がどのようなものであろうと」 outcome
のあとに副詞節中の be 動詞 is が省略されている。

答案作成上のポイント

主節は無生物主語構文であるが、英文にそって「あまりにも多くの選択肢があることが私たちを不満足な状態にってしまう」とも訳せるし、主語を副詞的にとらえて「あまりにも多くの選択肢があると私たちは不満足な状態になってしまう」と訳すこともできる。

4 内容の把握

[A] 「著者がこの論説を書いた主目的は何か。」という問い。

1「著者は、現代の広告には多くの魅力的な選択肢とサービスを提供するので、その価値をもっと認めるよう私たちに助言している。」 2「著者は、意思決定の精神的、感情的なメカニズムと、その現代企業のマーケティング戦略との関係を説明しようとしている。」 3「著者は、選択肢に満ちた豊かな現代社会と、食糧不足に苦しみそのため不幸な生活をおくった私たちの先祖の社会を比較しようとしている。」 4「著者は、幸福感を得るには、あらゆる選択肢や意思決定の完璧な結果にとらわれるのをやめ、ある程度の制限をもうけたり、受け入れるようにすべきだと説得しようとしている。」

本文全体の内容からも判断できるが、特に Choice can be great if we refuse to obsess about all the alternatives. に始まる最後の第⑩段落では「選択肢の制限と、選択結果へのこだわりをなくすこと」の重要性が結論として強調されており、4が正解。1, 2, 3は一部本文に出ている表現を含むものの、この論説の主目的とは言えない。

[B] 「第⑦段落の、『個人的な幸福という夏の稲妻』に関するアレクサンダー・ヘルツェンの言葉が暗示しているのはどのようなことか。」

1「不幸についての集合的記憶は非常に強く、まるで壊滅的な夏の嵐であるかのように、私たちはそれに対処できない。」 2「私たちは極めてまれにしか個人的な幸福を感じることがないので、自分は根本的に不幸な存在なのだと思ってしまうことが多い。」 3「個人的な幸福は突然やってきて突然消え去るので、私たちはそれを十分に期待することも味わうこともできない。」 4「個人的な幸福の哲学的解釈はあまりに難しく、私たちはそれをきちんと理解することはできない。」

第⑦段落第2文では、人類が進化してきた目的は「生き延びて再生産する〔子孫を残し続ける〕ため」であり、「個人的な幸福という(夏の)稲妻を経験する〔味わう〕ため」ではない、とある。すなわち前者が長い時間をかけて営まれ続ける人類全体の行為であるのに対し、“the summer lightning of personal happiness” は、「個人の幸福(感)など、一瞬にして消え去る夏の稲妻のようなものだ」という意味で使われている。したがって、3が正解。

5 内容の把握

1 ○「今日、私たちは職業から住居、食べ物から教育の場に至るほとんどすべてのものを自由に選択できるが、皮肉なことに、そのことが適切な決断をする自信のなさの原因となっている。」

まさに本文の主旨をまとめた文となっており正解。

2 ×「昔、私たちの先祖は、選択肢の幅は今日ほど広くはないにせよ、手に入るいくつかの選択肢から、最良の選択をする必要性に悩まされた。」

第②段落第3～4文から、「選択の余地はほとんどなく、仮にあってもその結果で悩むようなことはなかった」ことが読み取れる。

3 ×「自宅を所有するのは人生の一大事であるから、対象とする地区にあるほぼ同価格のたくさん物件を見たあとで賢明な決断をするのはひどくストレスのたまることであったも、あなたはできる限り多くの物件に当たるべきである。」

第④段落第5文に不動産物件選びに関する記述はあるが、このような意味で取り上げられた例ではない。

4 ○「今日私たちが行う選択のほとんどは重要でも有害でもないが、間違った選択をすると後悔にかられるのではないかと考えて、選択に対して大きな不安を抱くようになる。」

第⑥段落に合致する。

5 ×「著書『幸福につまずく』の中で、ハーバード大学の心理学者ダニエル・ギルバートは、私たちは知力の限界を受け入れることで幸福が得られると提言している。」

第④段落第2文参照。ギルバートが提言しているのは「選択の制限」である。

6 ×「私たちの中にはある種の食べ物に対する強い衝動を制御できる人もいる。それはそうした食べ物が絶えず手に入ることから、それらへの嗜好が私たちの心や体に植えつけられてきたからだ。」

第④段落第2文に一部関連する記述はあるが、本文の文脈とはまったく異なる。

7 ×「選択肢が限られている時でも、私たちの心理的メカニズムは非常に重大な決定をするのを根本的に嫌がる。」

第①段落第2文参照。「選択肢が少ない時にはうまく機能していた心理的メカニズム」とある。

8 ○「選択肢を制限する行為は、生存と幸福に必要なだとみなすものを最大化しようとする私たちの本能と本質的に相容れないものである。」

第②段落第7文にこのことが書かれている。また第⑥段落以降ではこの問題にどう対処すればよいのかが論じられており合致する。

全訳 英文内容をチェック

第①段落

あなたがたは、住む場所や職業の選択だけでなく、32、42、あるいは52インチ薄型テレビに大金を費やすかどうかでも決断する。歴史上初の世代に属している。朝食のシリアルから大学教育に至るまで、私たちは日常のあらゆる瞬間において選択肢に悩まされ、そしてこれらの選択肢は大いに必要なものとしてしばしば市場に出る〔売り出される〕。また、私たちの大きな決断は宣伝の影響を受けやすい。大

学は志願者獲得のために競争するし、産業全体、例えば、旅行代理店や室内装飾業者や資産運用会社などが、選択肢が多すぎる世界の舵取りに没頭している。

- | | |
|--|--|
| ☐ shell out for ~ 「～に大金を払う」 | ☐ compete for ~ 「～を得るために競う」 |
| ☐ choice 「選択（肢）」 | ☐ asset 「資産」 |
| ☐ market 圖 「～を市場に出す；売り込む」 | ☐ navigation 「運航指示」 |
| ☐ be subject to ~ 「～を被りやすい」 | ☐ alternative 「選択肢；代わるもの」 |

第②段落

▶1 私たちの先祖だったらこのような選択肢過剰には圧倒されるであろうし、私たちの脳は今でも圧倒されている。それは、私たちが慢性的な食糧不足と、自分の二本足以外に移動手段がないことと、頼りになる情報源がほとんどないことによって選択の余地が限られている世界で進化したからなのだ。メニユーも iPod もない世界では、食事をしてちょっと音楽を楽しむか、それなしで済ませるかしかなかった。しばしば選択といえば、何かあるか何もないかの2つだった。こうした世界で私たちの先祖は意思決定を「常に最良のものを得る」ことに単純化できる余裕があった。選択肢が明らかで少ない時は、それぞれの機会を最大限活かそうとするのは理にかなっている。しかし、私たちはもはや最大化することも蓄積することも必要ない世界にいながらなおそうしようとする本能を引きずっており、そのことが私たちの頭をおかしくしてしまうのだ。私たちの精神は欠乏のある環境で進化した。それとは対照的に、今日私たちは豊富さに対処しなくてはならないことに圧倒されているのである。

▶1（第1文）仮定法過去；省略

Our ancestors would be overwhelmed by this excess of options,

「私たちの先祖なら…だろう」主語に仮定の意味が含まれている《仮定法過去》

and our brains still are.

^ overwhelmed by this excess of options

- | | |
|---|---|
| ☐ overwhelm 「～を圧倒する」 | ☐ decision making 「意思決定（の仕組み）」 |
| ☐ excess 「過度；行き過ぎ」 | ☐ carry 「～を保持する」 |
| ☐ evolve 「進化する」 | ☐ accumulate 「～を蓄積する」 |
| ☐ chronic shortages (of ~) 「(～の) 慢性的な不足」 | ☐ drive ~ insane 「～の頭をおかしくする」 |
| ☐ snatch 「一片；一部分」 | ☐ scarcity 「欠乏，不足」 |
| ☐ go without ~ 「～なしで済ます」 | ☐ by contrast 「(それとは) 対照的に」 |
| ☐ can afford to do 「…できる余裕がある」 | ☐ cope with ~ 「～に対処する」 |
| ☐ simplify ~ to ... 「～を…に単純化する」 | ☐ plenty 圖 「豊富さ；多数〔量〕」 |

第③段落

選択肢が不安を引き起こす場合が多いのは、私たちが、自分が持っているものを持てる可能性のあったものや持つべきものと比較するからだ。私たちの先祖は、そもそも持つことを想像することすらできないようなものごとで不安になるはずがなかったが、それはちょうど、それらが普通に考えつくものとあまりにかけ離れているゆえに今日ほとんどの人が自家用ジェット機や売りに出された島を欲しがらないのと同じことだ。

- | | |
|---|--|
| ☐ envision 「～を想像する；心に思い描く」 | ☐ in the first place 「まず第一に；そもそも」 |
|---|--|

第4段落

物が少ないことによって選択が制限されていた時には、結果が悪くても自分を責める理由はなかった。しかし、今日ではもしあなたがまずい選択をすれば、責めるのは自分自身しかないと感じる。なぜなら、その決定はあなた自身が下したからだ。こうした状況は、正しい選択をしなくてははいけないという圧力を生み出す。周囲数マイル内で唯一手に入る住まいであれば、自分がかもともと行った選択に疑問を感じたりする必要はなかった。それに對し、今日では、希望する地区にある同価格帯で売り出された 25 件の不動産物件を見てしまったら、自分のお金を賢明に使ったと感じるのはなかなか難しい。

- ☐ restrict 「～を制限する」
- ☐ **outcome** 「結果；成果」
- ☐ **circumstance** 〈通例～s〉「状況；環境」
- ☐ **generate** 「～を生み出す」
- ☐ **question** 動「～を疑問に思う〔問題にする〕」

- ☐ **shelter** 「住居、住まい」
- ☐ **property** 「不動産物件」
- ☐ **price range** 「価格帯」
- ☐ **tough** 「難しい；困難な」

第5段落

10 日間のハワイ旅行といったようなすばらしい選択でさえ、実行されなかった短期旅行に比べると見劣りすることもある。『選択のパラドックス』という著書の中で心理学者のバリー・シュワルツは、あまりにも多くの選択肢があると、どんな決定をしようと、その結果がどのようなものであろうと、私たちは本質的に不満足な状態になってしまうのだと主張している。私たちは単にそうできるという理由だけで、実現しなかった可能性の方に関心が向いてしまうのだ。先祖とは違い、私たちには自分の持つ選択肢についてじっくり考える時間とエネルギーがある。私たちは自分が果たして正しい選択をしたのかどうか迷って多大な知力を費やすのだ。ある（1 つの）決断の利点がすぐに明らかにならない場合、結果として不安や苦悩が残ることになる。例えば、買い手が深い後悔に陥るといったようにだ。

- ☐ **pale** 動「見劣りする」
- ☐ **in comparison to** ～「～に比べると」
- ☐ **paradox** 「逆説；パラドックス」
- ☐ **deliberate about** ～「～についてじっくり考える〔熟慮する〕 (= contemplate)」

- ☐ **brain power** 「知力」
- ☐ **distress** 「苦悩；悲嘆」
- ☐ **lead to** ～「～につながる」
- ☐ **regret** 「後悔」

第6段落

今日、ほとんどの選択は取るに足らないもので、めったに私たちの生存を脅かしたりしないことを私たちは知ってはいるが、かといってこの事実によって、私たちが悩まなくなるわけでもない。さらに、私たちは大きな選択であるほどなおさら、その重要性を過大評価してしまうのだ。医者や伴侶や職業を選ぶ能力は私たちの生活の質にとって極めて重要ではないだろうか。私たちは大きな決断をするとなると、正しい決断をしなくてはならない、さもないと悲惨な結果になってしまう、と自分に言い聞かせるのだ。

- ☐ **trifling** 「瑣末な；取るに足らない」
- ☐ **threaten** 「～を脅かす」
- ☐ **existence** 「存在；実存」
- ☐ **overestimate** 「～を過大評価する」

- ☐ **all the more** 「いっそう；なおさら」
- ☐ **consequence** 「結果」
- ☐ **disastrous** 「悲惨な；破滅的な」

第7段落

私たちは素晴らしい認知能力を持ち合わせているが、ある決定に関して自分が実際にどう感じるかを予測する能力はそこには含まれていない。私たちが進化したのは生き延びて子孫を残すためであって、ロシアの哲学者アレクサンダー・ヘルツェンが「個人的な幸福という夏の稲妻」と称したものを経験するためではなかったし、まして、何がそのようなものを私たちにもたらすのかを予測するためではなかった。

- ☐ **be equipped with** ～「～を備えている；持ち合わせている (= possess)」
- ☐ **cognitive ability** 「認知〔認識〕能力」
- ☐ **reproduce** 「生殖する；子孫を残す」

- ☐ **the summer lightning of personal happiness** 「個人的な幸福という夏の稲妻」夏の稲妻に象徴されるような、一瞬のはかない個人の幸福のこと。
- ☐ **much less** ～「まして～でない」
- ☐ **deliver** 「～を届ける〔もたらす〕」

第8段落

そういうわけで、さまざまな選択肢から充実した人生を仕立てることができるなどと考えるのは、ぜひとも避ける必要がある。選択の制限は単に不安を抑制するだけでなく実際に幸福感を増す、と『幸福につまずく（邦題：幸せはいつもちょっと先にある）』の著者でハーバード大学の心理学者ダニエル・ギルバートは主張している。制限を受け入れたり1つに決めたりする時、人は充足感を得ることをギルバートは見出している。これはおそらく、選択肢がほとんどない時の方が人は自分をとりまく状況を完全に受け入れやすいからなのだろう。（つまり）きっぱり決断することで自由を得るからなのだ。

- ☐ **essential** 「不可欠の；ぜひとも必要な」
- ☐ **tailor** 「～を仕立てる；作る」
- ☐ **fulfilling** 「充実した；満足感を与える」
- ☐ **a variety of** ～「さまざまな〔多様な〕～」
- ☐ **curb** 「～を抑制する；抑える (= control)」

- ☐ **stumble on** ～「～につまずく」
- ☐ **make a commitment** 「誓いを立てる」ここでは「1つ（に係わること）に決める」
- ☐ **fulfilled** 図「満たされている；満足感のある」
- ☐ **decisiveness** 「きっぱり決めること；果断」

第9段落

物を蓄積する必要性は私たちの心の中だけでなく、食欲にも組み込まれている。▶2 それで、私たちの体は、十分であることは理解するが過剰であることは理解できず、そのことが食べ過ぎやある種の食べ物に対する強い欲求を抑えられないことへつながる。例えば、今、私たちがキャンディーをととても食べたいとすると、それは人類の歴史のほとんどの間、私たち人間は甘いものに対する欲求を満たす次のチャンスがいつくるのか知らなかったからなのだ。

▶ 2 (第2文) 前節内容を先行詞とする which；名詞構文

Thus, our bodies understand plentifulness, but not excess,

S V O₁「豊富さ」 O₂「過剰さ」 = (our bodies) don't (understand) excess

[which] leads to overeating and the inability to control our strong desires for ...].

前節の内容を先行詞とする

「…できないこと」 (= (we are) unable to control ~)

- ☐ **appetite** 「食欲」

- | ☐ **long for** ～「～を切望する」

第10段落

現代の西洋社会のような進化的に斬新な環境では、「最高によい」よりも「けっこうよい」を目標にして意思決定への満足のいく取り組みをしていくのが一番いいのかもしれない。つまり、それは意識的に完璧主義をあきらめ、後悔するのをやめるということだ。

- ☐ evolutionarily 「進化（論）的に」 (形 evolutionary 「進化（論）の」)
- ☐ be best off doing 「…するのが一番よい」
- ☐ novel 「斬新な； 新奇な (= new and unique)」
- ☐ take an approach to ~ 「～に取り組む」

第11段落

私たちがあらゆる代替選択肢にとらわれないようにするなら、選択はすばらしいものになり得る。
 ▶3 問題は、選択肢が少ない時にはうまく機能していた心理的メカニズム、すなわち、最大化しようとする衝動に対処する方法を見出すことだ。私たちは危険な行動をとることによって、言い換えれば、自分の選択肢を制限し、さらに、最終的な結果について大騒ぎするのをやめることによって、自分自身をごまかす（最大化衝動を抑える）ことができる。進化の過程で作られた私たちの感情の構造（選択肢を最大化したいと思うメカニズム）にもかかわらず、選択肢は私たちの味方となり得る。ある選択肢について過度に悩んだりしないということも、それ自体1つの選択肢なのである。

▶3 (第2文) 注意すべき which の用法

The problem is finding a way to handle the psychological mechanism,

(that is, the urge to maximize,) which worked well (when choices were scarce).

この「心理的メカニズム (=最大化しようとする衝動)」とは、第②段落の第6～8文から、選択肢が少なかった環境で進化した私たちの心理作用であり、もはやその必要がないのに最大化しようとする衝動（メカニズム）であることがわかる。which 以下は「どのような心理的メカニズムか」を限定する関係代名詞節で、この which は限定用法。前にコンマがあるのは、先行詞 the psychological mechanism に that is, the urge to maximize, という補足が付加されたためである。

- ☐ obsess about ~ 「～について思い悩む」
- ☐ handle 「～を取り扱う； ～に対処する」
- ☐ psychological 「心理（学）的な」
- ☐ mechanism 「働き； メカニズム」
- ☐ urge to do 「…しようとする衝動」
- ☐ scarce 「わずかな； 希少な」
- ☐ trick 「～（人）をだます； ごまかす」
- ☐ risky 「危険な」
- ☐ make a big fuss about ~ 「～で大騒ぎする」
- ☐ emotional 「感情の； 感情に関する」
- ☐ makeup 「構造； 構成」

● 導入

- ① (ℓ. 3) ..., **we are troubled with options at every moment in our life** ...

▶ 私たちは日常的に選択肢の過多に悩まされている。

● 本論

- ② (ℓ. 19) Today, by contrast, **we are overwhelmed by having to cope with plenty**.

▶ 私たちは豊富さに対処しなくてはならないことに圧倒されている。

- ③～⑥ (ℓ. 21) Choices often occasion anxiety ...

▶ 選択肢が引き起こす不安の具体例。

- ⑦ (ℓ. 50) ..., but the capacity to predict how we will really feel about a decision is not one of them.

▶ 私たちには、ある決断に際して実際にどう感じるかを予測する能力はない。

- ⑧ (ℓ. 55) **That is why it is essential to avoid thinking we can tailor a fulfilling life from a variety of options. Limiting choice does not just curb anxiety, but it actually creates happiness, ...**

▶ だから、さまざまな選択肢から充実した人生を作れるなどという考えを捨てるのが重要で、逆に選択肢を制限することが不安を抑制するだけでなく実際に幸福感を生み出す。

- ⑨ (ℓ. 63) Thus, our bodies understand plentifulness, but not excess, ...

▶ 私たちの心は食欲と同じで、豊富さは理解するが過剰さは理解できない。

- ⑩ (ℓ. 69) ..., we may be best off taking a satisfying approach to decision making, **aiming for "good enough" rather than "the best."**

▶ 選択の意思決定に関しては「最もよい」ではなく「これで十分」を目標にするのが一番よいだろう。

● 結論

- ⑪ (ℓ. 72) Choice can be great **if we refuse to obsess about all the alternatives.**

▶ 多くの選択肢にとらわれないようにするなら選択はすばらしいものになり得る。

要約 私たちが選択に悩まされるのは選択肢がありすぎるからだ。むしろ、自ら選択肢を制限し、「最高」ではなく「これでよい」くらいを目標に選択結果を受け入れるようにすれば、不安は抑制され、選択はすばらしいものになる。(102字)

12 嘘の社会的機能

問題編 p.45

嘘をつくのは道徳的に悪いことだと私たちは教えられる。だが、嘘にもいろいろあり、もしすべて嘘が許されない世界になったらいったいどうなるだろうか。

● 解答 正しい
答え をチェック

- ① ウ ② イ ③ than we tend to think to ④ ア
 ⑤ 存在するものを存在しないかのように、また、存在しないものを存在するかの
 ように表現することができる
 ⑥ ア ⑦ イ ⑧ ウ ⑨ エ
 ⑩ 装置が機能しない場合に生じ得る危険。(18 字)
 ⑪ (a) avoid (b) protects (c) maintained (d) revealed

● 解説 考え方 をチェック

1 文脈の把握

- ア「なぜ人は嘘をつくのか」 イ「嘘をつくタイミング」
 ウ「嘘をついている時の様子」 エ「人がつく嘘の種類」

文意は「(1) についての意見は数えられないほどあり、しばしば矛盾している」で、その具体例が次の文に示されている。挙げられた例 (move a lot ⇔ keep very still, cross their legs ⇔ cross their arms, look up ⇔ look down, make eye contact ⇔ fail to make eye contact) はみな人の動作・様子であり、ここからウが最も適切だとわかる。

2 文脈の把握

- ア「予想通り正確に」 イ「偶然よりたいしてよくなく」
 ウ「平均よりいくぶん悪く」 エ「素人よりはるかによく」

国解

..., even professional lie-catchers (, like ...,) perform, [when (they are) tested], (2).
 S V 「(物・事が) うまくいく」

文意は「一般的に、裁判官や税関職員のような嘘を見抜く専門家でさえ、テストを受けると (2) うまくいく」で、空所には perform を修飾する語句が入る。続く文が In other words 「言い換えれば」で始まり、「コイン投げをただけだとしても、同じ程度の頻度で正しかったであろう」となっている。「コイン投げ」とはつまり、偶然に運を任せるまぐれ当たりということ。perform not much better than chance 「(成績は) 偶然以上にそれほどよいものではない [まぐれとたいして変わらない]」とするとこの2文がほぼ同じ意味になるので、イが正解。

3 文脈と語法の把握

文全体は **Just as A, B「ちょうど A なのと同様、B である」** の構文。また A は it is ~ to ... の形式主語構文になっており、B も **it is (also much more) difficult** と始まっていることから、同じ形式主語構文がくると見当がつく。much more difficult の比較級に続くのだから、まず **than** がくる。次には比較の対象がくるが、we と 3 つの動詞 look, tend, think があることから **〈S + V〉** が続くかと予想できる。また、tend は **tend to do** で「…する傾向がある」の意味になるので **we tend to think** か **we tend to look** になるが、much more difficult との意味関係から **than we tend to think** 「私たちが思う傾向があるより〔よくそう思っているより〕ずっと難しい」とつながると考えるのが自然。さらに、形式主語構文だとすると、空所のあとの **tell ...** の真主語部分を構成するには **to** が必要。したがって、全体では **than we tend to think to** とするのが正解。不要な語は look である。

4 内容の把握

ア「あなたが本当はどう思っているか」

イ「子供たちがつく嘘」

ウ「歯医者へ行くこと」

Ⅰ「あなたがランチが嫌いなのわけ」

下線部(4)の harsh は「厳しい；無情な」の意味。前に述べられているように「ありがとう。最高だよ。」とか「行けるといいんだけど、歯医者予約があつてね。」などという答えは「礼儀と称する嘘 (lies)」であり、これに対し「それよりもっと無情な事実 (truth)」といえ、**A** つまり「あなたの本心」のことである。

5 文構造の把握

圖解

(We humans are active, creative animals who) can represent what exists

[as if it did not (exist)], and what doesn't exist [as if it did].

as if 「あたかも…であるかのように」 O_2 = existed

- **represent ~ as if it did not / did : represent ~ as ...** で「～を…として表現する」だが、ここでは as if 節が用いられて「～をあたかも…であるかのように表現する」の意となる。as if 節は現在の事実と反することなので時制は假定法過去。it は前の what ... を受ける。
- **what exists / what doesn't exist** : いずれも関係代名詞 what が導く名詞節で、represent の目的語になる。「存在するもの」／「存在しないもの」

答案作成上のポイント

この文全体を訳す場合は「私たち人間は活動的で創造的な動物であり、…」と前から訳しても差し支えない。

6 内容の把握

ア「彼らは他人に依存することが少なくなっていく。」

イ「彼らは正しいことと間違っていることをより明確に区別するようになる。」

ウ「彼らは自分たちの親が他人とまったく変わらないことに気づく。」

エ「彼らは嘘のつき方を学ぶよう奨励されていることを理解する。」

下線部(6)は「子供は自分を信じる人たちに対する影響力をまたもう少し増していく」という意味。前の文では、「親に対する最初の嘘で、親の知らない何かを知っていることになり、(親が子供のすべてを把握しているという)力関係に少し変化が生じる(→親への依存度が少し減る)」と述べられている。下線部の前の With each new lie は「新たな嘘をつくたびに」(= Whenever they tell a new lie) の意。つまり、「**影響力が増す=依存度が(その分)減る**」ということで、アが正解。

7 文脈の把握

ア「無駄に」 イ「結局」 ウ「決して…ない」 エ「対照的に」

次の第⑨段落から論点が変わり、「完璧な嘘発見器ができたらどうなるか」について述べられている。つまり、空所(7)を含む文は冒頭から論じられてきた「人が嘘をつく(他人を欺く)」ことについての結論にあたるわけで、「人を欺くということは、**結局**、…と言えないだろうか」となるのが自然。したがってイが正解。

8 文脈の把握

ア「やはり」 イ「何とんでも」 ウ「言い換えれば」 エ「他方では」

図解

an efficient machine for “credibility assessment,” = a perfect lie detector
 「『信頼性評価』のための効果的な機械」 「完璧な嘘発見器」

空所(8)をはさむ2つの語句の関係を考えると、後者は前者の「**言い換え**」となっているので、ウが正解。

9 内容の把握

lies that are self-serving とは「(自分に仕える→) 自分に都合のよい嘘」のこと。without being dangerous は「危険性のない」という意味だが、この「危険」とは、前文に This quest to make the country safer とあるように「**国家に対する危険(dangerous to the country)**」である。したがってエ「利己的だが、国家にとって安全な嘘」の意味が適切。

10 内容の把握

It would be a mistake to bring such a device too rapidly to market, / before

形式主語	真主語	such a device = a perfect lie-detection device
------	-----	--

considering what might happen / (not only) if it didn't work — which is the kind of risk
= the device

we're accustomed to thinking about — (but also) what might happen / if it did.

2つの仮定法過去の文 what might happen if it didn't work と what might happen if it did が not only ~ but also ... で結ばれている = worked

下線部(10)の意味は「それは私たちが考え慣れている種類の（方の）危険性であるが」で、whichの先行詞はwhat might happen if it didn't work 全体となる。itはsuch a device（= a perfect lie-detection device）を受ける。つまり、下線部で説明されているriskとは「装置が機能しない場合に生じ得る危険」のことである。

11 文脈の把握

- (a) 第④段落～第⑧段落参照。特に「人が嘘をつく」ことについての結論部にあたる第③段落は **Lying is just so ordinary, so much a part of our everyday lives and everyday conversations, ...** (嘘はあまりにありふれたもので、すっかり日常生活や日常会話の一部分となっている…) と始まっている。したがって、**avoid doing** 「…するのを避ける〔防ぐ〕」の表現を用いて「嘘をつくことを避けられない」とする。
- (b) 第⑤段落第2文の **Many of these are harmless lies that allow us to get along with one another.** (私たちがお互いうまくやっているとされる無害な嘘) や第⑥段落第4文 **Concealment, indirectness, silence, outright lying — all contribute to the peace-keeping of the human community.** (隠すこと、遠まわしな言い方、沈黙、真つ赤な嘘——これらはすべて人間社会の平和を保つのに貢献している) といった記述から、**protect A from ～** 「**Aを～から守る**」の表現を用いて「人々を不要な争いから守る」とする (confrontation「対立、争い」)。主語は **lying** なので **protects** となる。
- (c), (d) **not all the truth is ～** は「すべての事実が～というわけではない」という部分否定。第⑨、第⑩段落では「完璧な嘘発見器の開発」とそれが一般社会に普及した場合の恐ろしさが述べられていることから、(c)に **maintained**, (d)に **revealed** を入れ、「多くの場合、人間社会の平和は真実がすべてさらけ出されるわけではないことで維持されている。」とすれば本文に合う。(c), (d)ともに受動態なので過去分詞になる。

第1段落

人間がお互いどのようにだまし合うかについて私が記事を書いていることを耳にすると、人々はすぐに嘘の見抜き方を私に教えようとする。何人かの友人は、嘘つきはいつも左を向くと言うし、飛行機の隣の席の男は、嘘つきはいつも口元を隠すと言う。嘘をついている時の様子がどのようなものであるかについての意見は数えられないほどあり、しばしば矛盾する。嘘つきが見抜かれるのは、せわしく動くから、じっとして少しも動かないから、脚を組むから、腕を組むから、上を向くから、下を向くから、目を合わせるから、合わせないから、などというように。フロイトは嘘をついている人はその人の指の動かし方を十分注意深く観察すれば誰にでも見抜けると考えた。ニーチェは「口は嘘をつくかもしれないが、にもかかわらず、その口が作る顔つきは真実を語る。」と書いている。

☐ **deceive** 「～をだます；欺く」

☐ **be quick to do** 「すぐに…する」

☐ **contradictory** 「矛盾した；相反する」

☐ **detect** 「～を見抜く；見破る」

☐ **fail to do** 「…しない；…しそこなう」

☐ **spot** 「～を見分ける；～に気づく」(≒ detect)

☐ **nonetheless** 「それにもかかわらず」

第2段落

ほとんどの人は自分は嘘を見分けるのが得意だと思っているが、調査研究の結果は違っている。専門的な訓練を受けた人は嘘つきを的確に見分ける能力があるだろうと思うのは間違いだ。一般的に、裁判官や税関職員のような嘘を見抜く専門家とさえ、テストを受けるとその成績は偶然よりたいしてよくはない。言い換えれば、^{▶1} 専門家であっても、ただコイン投げをしただけだとしても、(実際の判断と) 同じ程度の頻度で正しかったであろうということだ。

▶1 (第4文) 仮定法過去完了

even the experts would have been right almost as often if they had (just) tossed a coin.

(助動詞の過去形 + have + 過去分詞)

(過去完了)

almost as often ... の比較の対象は、if 以下が「コインを投げたとした場合」という仮定なので「嘘を見抜く専門家として実際に嘘つきを見分けた場合の(判断が正しい)頻度」、補って言うなら almost as often (as they were right when they used their professional lie-detecting skills) という比較である。この文が言いたいのは「専門家が正しい(嘘つきを見分けられる)頻度=コイン投げをやった場合の確率と同程度」つまり、「嘘を見抜く上で彼らの専門性はほとんど機能しない」ということ。

☐ **otherwise** 「別な〔違った〕ふうに」

☐ **with accuracy** 「正確に」(= accurately)

☐ **professional lie-catcher** 「嘘を見抜く専門家」

☐ **customs official** 「税関職員」

第3段落

誰が嘘をついており、誰がついていないかを決めるのが難しいのと同じく、何が嘘で何が嘘でないかを見分けるのも私たちがよくそう思っているよりはるかに難しい。「みな嘘をつく。毎日、毎時間、起きている時も、寝ている時も、夢の中でも、うれしい時も、悲しい時も。」とマーク・トウェインは書いている。

第4段落

まず、何かを言わ「ない」ことから成る嘘がある。あなたは妹と彼女のハンサムなボーイフレンドとともに食事に出かけ、彼のことを実に嫌な男だと感じる。そのあと、あなたと妹がその夜の話を話し合う時、あなたがレストランのことは話すのに、ボーイフレンドのことは何も話さないとしたらそれは嘘ということにならないだろうか。あるいは、彼の容姿のよさについては話すか、気に入らない性格については話さないとしたらどうだろう。

☐ consist of ~ 「～から成る」

☐ What if ...? 「…としたらどうだろう [どうなるだろうか]」

☐ offensive 「嫌な；不快な」

第5段落

次に、嘘だとわかっていることを言うことから成る嘘がある。これらの多くは私たちがお互いうまくやっていけるようにする無害な嘘だ。自分には使えない贈り物を受け取ったり、嫌いな同僚とのランチに誘われたりする時、あなたはもっと無情な事実ではなく、「ありがとう。最高だよ。」とか「行けるといいんだけど、歯医者予約があってね。」などとたぶん言うだろう。これらは私たちが子供たちにつくように教える嘘であり、礼儀と称する嘘である。隣人の機械的な「お元気ですか。」に対し、同じように機械的に「元気ですよ。」と答えることさえ、突き詰めれば嘘であることが多い。

☐ harmless 「無害な」 (⇔ harmful 「有害な」)

☐ co-worker 「同僚」

☐ when you get right down to it 「突き詰めれば」

第6段落

もっと深刻な嘘にはさまざまな動機や含意が含まれる。例えば、競争相手を首にするためにつく、彼の言動に関する嘘である。しかし、他の場合にはすべてが暴かれる必要のある嘘だというわけではない。私たち人間は活動的で創造的な動物であり、存在するものを存在しないかのように、また、存在しないものを存在するかのように表現することができる。隠すこと、遠まわしな言い方、沈黙、真つ赤な嘘——これらはすべて人間社会の平和を保つのに貢献しているのだ。

☐ a range of ~ 「さまざまな～；広範な～」

☐ motive 「動機」

☐ implication 「含意；言外の意味」

☐ get ~ fired 「～を首にする」

☐ uncover 「～を暴く；あらわにする」

☐ concealment 「隠すこと；隠匿」

☐ indirectness 「間接性；遠まわしに言うこと」

☐ outright 「まったくの；あからさまな」

第7段落

嘘のつき方を覚えるのは成長の重要な一部である。普通3～4歳ぐらいで^{▶2}子供が嘘をつけるようになるのは、彼らが心の理論、すなわち、自分の頭の中で起きていることは他人の頭の中で起きていることとは違うという考えを発達させ始めたからである。子供が初めて親に嘘をつくとき、両者間の力の均衡が少し変化する。今や子供は親の知らない何かを知っているからだ。新たな嘘をつくたびに、子供は自分の言うことを信じる人たちに対する影響力をまた少し増していく。しばらくすると、嘘をつく能力は彼らの感情的な世界の一部にすぎなくなる。

▶2 (第2文) 関係代名詞 what の用法; 同格の表現

What (S') makes (V') children (O') able to start telling lies (C'), ..., is that they have

S (関係代名詞 what が導く名詞節)

V C

begun developing a theory of mind, the idea that what goes on in their heads is ...

コンマをはさんで2つの名詞相当語句 (a theory of mind と the idea that ...) が並列された同格表現

同格の that 節「…という考え」

developing の目的語として同格の表現が二重に使われており、「心の理論、すなわち…という考え」の意。

☐ power balance 「力の均衡」

☐ emotional landscape 「感情的な世界」

第8段落

嘘はあまりにありふれたもので、すっかり日常生活や日常会話の一部となっているので、私たちは嘘についていることにほとんど気づかない。実のところ、多くの場合、嘘をつくより本当のことを言う方が人々には難しく、厄介で、ストレスがたまるであろう。人を欺くということは、結局のところ、より高度な知性の進化に絡む1つの特徴と言えないだろうか。

☐ be a part of ~ 「～の一部を成す」

☐ The fact is that ... 「実のところ…である」

☐ challenging 「困難な; 厄介な」

☐ stressful 「ストレスの多い」

☐ (be) associated with ~ 「～と関連〔関係〕する」

☐ intelligence 「知性; 知能」

第9段落

現在、アメリカ連邦政府によって、「対テロ戦争」における国家の安全保障レベルを向上させる手段として「信頼性評価」のための効果的な機械、言い換えれば、完璧な嘘発見器を開発しようという試みがなされている。しかしながら、国家をより安全にしようとするこの追求はまったく予期せぬ形で私たちの日常生活に影響を及ぼす可能性がある。その新たに開発される装置は、本当に危険な嘘と害のない善意の嘘、あるいは危険性のない利己的な嘘をどうやって見分けることができるのだろうか。▶嘘を見抜ける装置がテロとの戦いだけでなく、就職のための面接や税務調査や教室や寝室など、国家の安全とはほとんど何の関係もない場面でも自分の傍にあることに気がつく、などということになったらいったいどうなるのか。

▶3 (第4文) 〈find + O + C〉

What happens / if one day we find ourselves with instruments (that can detect untruth

S V O C

〈find + O + C〉「～が…であると気づく」のCがwith ~ の前置詞句になった形

(not only in the struggle against terrorism but also in situations that ...)?

not only A but also B 「AだけでなくBも」

☐ credibility 「信頼〔信用〕性」

☐ assessment 「評価; 判断」

☐ lie detector 「嘘発見器」

☐ quest 「追求; 探求」

☐ have implications for ~ 「～に影響〔示唆〕を与える」

☐ self-serving 「利己的な」

☐ instrument 「装置; 機器」

☐ tax inspection 「税務調査」

第10段落

完璧な嘘発見装置は私たちの日常生活を混乱させるだろう。やがて私たちはお互いに話すのをやめ、テレビは廃止され、政治家は逮捕され、文明は止まってしまうことになる。装置がうまく機能しない場合にどうことになるか——この危険には私たちは考え慣れているのだが——だけでなく、それが機能する場合にどうなるかも含めて、よく考えないうちにそのような装置を性急に市場に出すのは間違いであろう。⁴ 誰が誰に嘘をついているのかよくわからない不確かな世界に住むよりさらに悪いかもしれないのは、どこに嘘があるかがはっきりわかってしまい、その結果、私たちがお互い真実のみを話さざるを得ない世界に生きることだ。

▶4 (第4文) 倒置構文 〈C + V + S〉

Worse than living in a world (filled with uncertainty), (in which we can never know ...),
C ↑↑ |
might be to live in a world (filled with ...), (thus forcing us to ...).
V S ↑↑ |

補語の worse than ... が強調のため文頭に置かれ、〈S (to live ...) + V (might be)〉の語順が倒置された形。日本語訳上は「…な世界に生きるよりさらに悪いのは、～な世界に生きることだ」とするとよい。

- ☐ lie-detection device = lie detector
- ☐ turn ~ upside down 「～をひっくり返す；混乱させる」

- ☐ come to a halt 「止まる；停止する」 (= stop)
- ☐ **uncertainty** 「不確かさ；不確実性」
- ☐ **nothing but** ~ 「～だけ；～以外の何もない」

● 序論

① (ℓ. 1) When people hear that ..., they're quick to tell me **how to catch a liar**.

▶ 嘘を見抜く方法についてはいろいろな意見がある。

② (ℓ. 15) ... even **the experts** would have been **right almost as often if they had just tossed a coin**.

▶ しかし、専門家でさえ嘘を見破るのは難しい。

③ (ℓ. 17) ... it is also much more difficult than we tend to think **to tell what is a lie and what is not**.

▶ さらに、何が嘘で何が嘘でないかを見分けるのもまた難しい。

● 本論

④, ⑤, ⑥ (ℓ. 39) ... **all contribute to the peace-keeping of the human community**.

▶ いろいろな嘘があるが、それらは人間社会の平和維持に役立っている。

⑦ (ℓ. 40) Learning to lie is **an important part of growing up**.

▶ 嘘をつけるようになるのは子供の成長の証である。

⑧ (ℓ. 48) Lying is just so ordinary, ... (ℓ. 49) ... it would be more difficult, ... **for people to tell the truth than to lie**.

▶ 嘘は私たちにとって極めて日常的なもので、嘘をつくより真実を述べる方が困難である。

⑨ (ℓ. 53) At present, attempts are being made ... to develop ... **a perfect lie detector, ...**

▶ 現在、完璧な嘘発見器を開発しようという試みが進行している。

● 結論

⑩ (ℓ. 70) **Worse than living in a world filled with uncertainty, ..., might be to live in a world filled with certainty about where the lies are, ...**

▶ 嘘の多い世界に生きるより、嘘がすぐにわかってしまい本当のこと以外言えない世界に生きる方が恐ろしい。

要約

嘘は人間にとって日常的なもので、嘘をつくより真実を述べる方が困難である。私たちはいろいろな種類の多くの嘘をつくが、それがいちいち明かされないからよい人間関係や社会の平和が保たれているという側面もある。(100字)

13 科学的な説明とは？

問題編 p.50

科学的な説明とはどのようなものなのだろうか。アメリカの哲学者カール・ヘンペルが提唱したモデルを参考にその特性を考えてみよう。

● 解答 < 正しい答えをチェック >

- 1 (a) A (b) A (c) B (d) B
 2 (C) (h) (D) (g)
 3 (あ) D (い) G (う) A (え) B
 (お) C (か) F (き) E

● 解説 < 考え方をチェック >

1 文脈の把握

- (a) 「物体（というもの）の加速度はその質量に反比例する」
 (b) 「すべての金属は電気を通す」
 (c) 「私の机の上の植物は葉緑素を含んでいる」
 (d) 「この金属片は電気を通す」

(A) general laws「一般法則」と(B) particular facts「特定の〔個別的な〕事実」を見分ける。(a), (b)が物理の法則なのに対し, (c), (d)が特定の物に関する記述で「一般的事実」でないことは容易にわかるだろう。

2 文脈の把握

- (e) 「一貫した」 (f) 「矛盾した」 (g) 「寛大な」 (h) 「厳密な」

図解

These counter-examples fall into two classes.

On the one hand, there are cases of genuine scientific explanations that do not fit the covering law model, even approximately. These cases suggest that Hempel's model is too (C) — it (=Hempel's model) excludes some bona fide (=genuine) scientific explanations.

On the other hand, there are cases of things that do fit the covering law model, but intuitively do not count as genuine scientific explanations. These cases suggest that Hempel's model is too (D) — it allows in things that should be excluded.

第10段落第2文に「被覆法則モデルの反例は2種類ある。」とあり, (C), (D)の空所はその2種類についての説明文中にある。(C)を含む反例は, 「真正な科学的説明なのに被覆法則モデル

に合わない場合がある」←「いくつかの真正な科学的説明を排除している」とある。排除しているということは「ヘンペルのモデルは(h)厳密すぎる」からと考えられる。(D)を含む反例は、「被覆法則モデルに実にぴったり合うのに真正な科学的説明とみなされない場合がある」←「排除されるべきものが含まれるのを許容している」とある。それは「ヘンペルのモデルは(g)寛大すぎる」からという流れが適当。

- (e)「一貫した」はここでは被覆法則モデルの反例の内容を述べているのだから考えられない。
(f)「矛盾した」という形容詞はまったく使えないわけではないが、(C)、(D)ともそうなので不可。

3 文脈の把握

長い文章の文補充問題であるが、選択肢文の冒頭には共通点がある。すなわち、A～Cは For example, D Thus も = For example で「例えば」、E～Gは To illustrate 「具体的に〔わかりやすく〕言えば」で始まっている。ここから選択肢文はすべて、空所の前で述べられたことの例示・具体例であることがわかる。各選択肢の意味は全訳中の下線部を参照。

- (a) 直前の「(科学的説明の)結論 (conclusion) とは説明を必要とする現象が実際に生じることを述べるもので、前提 (premiss(es)) とはその結論がなぜ正しいかを教えてくれるものだ」の具体例として続くもの。第②段落では「科学的説明は『説明を求めるなぜ質問』に対して与えられる」とあり、**explanation-seeking why question** という表現が2度使われている。この表現を含む D に着目すると、D「例えば、砂糖はなぜ水に溶けるのかと誰かが問うでしょう。これは説明を求めるなぜ質問である」とある。そのあとに「砂糖は水に溶ける」という結論と「その結論がなぜ正しいのかを教える前提」を有する議論の構築の必要性について述べられていることから、D が空所(a)の直前の文の具体例だとわかる。また、D の最終文 That was **the problem** Hempel set himself. が、次の第④段落冒頭の Hempel's answer to the problem ... にもうまくつながる。

- (i) 空所(i)の形から、第⑤段落全体を成す内容が入ることがわかる。直接ヒントとなるのは空所のあと、第⑥段落第4文 In the example above, it was a particular fact — **the death of my plant**. 「上の例では、特定の事実——私の植物の枯死であった」で、ここから G「具体例を挙げるなら、例えば私が自分の机の上の植物がなぜ枯れてしまったのかを説明しようとしているでしょう」が「上の例」として適当であることがわかる。続く G の文でも、前の第④段落で述べられ、あとの第⑥段落で図式化されているヘンペルの3部構成の説明方法がこの「私の植物の枯死」に沿って順を追って解説されており、空所に入る文として適当。

- (u) 直前の But sometimes the things we want to explain are **general**. 「しかし、説明したいものが一般的なものの場合もある」から、a particular fact であった(i)ー G とは対照的に a **general law** の例が述べられると推測できる。これにあたるのは A「日光にさらされると

なぜ皮膚がんになるのか」の説明で、このことは A の第 2 文で「これは一般法則であり特定の事実ではない」と述べられていることから判断できる。したがって、A が正解。

- (え) 空所(え)の直前で「科学的説明がヘンペルの説明パターンに合致するケースは極めて多い」とあることから、空所にはヘンペルの説明パターンと合っているケースの例が入ると考えられる。B の第 2 文に「ニュートンの説明はヘンペルのモデルにぴったり一致している」とあり、「なぜ惑星が楕円を描いて太陽の周りを回るのかについてのニュートンの説明」を述べた B が当てはまりそうである。第⑦段落の第 4 文 **For showing that a phenomenon is a consequence of a general law does in a sense take the mystery out of it** (ある現象が一般法則から導かれる結果であることを示すこと = 実際にその現象から秘密性を取り去ること) を具体例で示したのが、B 最終文の After Newton, ... であることから、文脈が通る。

- (お) Hempel was aware that **not all scientific explanations fit his model exactly**. 「ヘンペルはすべての科学的説明が自分のモデルにぴったり適合するわけではないことには気づいていた」という出だしから、ヘンペルの科学的説明モデルに必ずしも適合しない具体例が続くはずで、これは「なぜアテネはいつもスモッグに覆われているのか」を説明した C が該当する。この質問に対する答え「それは車の排気ガス汚染のためだ」は立派な科学的説明ではあるが、そこには何ら法則が含まれていない。この点がヘンペルモデルに適合しない部分であるが、そのあとには「しかし、その説明が細部にわたって詳細に説明されたとしたら、そこには法則が登場することになるだろう」と続いている。

- (か) 第⑨段落では「説明と予測は表裏一体 (two sides of the same coin) を成すもので、被覆法則の説明で使われる法則と特定の事実によって、ある現象が起こることを、その現象について前もって知らなくても予測できる」というヘンペルの見解が説明されている。その具体例としては、「ニュートンは、ケプラーの法則を知らなかったとしても、彼の重力の法則からそのことを予測できたであろう」と述べられている F が適切。また、F の最終文中にある every scientific explanation is potentially a prediction 「あらゆる科学的説明は潜在的には予測である」と対応するものが、空所直後の every reliable prediction is potentially an explanation であり、文脈も通る。

なお、F の出だし部分の To illustrate, consider **again** Newton's explanation of ... に注意。選択肢 B に For example, Newton explained why ... とあるのだから、7 つの空所のどこかに B が先に入り、F があとになることはこの again から明らかである。

- (き) 残る選択肢は E のみで、今度は(か)と逆の関係、すなわち every reliable prediction is **potentially an explanation** 「信頼できる予測はすべて潜在的には説明である」の具体例として問題ないかどうかを確認する。E には「その生息地の破壊に関する情報を前提に、マウ

ンテンゴリラは2010年までに絶滅するだろうと科学者が予測し、そのとおりになったら、その予測に用いた情報は、ゴリラが絶滅してしまったあとにその同じ事実を説明するのにも役立つ」と書かれており、適切である。

● 全訳 英文内容をチェック

第1段落

正確に言って科学的説明とはどのようなものだろうか。ある現象が科学によって「説明」され得るとは正確にはどういう意味なのだろうか。これはアリストテレス以来、さまざまな哲学者を悩ませてきた問題であるが、私たちの出発点は1950年代にアメリカの哲学者カール・ヘンペルによって提唱された科学的説明の有名な解説になるだろう。ヘンペルの解説は「被覆法則モデル（カパー法則モデル）」として知られているが、その理由はこれから明らかになるだろう。

- | | |
|---|--|
| ☐ phenomenon「現象」（複数形は phenomena） | ☐ account「解説；説明記述」 |
| ☐ exercise「～を悩ます」 | ☐ put forward「～を提案〔提出〕する」 |

第2段落

被覆法則モデルの背景にある基本概念はわかりやすいものである。ヘンペルは、科学的説明が普通、彼が「説明を求めるなぜ質問」と呼ぶところのものに応じて与えられることに言及した。例えば「地球はなぜ完全に丸くないのか？」とか、「どうして男性より女性の方が長生きするのか？」というような類の質問があるが、これらは説明を要求するものである。かくして、科学的説明を与えることとは、説明を求めてなぜと問う質問に対して満足な答えを与えるということになる。そうした答えに必ず含まれる本質的特性を究明することができれば、科学的説明とは何かがわかるだろう。

- | | |
|---|---|
| ☐ straightforward「わかりやすい」 | ☐ satisfactory「満足のいく」 |
| ☐ in response to ～「～に応じて〔応えて〕」 | ☐ determine「～を見つけ出す」（= find out） |
| ☐ spherical「球状〔形〕の」（= round） | ☐ essential feature「本質的特性」 |
| ☐ and the like「～など；そういったようなもの」 | |

第3段落

科学的説明には概して議論に論理的構造がある、すなわち、一連の前提があってそのあとに結論がくるとヘンペルは述べた。結論とは説明を必要とする現象が実際に生じるということを述べるもので、前提とはその結論がなぜ正しいかを私たちに教えてくれるものだ。例えば、砂糖はなぜ水に溶けるのかと誰かが問うとしよう。これは説明を求めるなぜ質問である。ヘンペルが言うには、この質問に答えるためには、「砂糖は水に溶ける」という結論と、この結論がなぜ正しいのかを私たちに教える前提を有する議論を構築しなければならない。科学的説明の解説をするという仕事は、そうなると、一連の前提が結論の説明とみなされるように、両者の間に保たれねばならない関係を正確に述べる仕事になる。それが、ヘンペルが自らに課した問題であった。

- | | |
|--|--|
| ☐ typically 「概して；一般的に」
☐ i.e. (ラテン語 <i>id est</i> [= <i>that is</i>]) 「すなわち；言い換えれば」
☐ premiss 《英》 (= <i>premise</i>) 「前提」
☐ followed by 「～(続いて [そのあとに]) ～がくる」
☐ construct 「～を構築する；組み立てる」 | ☐ dissolve 「溶ける」
☐ characterize 「～ (の特徴) を述べる」
☐ in order for ～ to do 「～が…するために」
☐ the former 「前者」 ⇔ the latter 「後者」
☐ count as ～ 「～とみなされる」 (= <i>be accounted</i>) |
|--|--|

第④段落

この問題に対するヘンペルの答えは3部から構成されていた。第1に、前提は結論を伴っていなければならない、すなわち、議論は演繹的なものでなければならない。第2には、前提となるものはすべて事実でなければならない。第3に、前提は少なくとも1つの一般法則から成るものでなければならない。一般法則とは、例えば「物体の加速度はその質量に反比例する」、「すべての金属は電気を通す」などであり、これらは「私の机の上の植物は葉緑素を含んでいる」、「この金属片は電気を通す」などといった特定の事実とは対照を成す。一般法則は「自然法則」と呼ばれることもある。ヘンペルは、科学的説明は一般法則だけでなく特定の事実にも働きかけることができると認めたが、彼は一般法則が常に少なくとも1つはあることが必須だと考えた。▶1 そういうわけで、ヘンペルの構想に基づいてある現象を説明するということは、その現象が、おそらくは他の法則、及び／あるいは特定の事実にも補足されたある一般法則から演繹的に生じることを示すということになる。そして、それらの法則も事実もみな真実でなければならない。

▶1 (第8文) 名詞を修飾する過去分詞；〈～, all of which〉

So to explain a phenomenon, (on Hempel's conception,) is to show [that] its occurrence follows deductively from a general law, perhaps supplemented by other laws and/or particular facts, all of which must be true.

S
V
C

「補足された」→①

→②

① perhaps supplemented by 以下は a general law を修飾している。

② all of which は a general law と other laws and/or particular facts を先行詞とし、「そういった法則も事実もみな…」という補足説明をしている。

- | | |
|--|---|
| ☐ three-fold 「3部から構成される」
☐ entail 「～を伴っている」
☐ deductive 「演繹的な」(⇔ <i>inductive</i> 「帰納的な」)
☐ body 「物体」
☐ acceleration 「加速度」
☐ vary inversely 「反比例する」(⇔ <i>vary directly</i> 「正比例する」) | ☐ conduct electricity 「電気を通す」
☐ contrast with ～ 「～と対照を成す」
☐ chlorophyll 「クロロフィル；葉緑素」
☐ conception 「構想；概念」
☐ occurrence 「発生」 |
|--|---|

第5段落

④具体例を挙げるなら、例えば私が自分の机の上の植物がなぜ枯れてしまったのかを説明しようとしているとしよう。おそらく私は次のような説明をするだろう。私の書齋が薄暗いため、日光がその植物にまったく当たっていなかった。しかし、日光は植物が光合成するために必要である。そして、光合成なしに植物は生存に必要な炭水化物を作ることができないので、枯れてしまうことになる。したがって私の植物は枯れたのだ、と。この説明はヘンベルのモデルにぴったり当てはまる。それは2つの真の法則——光合成には日光が必要であり、かつ光合成が生存に必要なこと——と、1つの特定の事実——その植物がまったく日光を得ていなかったこと——からの演繹で、私の植物の枯死を説明しているからだ。▶2 2つの法則と特定の事実の真実を前提として、私の植物の枯死は必然的に生じたのであり、だから前者が後者のわかりやすい説明となっているのだ。

▶2 (第6文) given ~ の用法

Given the truth of the two laws and the particular fact, the death of the plant

「2つの法則と特定の事実の真実を与えられて」→「～を前提として」

had to occur; ...

「必然的に生じた」

※ given ~ はここでは「根拠」を表すが、「…と仮定すると(if …)」や「…を考えると (considering …)」の意味で用いられることも多い。

- ☐ study 「書齋」
- ☐ photosynthesize 「光合成する」; photosynthesis 「光合成」

- ☐ carbohydrate 「炭水化物」
- ☐ constitute 「～を構成する」

第6段落

図式的に示すと、ヘンベルの説明モデルは次のように書けるだろう。

一般法則

特定の事実

⇒

説明されるべき現象

説明されるべき現象は「被説明項 (エクスプラナandum)」と呼ばれ、説明を行う一般法則と特定の事実は「説明項 (エクスプラナans)」と呼ばれる。被説明項それ自体は特定の事実か一般法則のいずれかということになるだろう。上の例で言えば、特定の事実——私の植物の枯死であった。しかし、説明したいものが一般的なものの場合もある。図例えば、日光にさらされるとなぜ皮膚がんになるのか説明したいと思うことがあるかもしれない。これは一般法則であり特定の事実ではない。それを説明するためには、その問題をさらに基本的な法則——おそらくは、太陽光中の放射線量についての特定の事実と合わせて、放射線が皮膚の細胞に及ぼす影響についての法則——から演繹する必要があるだろう。したがって科学的説明の構造は、被説明項、すなわち私たちが説明しようとするものが特定のものであれ一般的なものであれ、本質的には同じである。

- ☐ schematically 「図式的に; 概略的に」
- ☐ explanandum 「エクスプラナandum; 被説明項」
- ☐ do the doing 「…する」
- ☐ explanans 「エクスプラナans; 説明項」

- ☐ exposure (to ~) 「(～に) さらされること」
- ☐ presumably 「おそらく; たぶん」
- ☐ impact 「影響 (力)」
- ☐ radiation 「放射線」

第7段落

ヘンベルのモデルがなぜ説明の被覆法則モデルと呼ばれるのかを理解するのは容易である。というのも、このモデルによれば、説明の核心は、説明されるべき現象がある一般的な自然法則に「覆われて」いることを示すことにあるからだ。この考え方には確かに魅力的なものがある。▶³ なぜなら、ある現象が一般法則から導かれる結果であることを示すのは、ある意味で実際にその現象から秘密性を取り去ることであり、それをよりわかりやすいものにするからだ。そして実際、科学的説明がヘンベルの説明パターンに合致するケースは極めて多いのだ。回例えばニュートンは、なぜ惑星が楕円を描いて太陽の周りを回るのかを、それが彼の万有引力の法則にいくつかのささいな仮説を加えて演繹できることを示すことによって説明した。ニュートンの説明はヘンベルのモデルにぴったり当てはまる。すなわち、自然法則といくつかの付加的な事実を前提に、ある現象が必然的にそうなることを示す形で説明されているのだ。ニュートン以降、なぜ惑星の軌道が楕円形なのかに関する謎はもはや存在しなくなった。

▶³ (第4文) 強調の do ; it が指すもの

For showing that a phenomenon is a consequence of a general law **does**

S

強調の do 「実際に…する」

(in a sense) **take the mystery out of** ① **it** — ② **it** renders ③ **it** more intelligible.

V

O

① = the phenomenon

③ = the phenomenon

② = showing that ...

- ☐ **essence** 「核心」
- ☐ **render** OC 「O を C な状態にする」
- ☐ **intelligible** 「わかりやすい；明瞭な」

- ☐ **along with** ~ 「～と一緒に；～に加えて」
- ☐ **orbit** 「軌道」

第8段落

ヘンベルはすべての科学的説明が自分のモデルにぴったり適合するわけではないことに気づいていた。回例えば、もしなぜアテネはいつもスモッグに覆われているのかと誰かにたずねれば、おそらく「車の排気ガス汚染のため」という返事があるだろう。これは完全に許容できる科学的説明であるが、ただ、そこには何らかの法則に関する言及がまったく含まれていない。しかし、ヘンベルなら、その説明が細部にわたって詳細に説明されれば、隠れていた法則が姿を現すことになるだろうと言うだろう。たぶん、「地球の大気中に一酸化炭素が十分な濃度で放出されると、スモッグ煙ができる」といったような法則があるのだ。なぜアテネはスモッグまみれなのかについての完全な説明には、車の排気ガスには一酸化炭素が含まれる、そしてアテネには非常に車が多いという事実とともにこの法則が引用されるだろう。▶⁴ 実際には、私たちはよほど学者ぶったりしていない限り、これほど細かに説明しようとはしないだろう。しかし、仮に細かに説明しようとするのであれば、この説明は被覆法則のパターンに立派に一致することだろう。

▶ 4 (第7, 8文) 実現性の乏しい仮定を表す <if S be to do>

In practice, we wouldn't spell out ~

「実際には、私たちは～を詳しく説明しようとはしないだろう」

But if we **were to spell** it out, it would ...

「しかし、仮に細かに説明しようとするのであれば、それは…だろう」

→ <if S be to do> の形で未来の実現性が乏しい仮定を表す。

- ☐ be immersed in ~ 「～に浸されている; ~でいっぱいである」
- ☐ exhaust pollution 「排気ガス汚染」
- ☐ **acceptable** 「許容できる」
- ☐ **mention** 「言及」
- ☐ in full detail 「すべて詳細に; 網羅的に」
- ☐ picture 「事態; 状況」
- ☐ carbon monoxide 「一酸化炭素」 (cf. carbon

- dioxide 「二酸化炭素」
- ☐ in sufficient concentration 「十分な濃度で」
- ☐ be bathed in ~ 「～にまみれて〔浸されて〕いる」
(= be immersed in ~)
- ☐ cite 「～を引用する; 引き合いに出す」
- ☐ **in practice** 「実際には」
- ☐ **correspond to** ~ 「～に一致する」

第9段落

ヘンベルは説明と予測の関係について、彼のモデルから興味深い哲学的帰結を引き出した。彼は、この2つは表裏一体だと主張した。私たちが有る現象について被覆法則による説明をする時にはどんな場合でも、引き合いに出す法則と特定の事実によって、仮にその現象について前もって知らなかったとしても、その現象が起こることを予測することが可能だったであろうというのだ。[図]具体例として、惑星の軌道がなぜ楕円形であるのかについてのニュートンの説明をもう一度考えてみよう。この事実は、ニュートンが重力の法則を用いてそれを説明するずっと以前から知られていた——それはケプラーによって発見されたのだ。しかし、それが知られていなかったとしても、ニュートンは彼の重力の法則からそのことを予測できていたであろう。というも、彼の理論はちょっとした付加的な仮説を前提に、惑星の軌道が楕円形であることを内包しているからだ。ヘンベルはこのことを次のような言葉で表現した。あらゆる科学的説明は潜在的には予測である——それは、問題となっている現象を、それが知られていなかったとしても予測するのに役立ったであろうから。その逆もまた正しい、とヘンベルは考えた。つまり、信頼できる予測はすべて潜在的には説明なのだ。[図]具体例として、科学者たちがその生息地の破壊に関する情報を前提に、マウンテンゴリラは2010年までに絶滅するだろうと予測したとしよう。そしてその結果、彼らは正しかったとしよう。ヘンベルに言わせれば、マウンテンゴリラが絶滅する前に彼らがその予測に用いた情報は、ゴリラが絶滅してしまったあとでその同じ事実を説明するのに役立ったであろうということになる。説明と予測は構造的には対称を成しているのだ。

- ☐ philosophical 「哲学的な; 哲学上の」 ([図] philosophy 「哲学」)
- ☐ **prediction** 「予測」
- ☐ two sides of the same coin 「同じコインの表裏: 表裏一体の問題」
- ☐ **serve to do** 「…するのに役立つ」
- ☐ had it not already been known (= if it had not

- already been known) if が省略されて、<had + S> の倒置が起こった仮定法過去完了の形。
- ☐ converse 「逆の; 反対の」 the converse 「逆 (のこと)」
- ☐ **habitat** 「生息地; 生息環境」
- ☐ symmetric 「対称的な」

被覆法則モデルは多くの実際の科学的説明の構造を実にうまくとらえているが、いくつかの厄介な反例にも直面している。これらの反例は2種類に分かれる。一方には、真正な科学的説明なのに被覆法則モデルにおおよそでさえ合わない場合がある。これらの事例はヘンペルのモデルが厳密すぎることを示唆している——それはいくつかの真正な科学的説明を排除しているからだ。他方には、被覆法則モデルに実にぴったり合うにもかかわらず、直感的に真正な科学的説明とはみなされない事象の場合がある。これらの事例はヘンペルのモデルが寛大すぎることを示唆している——それは排除されるべきものが含まれるのを許容しているからだ。

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ☐ awkward 「厄介な」 ☐ counter-example 「反例；反証」 ☐ fall into ～ 「～に分類される；分かれる」 ☐ class 「種類」 ☐ approximately 「おおよそ；だいたい」 | <ul style="list-style-type: none"> ☐ exclude 「～を排除する」 ☐ intuitively 「直感〔本能〕的に」 ☐ allow in ～ 「～が入る〔ある〕のを許容する」
allow in の ‘～’ が長いので後置された形。 |
|--|--|

読解 PLUS+ ONE パラグラフ展開を確認しよう

● 導入

① (ℓ. 1) What exactly is **scientific explanation**?

▶ 科学的説明とはどのようなものか。

● 本論

② (ℓ. 11) **To give a scientific explanation is thus to provide a satisfactory answer to an explanation-seeking why question.**

▶ ヘンペルによると、科学的説明とは説明を求める質問に対して満足の答えを与えることである。

③ (ℓ. 15) Hempel suggested that scientific explanations typically have **the logical structure of an argument, i.e. a set of premisses followed by a conclusion.**

▶ 普通、科学的説明には、前提のあとに結論がくるという論理的構造がある。

④ (ℓ. 21) Hempel's answer to the problem was three-fold.

▶ ヘンペルによる、前提と結論との関係。

⑤ (ℓ. 32) ..., suppose I am trying to explain why the plant on my desk has died.

▶ ④の具体例の提示（「(筆者の) 机の上の植物の枯死」）。

⑥ (ℓ. 35) Schematically, Hempel's model of explanation can be written as follows:

General laws / Particular facts

⇒ **Phenomenon to be explained**

▶ ヘンペルの説明モデルを図式化すると、「一般法則＋特定の事実⇒説明されるべき現象」となる。

《ヘンペルの説明モデルへの評価》

7 (ℓ. 52) ... the essence of explanation is to show that the phenomenon to be explained is 'covered' by some general law of nature.

▶説明の核心は、説明されるべき現象がある一般的な自然法則に「覆われて」いることを示すことにある。

8 (ℓ. 60) Hempel was aware that not all scientific explanations fit his model exactly.

▶すべての科学的説明がヘンペルのモデルにぴったり適合するわけではない。

9 (ℓ. 64) He argued that these(=explanation and prediction) are two sides of the same coin.

▶説明と予測は表裏一体の関係にある。

● 結論

10 (ℓ. 75) Though the covering law model captures the structure of many actual scientific explanations quite well, it also faces a number of awkward counter-examples.

▶被覆法則モデルは科学的説明の多くの構造をうまくとらえている反面、厄介な反証にも直面している。

要約 ヘンペルモデルによると、科学的説明の核心は説明されるべき現象がある一般的な自然法則に「覆われて」いることを示すことにあるとする。彼の説明モデルは科学的説明の多くの構造をうまくとらえているが、反証もある。(101字)

14 貧富の格差と社会問題

問題編 p.56

昨今、いわゆる「先進国」に関して「格差社会」という言葉がよく使われる。経済的な格差は避けがたくさまざまな社会問題と結びつくが、その格差はどのようにして生じたのだろうか。

● 解答 ◀ 正しい答えをチェック

- ① 1 J 2 F 3 B 4 I 5 H 6 C 7 G 8 E
 ② 1 B 2 B 3 B
 ③ 1 D 2 E 3 C
 ④ D

● 解説 ◀ 考え方をチェック

1 内容の把握

「第①段落から第⑧段落に関する以下の文を完成するのに最も適切なものを選びなさい。」という設問。各文の出だしは「第●段落で著者は主として…」で、述部が選択肢となっている。各文に「the writer mainly」とあるので、正解は各段落の主旨に絡む内容である点をまず押さえておこう。解答は、選択肢の順に該当段落をチェックしていく方法もあるし、該当する段落のわかりやすいものから解答して選択肢を減らしていく方法もあるが、8段落全体に対して、誤ったもの4つを含む12の選択肢が与えられる形式なので、読解の際に各段落のキーセンテンスやキーワードと思える表現や語句に印をつけたり、その内容を段落横の余白に短くメモしておくなど、何らかの手引きを残しておく工夫が必要である。解説は選択肢の順に行う。

A 「スカンジナビア諸国と南ヨーロッパの社会は、所得に関しては米国と英国の社会ほど平等ではないと述べている。」

第②段落第5文参照。ここには「スカンジナビア諸国と南ヨーロッパの社会ではその特色（貧富の差が少ないこと）が残り、反面、北米や大英帝国の国々では長年の階級区別が続いた」とあり、本文内容と矛盾する。

B 「英国と米国は自国の経済活動に対する規制や制限の撤廃を他国より踏み込んで行ってきたと主張している。」

第③段落第3, 4文参照。第3文には「米国と英国は規制緩和と市場資本主義を熱狂的に求める中心国だ」、第4文には「何十年にもわたる社会立法と経済監視を解体するのに30年も揺るぎない献身を続けた点で、この両国にかなう国などどこにもない」とあり、本段落の主旨に一致する。

C 「貧富の格差と、人々の心理的健康、及び、進んで他人を信頼したい気持ちは関係すると結論づけている。」(a connection **between** (A) the gap between rich and poor and (B)

both the ... で「A と B の関係」の意味)

第⑥段落参照。段落全般にわたって「所得格差とその悪影響」について書かれているが、第2文には「米国と英国では精神疾患の発生率が所得と密接に関連している」、第3文には「同胞に対する信用や信頼でさえ、所得差との好ましくない一致が見られる」という記述があり、主旨に一致する。

D 「ウォールマートの ~~x~~ CEO の年収は米国の下層階級の1億2000万人の人々の年収に相当すると説明している。」

第④段落第4文にこれに似た記述が見られるが、正しくは「ウォールマートの CEO → 創業者一族」である。また、仮にここが正しくても、これは近年の米国の所得格差の大きさをわかりやすく説明するための一例であって、本段落の主旨となるようなものではない。

E 「今日の若者が個人的な富を追及するよう育てられたことを遺憾に思い、上の世代は違っていと述べている。」

第⑧段落参照。第5文からは「物質的な豊かさの追求に取りつかれ、その他の多くのことには無関心な世代を育ててしまった」ことへの筆者の後悔の念が読み取れ、続く第6文には「いつもこうだったわけではない」という記述があり、本段落の主旨に絡む。

F 「貧富の所得格差を縮めた政策を列挙し、かつてこれらの政策は人口比率の増加によって支持されたと主張している。」

第②段落参照。第3文 Thanks to 以下に「累進課税」をはじめ「貧富の格差を縮めた政策」が列挙されており、選択肢文の前半は一致する。後半の「かつてこれらの政策は人口比率の増加によって支持された」がこの段落のどこと照応するのかわからないが、前半部が一致していることを踏まえて文脈をたどると、おそらく段落最後の文 But each in its own way was affected by the growing intolerance of ... 「各国ともそれぞれ過度の不平等に対する不寛容の高まりに影響され、個人の不足を補うため公的支給に着手し始めた」だと考えられる。つまり、「人口増加に伴って人々の不平等に対する不満も高まり、それに対処するためにこうした政策が続けられた」状況を「これらの政策が人口比率の増加によって支えられた」という簡略な表現で表したものと解釈すればそれなりに一致すると言えるだろう。厳密に言えば両者の意味には開きがあるが、特に難関私大の入試ではこの種の「難問」に出会うことはまれではない。対策としては、「その他の段落に一致する選択肢と誤りの選択肢をすべて確認するまで正誤の判断を保留する」という消去法をとることである。結果的には第②段落に一致すると思える選択肢はこれしかない。

G 「ある国の貧富の格差が大きければ大きいほど、その国の貧困からくる否定的な結果もそれだけ悪化すると主張している。」

第⑦段落参照。前半部には米国と英国で顕著な多くの社会問題が取り上げられているが、その理由として第3文に「貧富の格差が大きければ大きいほど社会問題はそれだけ悪化する」とあるので、この段落内容に一致する。

H 「英国と米国で貧困の度合いが増したための否定的な結果の多くを概説している。」

第⑤段落参照。第1文に The consequences are clear. とあり、「その結果」とは前の段落で述べられている「米国と英国で貧困の度合いが増したこと」の結果を指す。第4文には「圧倒的多数にとっての経済的不利」として、「不健康」をはじめとする negative outcome が多く紹介されており、一致する。

- I 「1970年代以降、英国と米国で不平等が大きく広がったいくつかの例を挙げている。」

第④段落参照。前半は米国の巨大企業の CEO とその平均的な従業員の給与格差が1968年と2005年ではどのくらい広がったかが例示され、後半最後の2文には、「1973年以来、手取り給与の不平等は米国を除くどの国より英国で高まり、1977年から2007年までに生み出された新しい仕事のほとんどが給与水準の最上限か最下限のいずれかであった」とあり、一致する。

- J 「金持ちは以前より今の方がもっと金持ちになり、金融取引が他の産業よりも高く評価されると述べている。」

第①段落参照。「現在、金持ちは以前よりもっと金持ちになっている」ことについては第1, 2文、および第5文から明白である。「金融取引」に関しては第3文に「個人資産の源として金融取引が商品やサービスの生産に大きく取って代わった」と書かれており、いずれも一致する。

- K 「米国はフィンランドとスウェーデンで達成されたレベルまで平均寿命を伸ばすために、x医療にもっとお金を使う必要があることを示唆している。」

第⑦段落最終文参照。ここは「米国は医療に莫大な額を費やすが、その平均寿命はかなり低い」という批判的な内容になっており、一致しない。

- L 「第二次大戦終了直後からの数十年間に、x金持ちになりたいという願望がヨーロッパ社会で広まったと書いている。」

第⑨段落第2文参照。ここには「戦後の数十年間は富そのものへの相対的な無関心が広まった」とあり、続く第3文ではそれを裏づける「1949年に行われた英国の男子生徒に対する意識調査」が紹介されている。したがって一致しない。

2 内容の把握

「次の各文を完成させる場合、本文の内容に合致しないものを1つ選びなさい。」という設問。

- 1 「富裕層は」

A 「20世紀初頭以来のどの時期よりも今日、他の人々に比べ著しく豊かになっている。」

B 「社会的不平等を減らすために策定された政府の政策をますます支持するようになっている。」

C 「今は、人々が買いたいものを生産するというより、金融部門でお金を稼ぐ傾向にある。」

D 「必ずしも必要のないものを買うことに多くのお金を費やしている。」

E 「その後の社会に比べると、極端な不平等に対してもっと厳しい社会にかつては暮らしていた。」

A は第①段落第1文、C は第3文、D は第2文、E は第②段落最後の文に一致するが、B の意味の記述は本文中にはない。

2 「英国と米国では、貧しい人々は」

A 「欧州大陸の国々の1つに住む人たちより精神疾患をわずらう可能性が高い。」

B 「犯罪行為、違法薬物使用、十代の妊娠など非常に多くの社会問題の原因である。」

C 「十分な教育や高給の仕事を得て、貧困から抜け出すのが困難な状況にある。」

D 「所得の高い人に比べ健康を害することが多く、また平均寿命も短い。」

E 「30年前はその社会の他の人々と比べ、今ほど貧しくなかった。」

B 第⑤段落や第⑦段落からわかるように「多くの社会問題の原因」となっているのは「貧しい人々」ではなく「貧困」である。A は第⑥段落第2文、C、D は第⑤段落全体、E は第②段落第2文参照。

3 「1970年代以降」

A 「かつて英国、米国社会で不平等を減らす助力となった政策が次第に放棄された。」

B 「知的な若者は高給の仕事より興味深い仕事をする方がよいと考えるようになった。」

C 「米国では会社の取締役と同じ会社の普通の従業員との給与格差がさらに拡大した。」

D 「英国で生み出された新しい仕事のほとんどは収入分布の両極に位置している。」

E 「英国と米国では人々の価値観が変わり、自国の恵まれない人々の福祉よりも、金持ちになることに関心を持つようになっていく。」

B は第③段落第3文、1949年の英国の男子生徒に対する意識調査結果であり、第4文に書かれている今の若者の意識とは逆である。A は第③段落、C は第④段落前半、D は第④段落最終文、E は第⑥段落第5文参照。

3 語句の意味の把握

「本文の下線部の語に関する、以下の各文を完成させるのに最も適切なものを選びなさい。」という設問。

- 1 “unwavering” のここでの意味は：A 「変化のない」 B 「完全無欠な；絶対に正しい」
C 「長期にわたる」 D 「揺るぎない」 E 「穏やかな」

下線部を含む文の意味は「…な国々も断続的には規制緩和に関心を示してきたが、何十年にもわたる社会立法と経済監視の解体に30年も（ ）献身を続けた点で、この両国に比肩し得る国などこれまでどこにもない」。前の第3文のコロン以下に「(この2国は) 規制緩和と市場資本主義を熱狂的に求める中心国」とあるように、両国は断固として規制緩和に深くかかわってきたわけで、commitment にかかる unwavering の意味はDである。「他の国も断続的には関心を示してきたが、両国は揺るぎない献身を続けた」という文脈も通る。

- 2 “exacerbates” のここでの意味は：A 「～を生み出す」 B 「～を取り除く」 C 「～を強調する」 D 「～を解決する」 E 「～を悪化させる」

下線部を含む文の意味は「所得格差は問題を（ ）」。次の第2文には「それで、米国と

英国では精神疾患の発生率が所得と密接に関連している」とあり、そのあとでは「人々同士の信頼関係にまで影響する」旨が述べられており、A「～を生み出す」よりE「～を悪化させる」が適切。

- 3 “lucrative” のここでの意味は: A「容易な」 B「幸運な」 C「儲かる」 D「尊敬に値する」 E「安全な」

下線部を含む文の意味は「今日の児童・生徒や大学生は（ ）仕事を探す以外のことなどほとんど想像もできない」。前文内容（1949年の英国の男子生徒の志向）と対照される内容で、あとの文では「物質的な豊かさの追求に取りつかれ、その他の多くのことには無関心な世代」と形容されているので、Cの意味になる。

4 内容の把握

「本文で筆者が論じていることの要約として最も適切なものを1つ選びなさい。」という設問。

- A 「20世紀初頭のある時期、西欧社会は不平等さが縮まりつつあったが、今、人々は人生の目的は金持ちになることで、政府はその達成を支援するためにあると信じている。」
- B 「英国と米国では現在、貧困から抜け出すのが、20世紀に比べずっと難しくなっているが、当時は普通の人たちも現在のCEOとほぼ同じくらい稼いでいた。」
- C 「スウェーデンやフィンランドのような国では、貧しい方がよい、なぜなら両国では英国や米国に比べ不平等さの度合いがはるかに低いからだ。」
- D 「経済の規制緩和を最も推し進めた社会において不平等さが大幅に拡大し、その結果さまざまな社会問題に苦しんでいる。」
- E 「約30年前までは、政府の果たす役割の1つは社会的不平等の水準を下げることだという合意があったが、これは現在、達成されている。」

本文はまず「現在、米国と英国で最も大きな個人の所得差が生じている」という導入内容で始まり、第③段落で「この2国が規制緩和と市場資本主義追求の中心国」であったことが説明され、そのあと第⑤段落以降、最後の第⑧段落まで、この結果生じた「ほんの一握りの富める者と圧倒的多数の貧しい人々という不平等が生み出すさまざまな社会問題」が論じられる展開になっている。したがって、Dが正解。

A 第②段落第2文に「19世紀末から1970年代までは不平等さは縮まりつつあった」とある。また、人生の目的と政府の役割については関連する記述が第⑥段落第1文中に見られるが、この文は第4文 Today's schoolchildren and college students ... 以降の「物質的な豊かさの追求に取りつかれた今の若い世代」に言及するために持ち出されたもので、「人々がそう信じている」と断じるのは飛躍である。B 第④段落からわかるように、両国では1970年代からすでに貧困・不平等が広まっており、その格差が広まりつつあるという内容で、当時でも所得差は存在した。C 本文はいずれにせよ「貧しい方がよい」などという結論が出るような内容ではない。E かつてそのような認識があり、それが機能したこともあったことは第②段落に書かれているが、現在は異なる。4つとも本論の要約とはかけ離れた文である。

第1段落

20世紀の初頭以来、私たちは不景気の時でさえ身の周りのいたるところで、無比の水準の個人的富を目にしている。住宅、宝石、車、衣類、ハイテクのおもちゃなど、過剰な消費財の派手な散財が過去の世代にわたって大幅に広がっている。米国、英国、そしてほんの一握りのその他の国で、個人資産の源として金融取引が商品やサービスの生産に大きく取って代わり、私たちがさまざまな種類の経済活動におく価値をゆがめてきた。富裕な人たちは貧しい人々と同様、常に私たちの間に存在してきた。しかし、他の誰と比べても、彼らは人が思い出せる限りのどの時代よりも裕福で目立っている。個人の特権はたやすく理解できるし説明もできる。それよりずっと難しいのは、私たちが陥ってしまった公然たる浅ましさがどれほど深いかを伝えることである。

- ☐ recession 「不景気；不況」
- ☐ unequalled 「無比の；無類の」
- ☐ conspicuous 「目立つ；人目を引く」
- ☐ consumption 「消費」
- ☐ redundant 「過剰な」
- ☐ consumer goods 「消費財」
- ☐ expand 「拡大する」
- ☐ financial transaction 「金融取引」

- ☐ displace 「～に取って代わる」
- ☐ private fortune 「個人資産」
- ☐ distort 「～をゆがめる」
- ☐ relative to ～ 「～と比べて」
- ☐ in living memory 「（現存する人の）思い出せる限りの」
- ☐ privilege 「特権」
- ☐ squalor 「浅ましさ」

第2段落

私たちが陥ってしまった深みを理解するには、まず私たちに襲いかかった変化の大きさを正しく理解する必要がある。19世紀末から1970年代にかけて、西側の先進社会はどれも不平等さが縮まりつつあった。累進課税、貧困層への政府の助成金、社会福祉の提供、深刻な不幸に対する保証などのおかげで、現代民主主義は極端な富や貧しさを減らしていた。確かに、大きな差はあった。基本的に平等主義のスカンジナビア諸国と南ヨーロッパのずっと多様な社会ではその特色（貧富の差が少ないこと）が残り、反面、北米や大英帝国の英語圏の国々は長年の階級区別を反映し続けた。しかし、各国ともそれぞれ過度の不平等に対する不寛容の高まりに影響され、個人的な不足を補うための公的支給に着手し始めたのである。

- ☐ appreciate 「～を正しく理解する」
- ☐ overtake 「～に襲いかかる；～の身に突然降りかかる」
- ☐ progressive taxation 「累進課税」
- ☐ subsidy 「助成金；補助金」
- ☐ provision 「提供；支給」
- ☐ social service 「社会福祉」
- ☐ acute 「深刻な」
- ☐ egalitarian 「平等主義（者）の」

- ☐ distinctive 「特色のある」
- ☐ class distinction 「階級区別」
- ☐ in one's own way 「自分〔それ〕らしいやり方で；それなりに」
- ☐ intolerance 「不寛容」
- ☐ immoderate 「過度の」（⇔ moderate 「適度な」）
- ☐ compensate for ～ 「～を補う；補償する」
- ☐ inadequacy 「不足」

第③ 段落

この 30 年間に私たちはこうしたものすべてを投げ捨ててしまった。むろん「私たち」というのは国によって異なる。この上なく極端な個人的特権と公衆の無関心が米国と英国で再浮上してきた。この 2 国は規制緩和と市場資本主義を熱狂的に求める中心国だ。▶ ニュージーランドとデンマーク、フランスとブラジルほど遠くかけ離れた国々も断続的には規制緩和に関心を示してきたが、何十年にもわたる社会立法と経済監視を解体するのに 30 年も揺るぎない献身を続けた点で、この両国に比肩し得る国などこれまでどこにもない。

▶ 1 (第 4 文) 比較の表現

Although countries (as far apart as New Zealand and Denmark, France and Brazil)

S ~ as far apart as ... 「…ほど遠くかけ離れた～」

have expressed periodic interest ...

V O

- ☐ resurface 「再浮上する」
- ☐ epicenter 「中心地」
- ☐ deregulated market 「規制緩和（された）市場」
(deregulation 「規制緩和」)
- ☐ capitalism 「資本主義」

- ☐ periodic 「断続的な」
- ☐ unravel 「～を解体する」
- ☐ social legislation 「社会立法」
- ☐ oversight 「監視」

第④ 段落

2005 年には米国の国民所得の 21.2% はわずか 1% の稼ぎ手のものとなった。ゼネラルモーターズの CEO が、報酬及び手当として、典型的な GM の労働者 1 人に支払われる金額の約 66 倍の金を手取りで受け取った 1968 年と比較してみるがよい。今日、ウォールマートの CEO は自社の平均的な従業員の給与の 900 倍稼いでいる。実際、ウォールマート創業者一族の 2005 年の富は、米国の人口の 40% を占める下層階級、すなわち 1 億 2000 万人の人々の富とほぼ同じ (900 億ドル) だと見積もられた。今、英国も——収入、富、健康、教育、機会において——1920 年代以降のどの時代よりも不平等になっている。英国には EU の他のどの国よりも貧しい子供たちが多い。1973 年以来、手取り給与の不平等は米国を除くどの国より英国で高まった。1977 年から 2007 年までに英国で生み出された新しい仕事のほとんどは、給与水準の最上限か最下限のいずれかであった。

- ☐ accrue to ~ 「(お金が) ~のものとなる」
- ☐ CEO = chief executive officer 「最高経営責任者：会長」
- ☐ take home ~ 「手取りで～をもらう」
- ☐ Wal-Mart = Wal-Mart Stores, Inc. (世界最大手の米国小売業者)

- ☐ founder 「創業者：創設者」
- ☐ take-home pay 「手取り給与」
- ☐ high end 「上限」 ⇔ low end 「下限」
- ☐ pay scale 「給与水準」

第5 段落

その結果は明白だ。世代間の流動性が崩壊した。両親や祖父母たちとは対照的に、今日の英国の子供たちは、米国の子供たちと同様、自分たちが生まれた状況の改善をほとんど期待していない。貧しい者は貧しいままなのだ。圧倒的多数にとっての経済的不利は、結果として不健康、教育を受ける機会の損失、そして——ますます増える——うつのおなじみの症状であるアルコール依存、肥満、ギャンブル、軽犯罪行為などにつながる。失業者や不完全雇用者はそれまで身につけたどんな技能があろうとそれを失い、慢性的に経済にとっては余分な存在となってしまう。病気や早死には言うまでもなく、そこには不安とストレスが頻繁に伴う。

- ☐ mobility 「(階層・職業などの) 流動性」
- ☐ translate into ~ 「結果として~になる; ~に変わる」
- ☐ depression 「うつ」
- ☐ alcoholism 「アルコール依存 (症)」

- ☐ obesity 「肥満」
- ☐ criminality 「犯罪行為」
- ☐ the underemployed 「不完全雇用者」
- ☐ chronically 「慢性的に」
- ☐ superfluous to ~ 「~に余分 [不必要] な」

第6 段落

所得格差が諸問題を悪化させる。それで、米国と英国では精神疾患の発生率が所得と密接に関連しているのに対し、欧州大陸全体の国々ではこの2つの指標はまったく関連がない。同胞に対する信用や信頼でさえ、所得差とは好ましくない一致が見られる。1983年から2001年の間に米国、英国、アイルランド——規制されない個人の利己主義という教義が最も熱心に公共政策に取り入れられた3国——では不信感が顕著に増加した。^{▶2}これに相当するほどの相互不信の増加が見られた国は他にはどこにもなかった。

▶ 2 (第4文) 否定語句が文頭に置かれた倒置

In no other country was a comparable increase in mutual mistrust to be found.

否定の副詞語句 → ①

V-

S

-V → ②

- ① A comparable increase in ... was to be found in no other country. の in no other country 「他のどの国でも...ない」を強調するため文頭に出したもの。
- ② was to be found は be to do の表現で、ここでは「可能」を表す (= can be found)。

- ☐ income disparity 「所得格差」
- ☐ incidence 「発生率」
- ☐ correlate to ~ 「~と関連する」
- ☐ fellow citizen 「同胞」
- ☐ mistrustfulness 「不信感」

- ☐ dogma 「教義」
- ☐ self-interest 「利己主義; 私利私欲」
- ☐ assiduously 「根気強く」
- ☐ comparable 「相当する」
- ☐ mutual mistrust 「相互不信 (感)」

第7段落

さらに、不平等はただそれ自体に魅力がないというにとどまらない。それが、根本的な原因に注意を払わない限り、対処することを望むべくもない社会問題に符号するのは明らかだ。乳児死亡率、平均寿命、犯罪行為、囚人数、精神疾患、失業、肥満、栄養失調、十代の妊娠、違法薬物使用、経済的不安定、個人の負債、そして不安が、欧州大陸に比べなぜ米国と英国でこんなに著しいのかには理由がある。

▶3 富める少数と貧困化した多数の広がりが大きければ大きいほど、社会問題はそれだけ悪化する。これは裕福な国にも貧しい国にも同様に当てはまりそうな意見である。問題なのはある国がどれくらい裕福かではなく、どれくらい不平等かということだ。だから、1人当たりの国民所得あるいはGDPから言えば世界で最も豊かな国々の2つであるスウェーデンとフィンランドでは最も豊かな層と貧しい層のギャップが非常に小さく——そして、測定可能な幸福度では常に世界をリードしている。逆に、米国はその巨大な富の総額にもかかわらず、こうした測定基準では常に下位に位置する。米国は医療に莫大な額を費やすが、その平均寿命はボスニア以下でアルバニアをわずかに上回るに過ぎない。

▶3 (第3文) <the +比較級..., the +比較級...>

The wider the spread between ... (is), the worse the social problems (become)

C S V C' S' V'

<the +比較級..., the +比較級...> 「～すればするほど…」の表現が用いられ、「Sが広ければ広いほど、S'はそれだけ悪くなる」の意味。本文のように、この構文ではしばしばVが省略される。第④段落第3文もこの表現が用いられている (the more intelligent the boy (was) the more likely he was to ... 「その生徒が知的であればあるほど…する可能性が高かった」)。また、文構造のバランスの関係で、あとの節で倒置が起こることもある (11の選択肢G参照)。

- ☐ address 動「～(問題)に対処する」
- ☐ underlying 「根本的な」
- ☐ infant mortality 「乳児死亡率」
- ☐ life expectancy 「平均寿命」
- ☐ malnutrition 「栄養失調」
- ☐ pregnancy 「妊娠」
- ☐ insecurity 「不安定」

- ☐ indebtedness 「負債」
- ☐ impoverished 「貧困化した」
- ☐ affluent 「裕福な」
- ☐ per capita income 「1人当たりの国民所得」
- ☐ GDP = gross domestic product 「国内総生産」
- ☐ well-being 「幸福；福祉」
- ☐ aggregate 「総計の」

第8段落

▶4 つい最近の1970年代までは、人生の目的は金持ちになることで、政府はそれを促進するためにあるという考えは嘲笑されたであろう——資本主義の従来の批判者だけでなく、資本主義の最も忠実な擁護者の多くからもだ。戦後の数十年間は、富そのものへの相対的な無関心が広まった。1949年に行われた英国の男子生徒に対する調査では、知的な生徒ほど単に給料が高いだけの仕事より、賃金はそう高くなくても興味深い職を選ぶ傾向があることがわかった。今日の児童・生徒や大学生は儲かる仕事を探す以外のことなどほとんど想像もできない。物質的な豊かさの追求に取りつかれ、その他の多くのことには無関心な世代を育ててしまったことに対して、どのように償いを始めるべきなのだろうか。たぶん、自分たち自身と子供たちに、いつもこうだったわけではないことを思い出させることから始められるかもしれない。この30年間私たちがやってきた「エコノミスト的」思考は人間にとって本質的なものではない。今とは違った形で自分たちの人生を整えていた時代があったのだ。

▶ 4 (第 1 文) 主語に仮定の意味が含まれる仮定法過去

As recently as the 1970s, the idea that ... and that ... would have been ridiculed —

「つい最近の 1970 年代までは」

「嘲笑されたであろう」

同格関係「…で…だという考え」

not only by ~ but also by

「~によってだけでなく…によっても」

主語の「…という考え」に仮定の意味 (if you had expressed the idea that ...「もし…という考えを述べていたとしたら」) が含まれる。なお、この文は「それなのに、その後わずか 30 年でそれが当たり前のような社会になってしまっている」というニュアンスで段落後半につながる。

☐ facilitate 「～を促進する」

☐ ridicule 「～をあざける」

☐ staunch 「忠実な」

☐ make amends for ~ 「～を償う」

☐ (be) obsessed with ~ 「～に取りつかれる」

☐ pursuit 「追求」

☐ economically 「エコノミスト (経済専門家) 的に」

☐ intrinsic 「本質的な」

☐ order 「～を整える；規制する」

● 導入

- ① (ℓ. 1) All around us, ..., we see a **level of individual wealth unequalled since the early years of the twentieth century.**

▶ 20 世紀の初頭以来、私たちは身の周りのいたるところでかつてないほどの水準の個人的富を目にしている。

● 本論

- ② (ℓ. 14) From the late nineteenth century until the 1970s, **the advanced societies of the West were all becoming less unequal.**

▶ 19 世紀末から 1970 年代にかけて、西側の先進社会はどれも不平等さが縮まりつつあった。

- ③ (ℓ. 26) **The greatest extremes of private privilege and public indifference have resurfaced in the US and the UK: epicenters of enthusiasm for deregulated market capitalism.**

▶ この 30 年間に、規制緩和と市場資本主義を熱心に求める米国と英国で、極端な個人的特権と公衆の無関心が再浮上してきた。

- ④ (ℓ. 42) ... inequality in take-home pay increased more in the UK than anywhere except the US.

▶ 手取り給与の不平等は英国と米国とで高まっている。

- ⑤ (ℓ. 46) The consequences are clear. There has been a **collapse in intergenerational mobility:**

▶ その結果、世代間の流動性が崩壊した。

- ⑥ (ℓ. 56) **Income disparity exacerbates the problems.**

▶ 所得格差は諸問題を悪化させる。

- ⑦ (ℓ. 65) **Inequality, ... clearly corresponds to social problems ...**

▶ 不平等が社会問題に符号するのは明らかだ。

- ⑧ (ℓ. 92) Thinking “**economistically,**” ..., is **not intrinsic to humans.**

▶ 「エコノミスト的」思考は人間にとって本質的なものではない。

要約 ここ 30 年にわたって経済の規制緩和を最も熱心に推進してきた英米において個人の所得格差や社会的不平等が大幅に拡大した。その結果、世代間の流動性が崩壊し、圧倒的多数の低所得者がさまざまな社会問題に苦しんでいる。(102 字)

15 宗教と科学

問題編 p.63

16世紀になって近代科学が萌芽すると、それまでは絶対であった宗教との間に対立が生じ、科学が発展するにつれてその対立は深まっていっていった。西欧世界におけるこの宗教と科学の長きにわたる闘争の根底にあるものについて考えてみよう。

● 解答 正しい答えをチェック

- ① 宗教と科学の長い闘争における勝敗の問題。(20字)
- ② scientific technique
- ③ 科学は観察とそれに基づく推論により個々の事実を発見し、次に事実どうしを結びつけて未来の出来事を予見できる法則を発見しようとする試みなのに対し、宗教は事実や法則ではなく、教会、教義、個人の道徳律という3つの不可欠な要素で成り立つものである。(119字)
- 【別解】 科学は観察とそれに基づく推論という方法でまず個々の事実を見出し、次に事実相互を結びつける法則を導き出す一連の過程であるが、社会現象としての宗教の場合は、その成立、存続の前提として教会、教義、個人の道徳律という3つの不可欠な要素が存在する。(119字)
- ④ このような主張は、(それらが)科学的観察によって反証されると、科学によって考え方を变えるよう強いられるまでほとんどのキリスト教徒がそう信じたように、聖書の言葉にはすべて聖霊が込められていると信じる人々に困難をもたらすことになる。

⑤ ① × ② × ③ × ④ ○ ⑤ ○

● 解説 考え方をチェック

1 内容の把握

第①段落第2, 3文参照。下線部(1)までの文脈は「宗教と科学の長期にわたる闘争においてこれまで常に科学が勝利してきたのだが、科学に基づく新たな布教活動手段を備えた新しい宗教がロシアとドイツに現れるに至って、科学時代の幕開け期と同様、再びその問題は疑わしくなっている」というもの。put ~ in doubtは「~を疑わしくする；~を問う」という意味で、「その問題」とは「宗教と科学の長い闘争における勝敗の問題」ということになる。本文はvictorious「勝利を得た」という語を使っているので「宗教と科学の(長い)闘争における勝敗の問題」と書くのが望ましいが、「力関係；優劣の問題」でもよい。

2 指示語の把握

下線部(2)の前の文は「科学のこの理論的な側面(theoretical aspect)と結びついて科学技術(scientific technique)というものが存在する」と始まり、which以下でその科学技術とは

「科学的知識を利用し、昔は不可能だったかずっと高価であった快適さや贅沢を生み出すものだ」と説明される。ここから「この理論的な側面」が the **former** aspect であり、「科学技術 = scientific technique」が this **latter** aspect であることがわかる。

3 内容の把握

科学については第②段落、宗教については第④段落で述べられている。

●科学：第②段落第1文参照。(全訳)の構文解説も参照のこと)

「科学は観察とそれに基づく推論という手段により、まず世界に関する個々の事実を発見し、次に事実どうしを結びつけて(運がよい場合には)未来の出来事の見込みを可能にする法則を発見しようとする試みである。」→①「観察とそれに基づく推論により個々の事実を発見」、②「次に事実どうしを結びつける法則を発見しようとする(試み)」という2つのポイントを中心にまとめる。「未来の出来事の見込みが可能な法則の発見」は必ずしもなくてもよい。

●宗教：第④段落第2文および第5文参照。

「歴史上偉大な宗教はいずれも3つの側面を持つ、すなわち(1)教会、(2)教義、(3)個人の道徳律である。」「この3つの要素はすべて、…社会現象としての宗教には不可欠なものであり、科学との闘争において主要な関わりを持つものだ。」→③「教会、教義、個人の道徳律という3つの側面」、④「宗教には不可欠なもの(要素)」という2つのポイントを中心にまとめる。

答案作成上のポイント

主として太字で示した部分を中心にまとめればよいが、宗教に関しては「この3つの側面」が「宗教の成立(および存続)に不可欠な要素」であり前提となっている点が、観察と推論から出発し、法則の発見へ至る過程を持つ科学と根本的に違うことがわかるように少し言葉を補ってまとめるのがポイント。

採点のポイント

①「観察とそれに基づく推論により個々の事実を発見」(4点)

(○)「観察と推論により個々の事実を発見」

(△)「観察とそれに基づく推論により事実を発見」(-1点)「個々の」の訳脱。

②「次に事実どうしを結びつける法則を発見しようとする(試み)」(4点)

(○)「次に事実どうしを結びつけて未来の出来事を見込みできる法則を発見しようとする(試み)」

(○)「次に事実相互を結びつける法則を導き出そうとする(試み)」

③「教会、教義、個人の道徳律という3つの側面(要素)」(4点)

(×)「3つの側面」「教会、教義、個人の道徳律」が挙げられていないもの。

④「宗教には不可欠なもの(要素)」(3点) + 科学との違いの補足(2点)、計(5点)

(○)「(事実や法則ではなく)～という不可欠な要素で成り立つ」

(○)「(社会現象としての)宗教は～という不可欠な要素を前提に成り立つ」

➡ まとめ表現・字数制限（全体から減点）

（○）科学は～なのに対し，宗教は…である。

（○）科学は～。一方〔それに対し〕，宗教は…である。

（×）109 字以下，121 字以上のもの（-3 点）

4 文構造の把握

図解

Such assertions, [when they are refuted by scientific observation,] cause difficulties
for those [who believe, (as most Christians did / until science forced them to think
otherwise,) that every word of the Bible is divinely inspired].

語句 ・ assertion 「主張」 ・ refute 「～に反証する；～の間違いを証明する」

・ cause difficulty 「困難をもたらす」 ・ otherwise 「別なふうに」

・ be divinely inspired 「聖霊が込められている」

- Such assertions ... cause difficulties for 「このような主張は～に困難をもたらす」文の主語 such assertions のあとに when they are ... 「それらが…されると」が挿入されている。
- those who believe ... that every word of the Bible is divinely inspired 「聖書の言葉にはすべて聖霊が込められていると信じる人々」関係代名詞節中の動詞 believe の目的語である that 節の前に as 節が挿入されている。
- as most Christians did until science forced them to think otherwise 「科学によって考え方を变えるよう強いられるまでほとんどのキリスト教徒がそう信じたように」as most Christians did の did は believed のことで，「そう信じたように〔信じたのだが〕」と書く方が意味がはっきりする。

答案作成上のポイント

上の図のように，まず文の中心を成す構造をしっかりとらえ，それに1つ目の副詞節，次に2つ目の副詞節というふうに組み込んで訳文全体を仕上げるとよい。

採点のポイント

配点 15 点

- ① Such assertions, ∧ (③) cause difficulties for (3 点)
- ② those who believe, ∧ (④) that every word of the Bible is divinely inspired. (4 点)
- ③ when they are refuted by scientific observation, (3 点)
- ④ as most Christians did until science forced them to think otherwise, (5 点)

① Such assertions, cause difficulties for 「このような主張は～に困難をもたらす」 (3点)

→ Such assertions (1点)

(○) 「このような事実問題に関する主張は」

→ cause difficulties for (2点)

(○) 「～に困難を生む [生じさせる]」

(○) 「～を困難な立場に立たせる [追いやる]」

② those who believe, that every word of the Bible is divinely inspired.

「聖書の言葉にはすべて聖霊が込められていると信じる人々」 (4点)

→ those who believe, that (2点)

(×) 「…と信じるそれらのもの」 those who ... 「…する人たち」の構文がとれていないもの。

→ every word of the Bible is divinely inspired (2点)

(○) 「すべての聖書の言葉は聖霊 [靈感] に満ちている」

(○) 「すべての聖書の言葉は神の意思 [御心] を反映している」

(△) 「すべての聖書の言葉は神のようである」 (-1点)

③ when they are refuted by scientific observation, 「それらが科学的観察によって反証されると」 (3点)

→ when they are refuted (2点)

(○) 「それらが反駁 [否定] されると」

(○) 「それらが異議を唱えられると」

(△) 「それらが拒否されると」 (-1点)

→ by scientific observation (1点)

④ as most Christians did until science forced them to think otherwise, 「科学によって考え方を
を変えるよう強いられるまでほとんどのキリスト教徒がそう信じたように」 (5点)

→ as most Christians did (2点)

(○) 「ほとんどのキリスト教徒がそうしたように」

(○) 「ほとんどのキリスト教徒はそう信じた [そうした] のだが」

(△) 「ほとんどのキリスト教徒がそうしたので」 (-1点) 接続詞 as の意味がとれていないもの。

→ until science forced them to (2点)

(○) 「科学が…するよう (彼らに) 強いるまで」

(○) 「科学によって…せざるを得なくなるまで […することを余儀なくされるまで]」

→ think otherwise (1点)

(○) 「別なふうに考える [考えを改める]」

(×) 「別な方法で考える」「ほかのことを考える」 otherwise の意味がとれていないもの。

Unit 1	1
Unit 1	2
Unit 1	3
Unit 1	4
Unit 1	5
Unit 2	6
Unit 2	7
Unit 2	8
Unit 2	9
Unit 2	10
Unit 3	11
Unit 3	12
Unit 3	13
Unit 3	14
Unit 3	15

5 内容の把握

- ①×「人類の精神史上古くから社会生活に重要な役割を果たしてきたのは宗教で、それまで真に科学と呼べるようなものは存在しなかったが、16世紀になって突如科学が台頭し、それ以来、宗教は徐々に力を弱めて、科学に比肩し得ないものとなった。」

第①段落第1文、while the latter (= science), after a fitful flickering existence among the Greeks and Arabs, suddenly ... 参照。fitful は「断続的な」、flickering は「明滅する」という意味で日本語には訳しにくい表現だが、「断続的に現れたり消えたりという形でギリシャ人やアラブ人の間に存在した」という意味。さらに、続けて「16世紀になって突如科学が台頭した」とはあるが、**1**でも確認したように「再びその勝敗の問題は疑わしくなってきた」と続くので、科学に比肩し得ないものになってしまったわけではない。

- ②×「科学の発展を支えたのは、科学の進歩は人々の生活を便利で快適なものにしていくことができるという現実的な裏づけであり、今後、宗教が一般の人々の精神的な支えとしてさらなる科学の時代を生き延びるのはかなり難しいと思われる。」

第②段落第2、3文は「科学技術というものが昔は不可能だったか非常に高価であった快適さや贅沢を生み出すので、科学は科学者でない人々にとっても非常に重要な意味を持つ」という内容で選択肢文の前半に一致するが、後半「今後、宗教が…かなり難しいと思われる」はどうか。第④段落最後の2文には「科学と闘争してきたのは社会現象としての宗教であり、純粋に個人的な宗教は、(科学が反証できる主張を避けることに甘んじている限り、) 最も科学的な時代においても平穩に生き続けるだろう」とあり、矛盾する。

- ③×「科学者たちの革命的な教えは自分たちの権威を弱め、道徳も低下させると思われたので、聖職者たちが彼らを恐れるのはやむを得ないことだったが、世俗の支配者たちにとっては、自分たちの権力を高めるのでむしろ好都合だった。」

第④段落第2、3文に関連する内容であるが、第2文の they (= those who questioned creeds = men of science) were thought to be undermining morality「道徳を低下させている」を受け、第3文は Secular rulers, (therefore, as well as Churchmen,) felt that they had good reason to fear ... となっている。that 節の they は主語の secular rulers「世俗の支配者たち」で、「(したがって聖職者たちと同様に) 自分たちも…を恐れる十分な理由がある」と感じたのである。「自分たちの権力を高めるのでむしろ好都合だった」というようなことは本文には書かれていない。

- ④○「キリスト教と科学の長い対立には2種類あり、1つは聖書に書かれている具体的な事柄の事実問題をめぐる闘争、もう1つはキリスト教が重視する教義や神学的哲学原理に科学が反論する場合に生じる、より深刻な闘争である。」

第⑤段落の第2文以降参照。第2文には these conflicts have been of two kinds とあり、1

つ目の例として、第3文で聖書の中の「野うさぎは反芻をする」という**事実**に**反する**記述が取り上げられ、第4文にはそういう場合、聖書を信じる人は科学の反論で窮地に追い込まれる旨が述べられている。そして第6文には There is, however, a deeper conflict when science controverts some important Christian dogma, or some philosophical doctrine which ...「科学が重要なキリスト教の教義や…哲学的な原理に反論する場合にはより深刻な闘争が存在する」とあり、これが2つ目に当たる。したがって本段落内容に一致する。

- ⑤〇「殺人がいけないのはモーゼの十戒がそれを戒めているからだという答えは聖書の権威に基づくもので、その権威は聖書が全面的に受け入れられない限り無傷ではいられない。これはキリスト教と科学の対立に深くかかわる問題である。」

第⑥段落第3文 Suppose ... 以下を参照。ここでは「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いに対して、「モーゼの十戒で禁じられているから」という答えが科学の台頭以前にはたいていの人を納得させた、と書かれている。そしてこの議論についての筆者の見解は「それは聖書の権威に基づいており (rests upon the authority of the Bible)」、その権威は「聖書が全面的に受け入れられた場合にのみ保全され得る (can only be maintained intact)」とある。これは選択肢の第1文の内容に一致する。また、第⑤段落第6文からわかるように、キリスト教に関していえば宗教と科学の闘争は「**聖書の権威対科学の論証**」だったのであり、第2文にも一致する。

● 全訳 ◀ 英文内容をチェック ▶

第1段落

宗教と科学は社会生活の2つの側面であり、前者は人類の精神史で私たちが知る限りの最古にまでさかのぼってずっと重要なものであり続けたのに対し、後者はギリシャ人やアラブ人の間に断続的に現れたり消えたりしたあと、16世紀になって突如重要性を帯び、それ以降、次第に私たちの世界の思想や制度を形作ってきた。宗教と科学は長期にわたる闘争を続けてきたが、ほんの数年前までは常に科学が勝利していた。しかし、ロシアとドイツに、科学に基づく新たな布教活動手段を備えた新しい宗教が現れ、科学時代の幕開け期と同様、再びその勝敗の行方は疑わしくなり、伝統的な宗教と科学的知識の間で行われてきた戦いの原因と歴史の検討が再び重要になってきた。

- ☐ spring into ~ 「急に~になる」
- ☐ mould 「~を形作る」
- ☐ prolonged 「長期にわたる」
- ☐ invariably 「常に」
- ☐ victorious 「勝利を得た」

- ☐ missionary activity 「布教活動」
- ☐ ground 「原因；根拠」
- ☐ warfare 「戦い」
- ☐ wage 闘 「~（戦争など）を行う」

第2段落

▶1 科学は観察とそれに基づく推論という手段により、まず世界に関する個々の事実を発見し、次に事実どうしを結びつけて（運がよい場合には）未来の出来事の予見を可能にする法則を発見しようとする試みである。科学のこの理論的な側面と結びついて科学技術というものが存在するが、それが科学的知識を利用して、科学以前の時代には不可能だったか、あるいは少なくともずっと高価であった快適さや贅沢を生み出す。科学者でない人々にとっても科学が非常に重要な意味を持つのは科学のこの後者の側面である。

▶1（第1文）複雑な構文

Science is the attempt to discover, (by means of observation, and reasoning based
 V → ① by means of ~「～によって」
 upon it,) first, particular facts about the world, and then laws (connecting facts with
 O₁ O₂ → ②
 one another and (in fortunate cases) making it possible to predict future occurrences).

① the attempt を修飾する形容詞用法の不定詞 to discover の目的語として particular facts ... と laws ... が並列した形。

② connecting ... と making it ... の2つの現在分詞の句が laws を後ろから修飾している。

☐ occurrence 「出来事」

☐ theoretical 「理論的な」

第3段落

宗教は、社会的に考察すれば、科学よりも複雑な現象である。歴史上偉大な宗教はいずれも3つの側面を持つ。すなわち(1)教会、(2)教義、(3)個人の道徳律である。これら3つの要素の相対的な重要性は時代と場所の違いで大きく異なってきた。ギリシャやローマの古代宗教は、ストア学派によって倫理性を与えられるまでは個人の道徳に関して大して言うべきものを持っていなかった。イスラム教においては、教会は世俗の君主に比べそれほど重要ではない。近代のプロテスタント思想には、教義の厳しさを緩和しようとする傾向がある。にもかかわらず、この3つの要素はすべて、その比重の違いはあっても、社会現象としての宗教には不可欠なものであり、科学との闘争において主要な関わりを持つものだ。純粋に個人的な宗教は、科学が反証できる主張を避けることに甘んじている限り、最も科学的な時代においても平穩に生き続けるだろう。

☐ creed 「教義」

☐ code 「規律；規範」

☐ ethical 「倫理的な」

☐ temporal 「世俗の」

☐ monarch 「君主」

☐ rigor 「厳しさ」

☐ be content to do 「…することに満足する〔甘んじる〕」

☐ disprove 「～に反証する」

☐ undisturbed 「平穩な」

第4段落

教義は宗教と科学との間の争いの知的源泉であるが、その対立の激しさは教義が教会や道徳規範と結びつくことに起因してきた。教義に疑いを抱く者は聖職者の権威を弱め、おそらくはその収入も減らしたことだろう。さらに、道徳的な義務は聖職者によって教義から導き出されたものなので、彼らは道徳を低下させていると思われた。したがって、聖職者たちと同様、世俗の支配者たちも、科学者たちの革命的な教えは恐れるに足る十分な理由があると感じたのである。

☐ bitterness 「激しさ」

☐ Churchman 「聖職者」

☐ undermine 「～を弱体化させる」

☐ morality 「道徳（性）」

☐ deduce 「～を導き出す」

☐ secular 「世俗の」

第5段落

以下では、科学一般でもまた宗教一般でもなく、両者がこれまで衝突してきた、あるいは現在もなお衝突している諸点を取り扱うことにする。キリスト教世界に関する限りでは、これらの闘争には2種類あった。時々聖書の中には、例えば、野うさぎは反芻をするといった事実問題に関する主張をしている文章が見られることがある。このような主張は、（それらが）科学的観察によって反証されると、科学によって考え方を变えるよう強いられるまでほとんどのキリスト教徒がそう信じたように、聖書の言葉にはすべて聖霊が込められていると信じる人々に困難をもたらすことになる。しかし、問題となる聖書の主張に本来の宗教的な重要さがない場合には、それらを釈明するのも、あるいは、聖書は宗教や道徳に関する事柄についてののみ権威があるのだと結論して論争を避けるのも難しいことではない。しかしながら、科学がある重要なキリスト教の教義や、神学者たちが正統信仰に不可欠だと考えているある哲学的な原理に反論する場合には、より深刻な闘争になる。大まかに言って、宗教と科学との不一致は、最初は前者の類であったが、次第に、キリスト教の教えの重要な部分と考えられる、あるいは考えられていた問題にますます関係するようになっていった。

☐ in what follows 「以下では」

☐ nor yet 「（…ばかりか）～でさえもなく」

☐ come into conflict 「衝突する」

☐ in the past （現在完了時制で）「従来；これまで」

☐ chew the cud 「反芻する」

☐ inherent 「本来の」

☐ explain away 「～を釈明する」

☐ controversy 「論争」；controvert 「～に反論する」

☐ authoritative 「権威のある」

☐ doctrine 「原理；理論」

☐ theologian 「神学者」

☐ orthodoxy 「正統信仰」

第6段落

今日の宗教的な人々は、中世に存在したようなキリスト教世界の教義のほとんどは不必要なもので、実際、宗教生活にとって単なる障害にすぎないと感じている。しかし、科学が遭遇した抵抗をもし私たちが理解しようというのであれば、そうした抵抗を正当なものだと思わせた思想体系に想像力を働かせて立ち入ってみなければならない。例えば、ある人間が司祭になぜ人を殺してはいけないのかと問うとしよう。「絞首刑になるだろうから」という答えは不適当だと思われるだろう。絞首刑にするにはそれなりの正当な理由が必要だろうし、また警察の捜査手段がしっかりしていなくて殺人者の大部分は逃げおおせるからだ。しかし、科学が台頭する以前には、ほとんどの人を満足させたと思われる1つの答えがあった。すなわち、シナイ山で神がモーゼに啓示した十戒によって殺人は禁じられているから、というものだ。この世の裁きを免れた罪人も神の怒りからは逃れられなかった。それは悔い改めない殺人者に絞首刑よりはるかに恐ろしい罰を下すものだった。しかしながら、このような議論は聖書の權威に基づくもので、聖書が全面的に受け入れられた場合にのみそのまま維持されるものだ。聖書が地球は動いていないと述べているように思える時には、ガリレオの主張にかかわらず、あくまで聖書の言うことを信じなければならない。▶²なぜなら、そうでないと、殺人者やその他すべての種類の犯罪者を励ますことになってしまうからだ。このような議論を受け入れる人は今ではほとんどいないだろうが、それをばかげたものとみなすことはできないし、▶³またそれに基づいて行動する人がいても道徳的な非難の目を向けるべきでもない。

▶2 (第8文) otherwise の用法

When the Bible ..., since otherwise we shall be giving encouragement to ...

「もしそうでなければ」= if we do not do so

下線部(3)の think otherwise は「別なふうに」に意の副詞であったが、ここでは if not 「もしそうでなければ(聖書の言うことを信じなければ)」の意味で接続詞的に使われている。そのあとの「～を励ますことになってしまう」は先の「天罰を逃れられない罪人」の話を受けたもので、「聖書が全面的に受け入れられなければ(理屈上) こういう結果になってしまう」という意味である。

▶3 (第9文) <nor + (助) 動詞 + S> 「そしてまた…ない」

... it cannot be regarded as absurd, nor should those [who acted upon it] be viewed

nor 助動詞 S ▲

with moral reprobation.

否定の文や節のあとに続けて「そしてまた…ない」と続ける場合、nor のあとは通例、倒置形になり(助)動詞 + S の語順になる。ここでは「また S は…されるべきでもない」の意味。

☐ hindrance 「障害」

☐ **encounter** 「～に遭遇する」

☐ **priest** 「司祭」

☐ inadequate 「不適切な」

☐ justification 「正当化する理由」

☐ **reveal** 「～を啓示する」

☐ elude 「～を免れる」

☐ decree 「～を定める〔下す、命ずる〕」

☐ rest upon [on] ～ 「～に基づく」

☐ intact 「そのままで；完全で」

☐ adhere to ～ 「～(考え)に固執する」

☐ malefactor 「犯罪者」

☐ absurd 「ばかげた；不条理な」

☐ reprobation 「非難」

- 1 From *HAPPIER* by Tal Ben-Shahar copyright © 2007 by Tal Ben-Shahar, McGraw-Hill Education. Reproduced with permission of The McGraw-Hill Companies
- 2 From *A MAN WITHOUT A COUNTRY* by Kurt Vonnegut, copyright © 2005 by Kurt Vonnegut
- 4 From *DISAPPEARING LANGUAGES* by Rosemarie Ostler (*WHOLE EARTH*, Spring, 2000)
- 5 From *WORDS, WORDS, WORDS ...* by John C. Condon
- 6 From *DO PALS MATTER MORE THAN PARENTS?* by Judith Rich Harris (*THE TIMES*, August 9, 2007), copyright © 2007 by Judith Rich Harris. Used by permission of NI Syndication Ltd
- 7 From *DON'T JUST STAND THERE, THINK* by Drake Bennett (*THE BOSTON GLOBE*, January 13, 2008), copyright © 2008 by Drake Bennett. Used by permission of The New York Times Syndication Sales Corporation
- 8 From *SOLDIERS' TALE* by Samuel Hynes, copyright © 1997 by Samuel Hynes. Used by permission of Viking Penguin, a division of Penguin Group (USA) Inc.
- 9 Mark Vernon, *The Meaning of Friendship*, published 2005, Palgrave Macmillan, reproduced with permission of Palgrave Macmillan
- 10 From *DON'T LET DEATH RUIN YOUR LIFE* by Jill Brooke, copyright © 2001 by Jill Brooke. Used by permission of Dutton, a division of Penguin Group (USA) LLC.
- 11 From *WHEN TO CHOOSE IS TO LOSE* (September 01, 2007)(posted on <http://www.psychologytoday.com/articles/200708/when-choose-is-lose>) by Nando Pelusi copyright © 2014 by Sussex Publishers Used by permission by Sussex Publishers, LLC
- 12 From *LOOKING FOR THE LIE* by Robin Marantz Henig (*The New York Times*, February 5, 2006), copyright © 2006 by Marantz Henig. Used by permission of The New York Times Syndication Sales Corporation
- 13 *PHILOSOPHY OF SCIENCE: A VERY SHORT INTRODUCTION* by Okasha (2002) 900w from pp.40-42 © Samir Okasha 2002. By permission of Oxford University Press
- 14 From *ILL FARES THE LAND* by Tony Judt, copyright © 2010 by Tony Judt. Used by permission of The Penguin Press, a division of Penguin Group (USA) Inc.
- 15 *RELIGION AND SCIENCE* by Bertrand Russell (1961): Extract of 1000 words (from "Religion and Science are" (p.7) to "with moral reprobation" (p.11). By permission of Oxford University Press, USA

合格へ導く 英語長文 **Rise 読解演習 4. 最難関編** (東大・早慶上智レベル)

初版第1刷発行	2013年3月10日
初版第4刷発行	2016年5月1日
著者	杉田直樹
発行人	藤井孝昭
発行	株式会社 Z会 〒411-0943 静岡県駿東郡長泉町下土狩 105-17 TEL 055-976-9095 http://www.zkai.co.jp/books/
装丁	山口秀昭 (Studio Flavor)
印刷・製本	日経印刷株式会社
DTP	株式会社 デジタルプレス

© 杉田直樹 2013 ★無断で複写・複製することを禁じます

定価はカバーに表示してあります

乱丁・落丁はお取り替えいたします

ISBN978-4-86066-922-5 C7082